いまじゅく　ごろうえ

今宿五郎江12

――今宿五郎江遺跡第３次調査報告――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1180集

２０１３

福岡市教育委員会

題字は、福岡市南区在住の書家　珠 荷（辛川容子）氏の揮毫による

いまじゅく　ごろうえ

今宿五郎江12

――今宿五郎江遺跡第３次調査報告――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1180集

調査番号　８７２８
遺跡略号　ＩＺＧ－３

２０１３

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面した福岡市は、いにしえより大陸文化の窓口として栄え優れた文化を絶え間なく受け入れてきました。そのために弥生時代から中世にかけての遺跡が拡がり、貴重な文物が数多く出土しています。近年の著しい都市化の波にさらされて失われてゆく文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、店舗の建設に先立って実施した今宿五郎江遺跡第3次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代中期末～古墳時代初めの竪穴住居や掘立柱建物を検出するなど多くの貴重な成果を挙げることができました。なかでも溝遺構からは多量の土器や石器などが検出されました。これは今宿地域の歴史を解明し、当時の人々の生活を解明かす上で貴重な資料となるものです。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告作成に至るまでの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して感謝の意を表する次第であります。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

れ い げ ん

1. 本書は、福岡市教育委員会が店舗の建設に先立って、昭和62(1987) 年9月10日ー11月26日までに福岡市西区今宿町字前田95－2・96－1で緊急発掘調査した今宿五郎江遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位で6° 20′ 西偏している。
3. 遺構は、竪穴住居をSC、掘立柱建物をSB、土壙をSK、溝遺構をSD、ピットをSPと呼称して記号化し、その後に遺構毎に通番して各々に01からナンバーを付した。
4. 本書に掲載した遺構の実測は小林義彦が、遺物の実測は小林と谷直子が行った。また、遺構と遺物の製図は小林と谷が行なったが、一部は林田憲三・林由起子の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺構の写真は小林が撮影した。遺物の写真は、文化財写真工房の岡紀久夫氏に委託したが、一部は小林が撮影した。
6. 本書の執筆・編集は谷と協議して小林が行ったが、土器分類表や遺物観察表は谷が作成した。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。また、住居跡や溝から出土した木器は福岡市埋蔵文化財センターでPEG含浸法によって保存処理し、同館に保管している。

調査番号：0641	遺跡略号：IZG－3	分布地図番号：112－0626
調査地籍：福岡市西区今宿町字前田95－2、96－1		
工事面積：1,116㎡	調査対象面積：1,160㎡	調査実施面積：900㎡
調査期間：1987年9月10日～11月26日		

本 文 目 次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
1．発掘調査にいたるまで …… 1
2．発掘調査の組織 …… 1
3．立地と歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の記録 …… 7
1．調査の概要 …… 7
2．調査の記録 …… 9
1）．竪穴住居 …… 9
2）．掘建柱建物 …… 11
3）．土 壙 …… 16
4）．溝遺構 …… 24
5）．その他の遺構と包含層の遺物 …… 47
Ⅲ．おわりに …… 48
付論．今宿五郎江遺跡第3次調査出土剝片石器について …… 49

挿 図 目 次

Fig. 1 周辺遺跡分布図（1／25,000） …… 2
Fig. 2 今宿五郎江遺跡位置図（1／3,000） …… 4
Fig. 3 今宿五郎江遺跡第３次調査区位置図（1／2,000） …… 5
Fig. 4 今宿五郎江遺跡第3次調査区周辺現況図（1／500） …… 6
Fig. 5 遺構配置図（1／150） …… 8
Fig. 6 1号住居実測図（1／60） …… 9
Fig. 7 1号住居出土遺物実測図（1／4） …… 10
Fig. 8 2号住居実測図（1／60） …… 10
Fig. 9 1・2号住居出土遺物実測図（1／4） …… 10
Fig. 10 1～6号掘立柱建物実測図（1／80） …… 12
Fig. 11 7～11号掘立柱建物実測図（1／80） …… 13
Fig. 12 12～14号掘立柱建物実測図（1／80） …… 14
Fig. 13 3・7・11号掘立柱建物出土遺物実測図（1／2・1／4） …… 15
Fig. 14 1～5号土壙実測図（1／30） …… 17
Fig. 15 6～11号土壙実測図（1／40） …… 18
Fig. 16 12～17号土壙実測図（1／30） …… 20
Fig. 17 18～21号土壙実測図（1／30） …… 22
Fig. 18 4・5・9号土壙出土遺物実測図（1／4・1／6） …… 22
Fig. 19 1号溝実測図（1／200） …… 23

Fig. 20　1号溝出土遺物実測図（1／1・1／2・1／4）…… 24
Fig. 21　2号溝実測図（1／100）…… 25
Fig. 22　2号溝東壁土層断面実測図（1／30）…… 26
Fig. 23　2号溝出土遺物実測図1（1／4）…… 27
Fig. 24　2号溝出土遺物実測図2（1／6）…… 28
Fig. 25　2号溝出土遺物実測図3（1／4・1／6）…… 29
Fig. 26　2号溝出土遺物実測図4（1／4・1／6）…… 30
Fig. 27　2号溝出土遺物実測図5（1／4・1／6）…… 31
Fig. 28　2号溝出土遺物実測図6（1／4・1／6）…… 32
Fig. 29　2号溝出土遺物実測図7（1／6）…… 33
Fig. 30　2号溝出土遺物実測図8（1／4）…… 34
Fig. 31　2号溝出土遺物実測図9（1／4）…… 35
Fig. 32　2号溝出土遺物実測図10（1／4）…… 36
Fig. 33　2号溝出土遺物実測図11（1／4）…… 37
Fig. 34　2号溝出土遺物実測図12（1／4）…… 38
Fig. 35　2号溝出土遺物実測図13（1／4）…… 39
Fig. 36　2号溝出土遺物実測図14（1／4）…… 40
Fig. 37　2号溝出土遺物実測図15（1／4）…… 41
Fig. 38　2号溝出土遺物実測図16（1／2・1／4）…… 42
Fig. 39　2号溝出土遺物実測図17（1／1・1／2）…… 43
Fig. 40　2号溝出土遺物実測図18（1／2・1／3）…… 44
Fig. 41　2号溝出土遺物実測図19（1／2・1／3）…… 45
Fig. 42　2号溝出土遺物実測図20（1／4）…… 46
Fig. 43　ピット出土遺物実測図（1／2・1／3・1／4）…… 47
Fig. 44　包含層出土遺物実測図（1／2）…… 47
Fig. 45　今宿五郎江遺跡環壕概念図（1／4,000）…… 48
Fig. 46　土器分類図1 …… 53
Fig. 47　土器分類図2 …… 54
Fig. 48　土器分類図3 …… 55
Fig. 49　土器分類図4 …… 56
Fig. 50　土器分類図5 …… 57

表 目 次

Tab. 1　今宿五郎江遺跡発掘調査一覧表 …… 7
Tab. 2　掘立柱建物一覧表 …… 11
Tab. 3　出土土器分類表1 …… 51
Tab. 4　出土土器分類表2 …… 52
Tab. 5　出土遺物観察表1 …… 58
Tab. 6　出土遺物観察表2 …… 59

Tab.　7　出土遺物観察表3 …… 60
Tab.　8　出土遺物観察表4 …… 61
Tab.　9　出土遺物観察表5 …… 62
Tab. 10　出土遺物観察表6 …… 63
Tab. 11　出土遺物観察表7 …… 64
Tab. 12　出土遺物観察表8 …… 65
Tab. 13　出土遺物観察表9 …… 66
Tab. 14　出土遺物観察表10 …… 67
Tab. 15　出土遺物観察表11 …… 68
Tab. 16　出土遺物観察表12 …… 69
Tab. 17　出土遺物観察表13 …… 70
Tab. 18　出土遺物観察表14 …… 71
Tab. 19　出土遺物観察表15 …… 72
Tab. 20　出土遺物観察表16 …… 73
Tab. 21　出土遺物観察表17 …… 74
Tab. 22　出土遺物観察表18 …… 74

図 版 目 次

PL.　1　1）調査区遠景（南西から）　2）調査区北側全景（西から）
PL.　2　1）1号住居（南から）　2）1号住居南壁際遺物出土状況（東から）
PL.　3　1）1号住居南壁際木器出土状況（東から）　2）2号住居（北から）
PL.　4　1）調査区北東部掘立柱建物群（南から）　2）1号掘立柱建物（西から）
PL.　5　1）3号掘立柱建物（南から）　2）3号掘立柱建物P－3遺物出土状況（南から）
PL.　6　1）2・10 号掘立柱建物（西から）　2）4・8号掘立柱建物（西から）
PL.　7　1）5号掘立柱建物（西から）　2）6・7号掘立柱建物（東から）
PL.　8　1）4・6～8・11 号掘立柱建物（北西から）　2）11 号掘立柱建物P－5遺物出土状況（東から）
PL. 9　1）9号掘立柱建物（南から）　2）6・12 ～ 14 号掘立柱建物（西から）
PL. 10　1）12・13 号掘立柱建物（北から）　2）6・14 号掘立柱建物（北から）
PL. 11　1）4～7号土壙（北から）　2）9号土壙（北から）
PL. 12　1）17 号土壙（東から）　2）19 号土壙（南から）
PL. 13　1）1号溝（南から）　2）1号溝北端部遺物出土状況（南から）
PL. 14　1）2号溝（西から）　2）2号溝東壁土層断面（西から）
PL. 15　1）2号溝 n･o － 2･3 上層遺物出土状況（北から）　2）2号溝k ･l － 2･3 上層遺物出土状況（北から）
PL. 16　1）2号溝 j･k － 1･2 中西部上層遺物出土状況（北から）　2）2号溝西半部下層遺物出土状況（東から）
PL. 17　1）2号溝東半部最下層遺物出土状況（西から）　2）2号溝東半部最下層遺物出土状況（北から）
PL. 18　1）2号溝最下層杓子出土状況（南から）　2）2号溝完掘状況（北から）

PL．19　出土遺物 1（縮尺不同）
PL．20　出土遺物 2（縮尺不同）
PL．21　出土遺物 3（縮尺不同）
PL．22　出土遺物 4（縮尺不同）
PL．23　出土遺物 5（縮尺不同）
PL．24　出土遺物 6（縮尺不同）
PL．25　出土遺物 7（縮尺不同）
PL．26　出土遺物 8（縮尺不同）
PL．27　出土遺物 9（縮尺不同）
PL．28　出土遺物10（縮尺不同）
PL．29　出土遺物11（縮尺不同）
PL．30　出土遺物12（縮尺不同）
PL．31　出土遺物13（縮尺不同）
PL．32　出土遺物14（縮尺不同）
PL．33　出土遺物15（縮尺不同）
PL．34　出土遺物16（縮尺不同）

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

今宿五郎江遺跡は、福岡市西区今宿字前田 95 － 2、96 － 1 に位置する。この地は、福岡市と糸島市を画する福岡市西郊の今宿平野にあり、昭和 60 年代初めまではのどかな田園風景が拡がっていた。ところが、市道志摩前原線や国道 202 号線バイパスの開通、更には伊都区画整理事業の進捗に伴ってショッピングモールや大規模店舗が軒を連ね周辺域は市街地化が急速に進んでいる。

昭和 61 年当時、今宿地域周辺での発掘調査事例は少なく、今宿五郎江遺跡を含めた今宿平野東部の歴史的様相は明らかではなかった。今回報告する今宿五郎江遺跡第 3 次調査は、市道志摩前原線に面して店舗を建設するものであった。申請地は、今宿五郎江遺跡として周知された遺跡内にあり、隣接する第 1 次調査区や第 2 次調査区の発掘成果から弥生時代の遺構が拡がっていることが予測されていた。

昭和 61（1986）年冬、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。これを受けて埋蔵文化財課では、隣接する第 1・2 次調査区で弥生時代中～後期の環濠集落や小銅鐸などの貴重な遺物が出土していることから、同年 12 月 22 日に試掘調査を実施して遺構の有無と拡がりを確認した。その結果、地表下 50cm で溝や大型のピットを確認し、掘立柱建物を初めとする弥生時代の集落が拡がっていることが確認された。遺跡は、本来現状での保存が望ましく保存にむけて協議を行ったが、計画案の変更は不可能なものであった。そこで福岡市教育委員会では発掘調査を実施して記録保存を図ることとした。発掘調査は、昭和 62(1987) 年 9 月 10 日に着手し、11 月 26 日に終了した。

2．発掘調査の組織

調　査　主　体	福岡市教育委員会
調　査　総　括	文化財部埋蔵文化財調査課（旧埋蔵文化財課）
	埋蔵文化財調査課長　　宮井善朗
	埋蔵文化財調査課第 1 係長　　常松幹雄
調査・整理庶務	埋蔵文化財審査課管理係　　古賀とも子
調　査　担　当	埋蔵文化財調査課第 1 係　　小林義彦
技　　能　　員	谷　直子
調査・整理作業	赤池春光　青柳聖子　荒巻ヤチ代　有田吉太　上原チヨ子　大瀬良清子
	木村良子　小林フミ子　坂田美佐子　柴田タツ子　津田和子　堤　滝代
	土斐崎孝子　富永純子　鳥巣良子　西島タミエ　野坂三重子　野坂康子
	花畑照子　馬場イツ子　原　早苗　平田政子　堀ウメコ　松本愛子　松本藤子
	松本雅子　吉岡アヤコ　吉岡員代　吉岡竹子　吉岡蓮枝　吉積ミエ子
	脇坂初子　脇坂ミサヲ

発掘調査から報告書作成までに 4 半世紀の時を要したにも関らず、数々の指導や助言を十分に生かせなかったことを深くお詫びするとともに、協力と理解をいただいた地権者をはじめ多くの方々に深く感謝します。殊に山口譲治氏（元埋蔵文化財第 2 課長）には、木器の保存処理から実測まで貴重な指導と助言を受けた。なお、文化財部は、組織改編のため平成 24 年 4 月 1 日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

Fig.1　周辺遺跡分布図（1／25,000）

3．立地と歴史的環境

福岡市の西縁には、背振山から派生した山塊が飯盛山から叶岳・長垂山を経て今津湾に注ぎ、早良平野と糸島平野を画している。この糸島平野の東縁には、東西が 3Km、南北が 1Km の細長い小平野が今津湾に沿って拡がっている。この今宿平野は、東に長垂山、西と南は高祖山から派生した小山塊によって画され、北は今津湾に面して弧状にのびる海岸砂丘の後背地にはラグーンが拡がっている。

今宿五郎江遺跡は、高祖山から延びる丘陵端の低丘陵上に占地している。この今宿五郎江遺跡の立地する今宿平野を概観すると、縄文時代から中世までの遺跡が連綿と続いている。殊に、弥生時代から古代には海岸砂丘上や扇状地上および高祖山から延びる丘陵上に数多くの遺跡が拡がっている。

今宿五郎江遺跡を中心に今宿平野を俯瞰すると、今津湾に面した北の海岸砂丘上には今宿遺跡があり、第 8 次調査区では縄文時代前期に遡る遺物包含層が確認されている。弥生時代前～中期の甕棺墓や土壙墓からは細型銅剣や硬玉製勾玉が出土している。更に古墳時代初めには製塩土器や蛸壺、滑石製石錘など漁労や製塩に関する遺物が出土しており、漁労や製塩集団の存在が想起される。砂丘の西端には弥生時代前期の石斧製作地として著名な今山遺跡があり、製作された太型蛤刃石斧は遠く大分県や熊本県など北部九州一帯に供給されている。

長垂山麓の平野東縁での調査例は少なく、詳細は未だ明らかでないが青木遺跡では弥生時代中期の竪穴住居や後期の甕棺墓が、鋤崎遺跡では弥生中期の竪穴住居が検出されている。また、山麓に沿って古代の官道が糸島平野から周船寺を経た後に、広石峠を越えて早良平野へと続いている。

一方、高祖山南麓の丘陵上では、大規模な集落域が拡がっている。今宿大塚古墳が立地する丘陵に拡がる大塚遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。なかでも第 12 次調査区では、今宿五郎江遺跡からのびる弥生時代後期の大規模な溝が検出されおり、遺跡を跨ぐ環壕が確認されている。第 14 次調査区では弥生時代後期後半の住居内から鍛冶炉が検出され切断した鉄片や作業台石が検出されている。同調査区では古墳時代から古代の製鉄炉や横口式炭窯も検出されている。同様の製鉄炉や炭窯は、叶岳北西麓の鋤崎遺跡でも検出されている。玄界灘一帯は、良質な砂鉄を産する花崗岩地帯であり、今宿平野の東縁から北西麓には良質な砂鉄を原料とした鉄生産地であったことが示唆される。これらの生産基盤に支えられて高祖山東麓から西麓の丘陵や段丘上には鋤崎古墳や今宿大塚古墳、若八幡宮古墳、丸隈山古墳を初めとする前～中期の前方後円墳が造営され、後期には鋤崎古墳群や相原古墳群、徳永古墳群など 500 基を超える群集墳が造営される。

大塚遺跡から西の高祖山北西麓の丘陵上に位置する徳永遺跡や女原遺跡では、6 ～ 7 世紀の竪穴住居が検出されており、徳永 A 遺跡では多量の赤焼土器が出土している。時期的には遡るが、南麓の丘陵部には第Ⅰ型式期に比定される新開窯跡があり、須恵器工人集団との関わりが注目されている。更に古代では、徳永 A 遺跡で越州窯系青磁などの輸入陶磁器が多量に出土している。地名に残る周船寺の名から大宰府主船司との関連性が指摘されている。これは今津湾と云う良好な港湾を間近に控え、更には早良平野と糸島平野の間に境を接する今宿平野の地理的な優位性が背景にあったと云えよう。

今宿五郎江遺跡に目を転じれば、調査区の北にある第 1 次調査区では、弥生時代後期初め～中葉の環濠が検出されている。この環壕に先行して弥生時代中期後葉～後期の溝が第 5 次調査区から第 3 次調査区を経て小銅鐸が出土した第 2 次調査区の 100 号溝まで繋がっている。第 2 次調査区では、この溝に多量の土器や石器を投棄したであろう中期中葉の竪穴住居や掘立柱建物が南台地で検出されている。また、第 9 次調査区では竪穴住居が、第 12・13 調査区では環濠が検出されている。更にこの環壕を二重あるいは三重に囲むような溝が第 13 次調査区から 9 次調査区を経て第 4 次調査区にのびており、弥生時代～古墳時代には拠点的集落の存在が想起される。

Fig.2　今宿五郎江遺跡位置図（1 ／ 3,000）

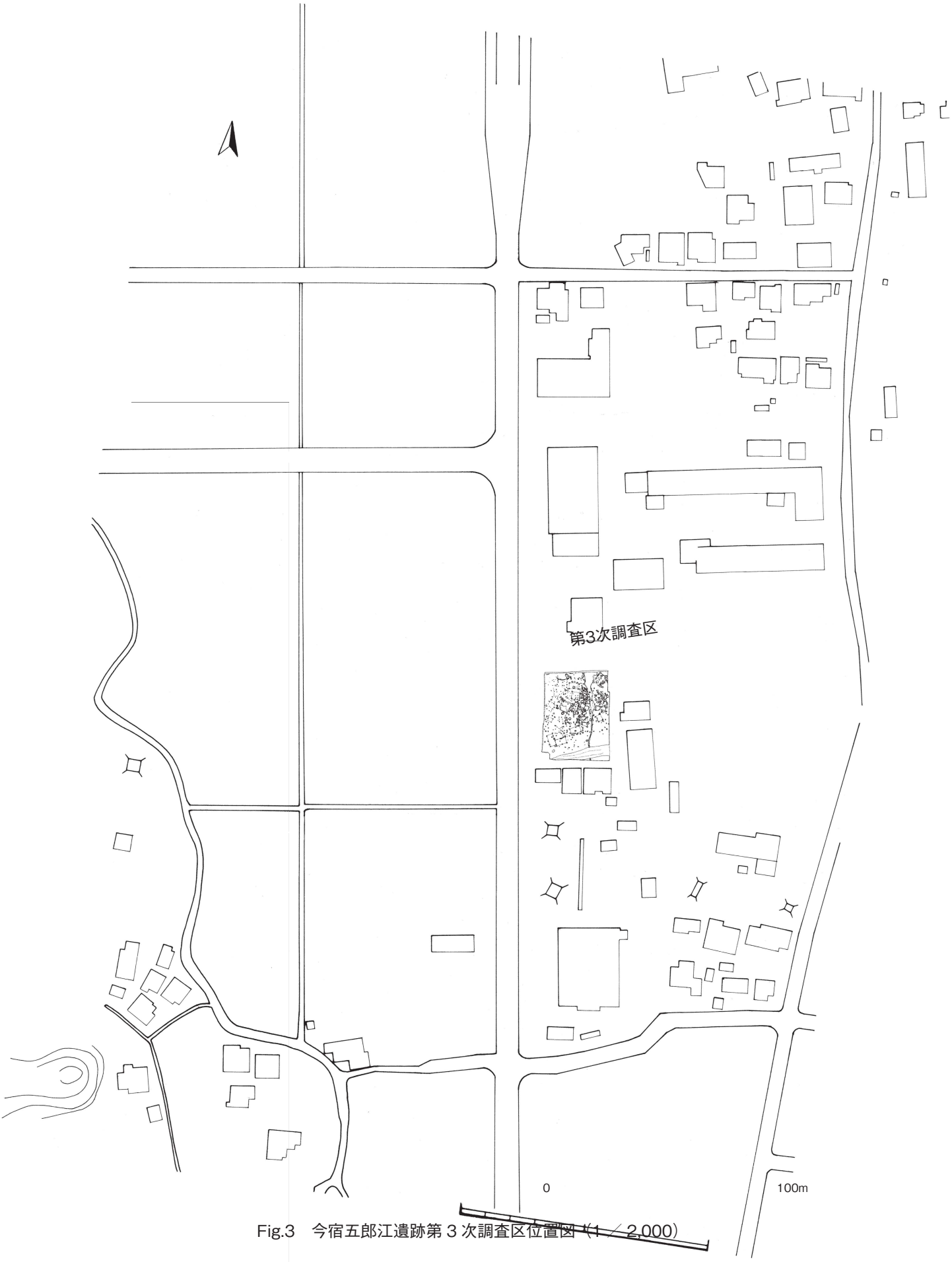


Fig.3　今宿五郎江遺跡第３次調査区位置図（1／2,000）

Fig.4　今宿五郎江遺跡第３次調査区周辺現況図（1／500）

II．調査の記録

1．調査の概要

今宿五郎江遺跡は、早良平野と糸島平野を画する叶岳～長垂山の西麓に拡がる狭長な今宿平野東縁部の七寺川左岸の低丘陵上に立地し、その分布域は南北が 400m、東西が 250m の範囲に亘っている。第 3 次調査区は、この今宿五郎江遺跡のほぼ中央部にあたり、東隣には第 5 次調査区が、西隣には第 2 次調査区があり、北へ 7m の距離には環壕を検出した第 1 次調査区がある。現況は水田で、標高は 5.0m。東隣の今宿小学校は客土されて 150cm ほど高い。

発掘調査は、昭和 62（1987）年 9 月 10 日の表土層の除去作業から開始した。排土の場内処理の必要性から2分割の調査区設定となった。はじめに北側から着手し、その調査終了後は直ちに排土を反転して南側の表土層を除去して調査を行った。層序的には水田耕土と薄い床土層が 15cm ほどあり、その直下は基盤層の鳥栖ローム層に至る。ここに竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が掘り込まれている。遺構検出面の標高は、北端部が 4.0m、南端部が 4.5m で南から北へむかって緩やかに傾斜している。

発掘調査の結果、調査区全域にわたって竪穴住居や掘立柱建物などが疎密なく検出された。このうち掘立柱建物は、東隣の第 2 次調査区でも弥生時代の掘立柱建物 72 棟が検出されており、低丘陵の西縁一帯には広範囲にわたって建物群が展開しているものと推考される。南端部では、想定外の溝遺構（SD-02）が検出されて、この溝内には多量の弥生土器や石器、木器が投棄されており、調査に多大の時間と労力を要した。後年の第 5 次調査でこの溝の延長部分が検出されており、遺物の出土状況も同様の在り方を示している。遺物は、弥生土器や土師器のほかに石製品や木製品などがコンテナケース 300 箱出土したが、その大半は 2 号溝からの出土品である。また、調査区は申請地の長辺に沿って 2m × 2m のグリットを任意に設定し、2 号溝の遺物はこのグリットに準じて取り上げた。なお、グリット軸線は磁北より 6°　17′　20″ 東偏している。

次数（改訂）	調査番号	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	報告書	時代	概要	遺物
1	8406	今宿	19840829 ～ 19840925	261.0	132			
2	8407	今宿字前田 78-3 外	19841101 ～ 19850331	6,000.0	238	弥生時代・中世	掘立柱建物・溝	弥生土器・石器・木器・小銅鐸・陶磁器
3	8728	今宿町字前田 95-2 外	19870910 ～ 19871126	900.0	本報告書	弥生時代	竪穴住居・溝・掘立柱建物	弥生土器・石器・木器
4	9253	今宿町字前田 94・97-1	19930208 ～ 19930220	81.0	479	弥生時代	溝・土壙	弥生土器・石器・木器
5	0055	今宿 137	20001219 ～ 20010131	150.0	737	弥生時代・中世	溝・土壙	弥生土器・石器・鉄器
6	0124	今　宿 136-2・-13・-16・109-5	20010912 ～ 20011016	385.0	年報 16	中世	溝	土師器・陶磁器・銅銭
7	0158	今　宿 136-2・-13・-16・109-5	20020218 ～ 20020306	386.0	年報 16	中世	土壙・柱穴・井戸	土師器・陶磁器・銅銭
8	0254	今宿町 108-1 他	20021222 ～ 20030108	297.0	872	古代	溝・土壙・柱穴	土師器・石鍋
9	0255	今宿町 79-1 他	20021222 ～ 20030331	3,520.0	872・924	弥生時代	竪穴住居・溝・柱穴	弥生土器・石器・木器・ガラス製品・金属製品
10	0420	今宿町 172-1 外	20040524 ～ 20050706	2,998.0	1009・1110・1137	弥生時代・古代	溝	弥生土器・鋳型・青銅器・陶磁器
11	0531	今宿町地内	20050708 ～ 20061209	6,900.0	1181	弥生時代	溝	弥生土器・木器・玉類・小形仿製鏡
12	0655	今宿町地内	20061201 ～ 20070309	1,340.0	1066	弥生時代	環濠	弥生土器・木器・石器・貨泉
13	0718	今宿 172-4	20070601 ～ 20071023	820.0	1109	弥生時代・古代	環濠の陸橋部	弥生土器・木器・青銅製鋤先・銅鏃・鋳造鉄斧・陶磁器・青銅製印章
14	1102	今宿町 75-2 外	20110419 ～ 20110713	834.2	1182			弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・陶磁器・土製品・石製品・金属製品
15	1121	今宿町 75	20110819 ～ 20111109	400.0	1183			土師器・須恵器・陶磁器・石器・鉄器・木器・ガラス製品
16	1220	今宿町 137	20121009 ～ 20121025	203.0		弥生時代		弥生土器

Tab. 1　今宿五郎江遺跡発掘調査一覧表

Fig.5　遺構配置図（1 ／ 150）

2. 調査の記録

今宿五郎江遺跡第3次調査では、古墳時代の竪穴住居2棟と弥生時代中期末～後期の掘立柱建物14棟、土壙21基のほかに溝遺構2条を検出したが、密度的には弥生時代の遺構が圧倒的に多い。弥生時代の柱穴には明瞭な柱痕跡を残しながらひとつの建物として把握できなかったものがあり、更に幾棟かの掘立柱建物があった可能性がある。また、調査区の南端には東西に流れる溝（SD－02）は、第2・5次調査区の溝と繋がり、その溝中には土器や石器、木器などが多量に投棄されていた。この傾向は北へ7mの距離にある第1次調査区で検出された環壕でも同じ在り方を示している。

1）竪穴住居（SC）

1号住居　SC－01　（Fig.6・7・9　PL.2・3・30）

1号住居は、調査区の中央部に位置する竪穴住居で、南西から東には2～9号土壙や13～20号土壙が、またその土壙群の外周を重複するように掘立柱建物群が取巻いている。平面形は、南北壁が410～430cmであるが、東西壁は北壁側が425cm、南壁側が330cmの台形状をした方形プランを呈し、床面積は約17㎡である。壁面は、北壁側がやや緩やかなほかは急峻に立ち上がる。壁高は、南壁が54cm、北壁が73cm。床面は平坦であるが、西壁側にむかってやや緩やかに傾斜している。床面は、地山土の黄褐色粘土を3～5cmの厚さで敷き固めて貼床としている。柱穴は、中央部にピットを挟んで西壁側に3ヶ所、東壁側に2ヵ所あり、不整形ながら対角線上に対峙しているが、主柱欠は特定できなかった。また、四壁ともに壁面の中位から直径が10～20cmの小さな斜抗が約47°の仰角で中央ピットへむかうように穿たれており、梁柱の一部と推考される。覆土は、暗褐色土が床面上まで凹レンズ状に厚く堆積しているが、壁面周辺には黄褐色粘土がブロック状に堆積

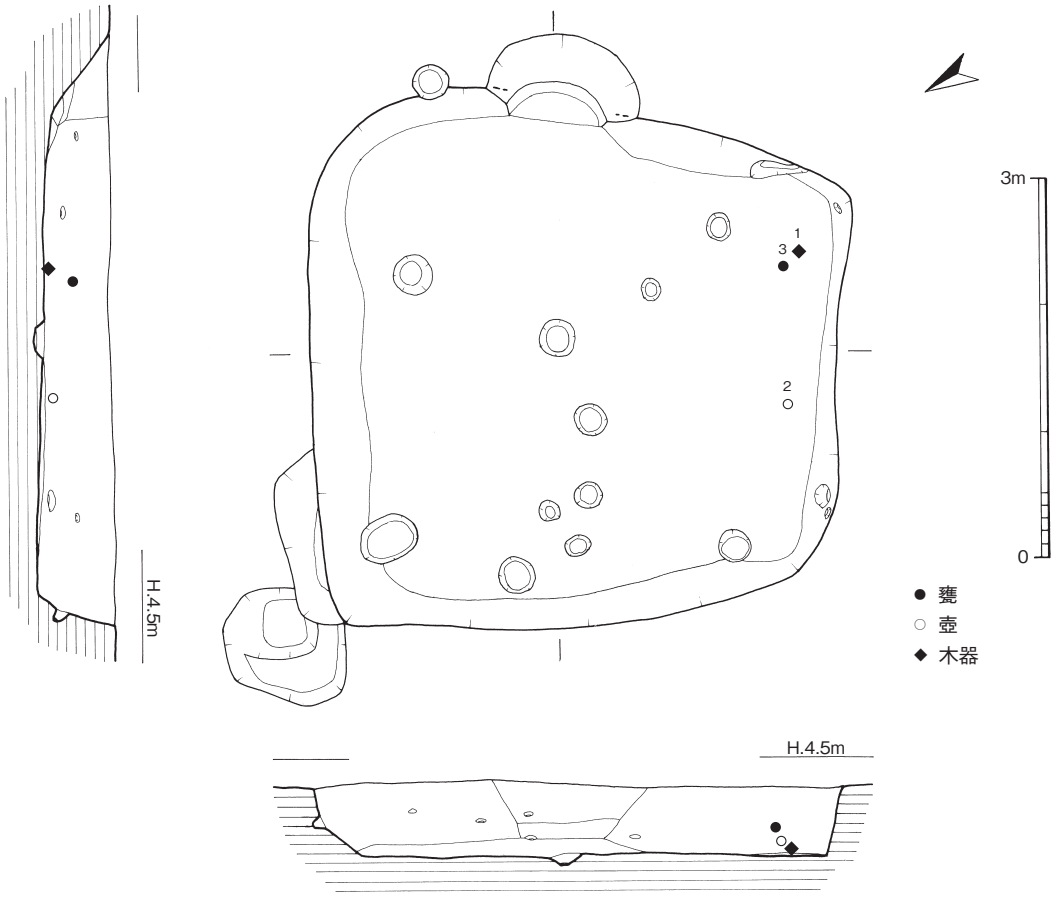


Fig.6　1号住居実測図（1／60）

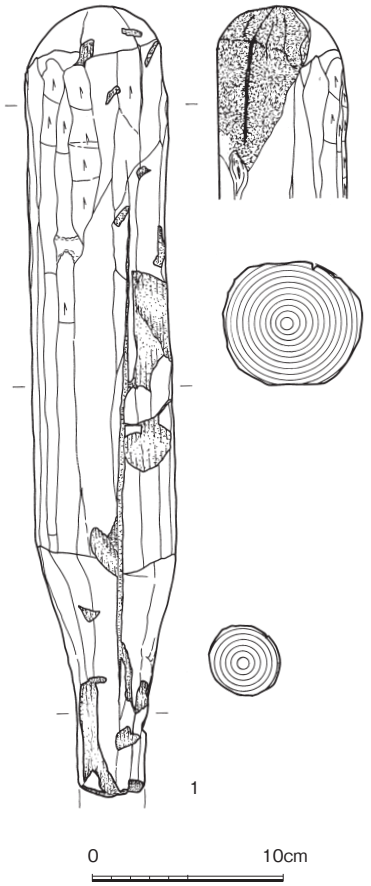


Fig.7　１号住居出土遺物実測図（1 ／ 4）

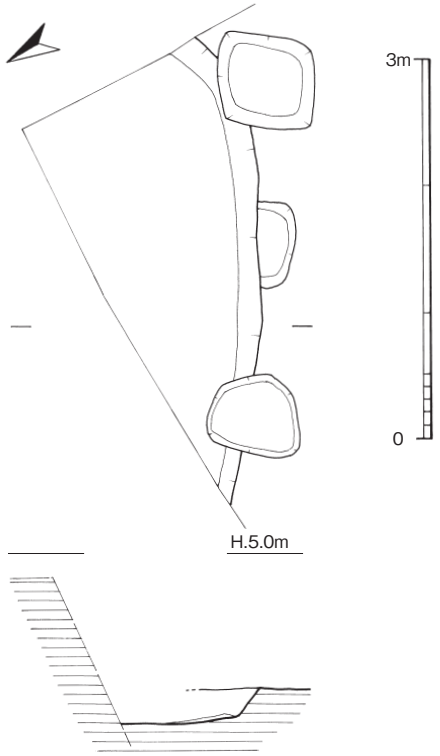


Fig.8　２号住居実測図（1 ／ 60）

していた。このブロック状の堆積は、通有の堆積とは異なり、何らかの意図的堆積と考えられる。南東隅壁では、このブロック塊の下から竪杵の半欠品が出土した。このほかの遺物は、土師器壺や甕片と砥石が出土した。

1は竪杵の半欠品を転用した槌である。クヌギの芯持材。現長は42.1cm、搗部長は30.2cm。握り部と搗端部の境は明瞭で、縦断面形は凸レンズ状をなす。

2・3は土師器壺である。2は口径が12.3cm。口縁部は垂直に立ち上がる頸部から小さく外反する。口頸部はヨコナデ、球形の胴部は押圧ナデ調整。胎土には砂粒を含み、淡赤褐色。3は口径が16.4cm。口縁部は、球形の胴部から鋭く外反する。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部外面はタテハケ目、内面は押圧ナデ後にヘラケズリ。胎土は粗く、粗砂粒を多く含む。淡黄褐色～淡赤褐色。

２号住居跡　SC－02（Fig. 8・9　PL. 3・30）

2号住居は、調査区の北東隅に位置し、5号建物の東梁柱を切っている。住居は南壁と南東隅壁を除いて大半が調査区外に拡がっているために全容は明らかでないが、一辺が5mほどの隅丸方形プランをなそうか。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は30cmである。床面は、中央部へむかってゆるやかに傾斜しており、浅い凹レンズ状をなすものと考えられる。また、黄褐色粘土ブロックを薄く固めて貼床としている。柱穴は、現状では未検出。遺物は、暗黄茶褐色土の埋土から、土師器甕片がわずかに出土した。

4は口径が16.4cm、器高が11.5cmの小型丸底壺である。口縁部はストレートに外反し、胴部は肩の張った倒卵形をなす。口縁部はヨコナデ、胴部は押圧ナデ、外面は目幅が1mmの細かいハケ目調整。胎土は精良で、焼成は良好。橙色。

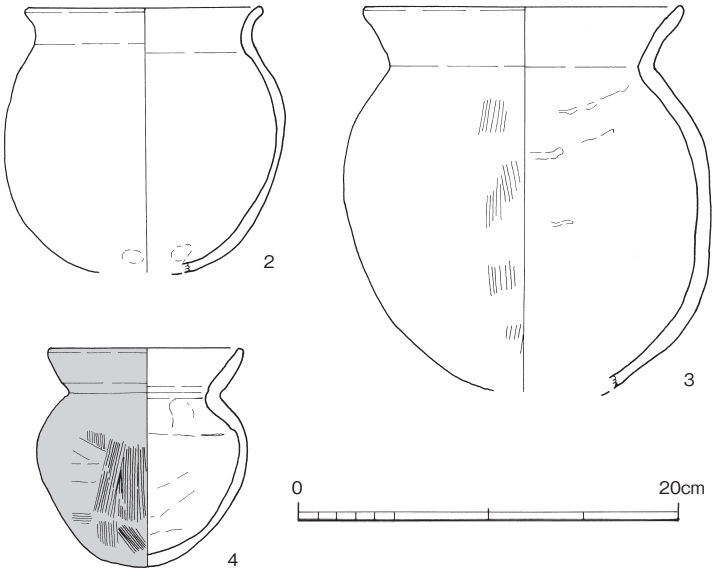


Fig.9　１・２号住居出土遺物実測図（1 ／ 4）

2）掘立柱建物（SB）

１号建物　SB－01　（Fig. 10　PL. 4）

１号建物は、調査区の北端に位置する東西棟の建物で、すぐ南には2号建物が、北には1号土壙がある。建物は、桁行長が360cm、梁行長が240cmを測る1間×1間で主軸方位をN－82°　－Wにとる。柱穴は、平面形が40～50cm、深さが30～40cmの方形プランを呈し、15cm径の柱痕跡が残っている。遺物は、弥生土器小片がわずかに出土した。床面積は、8.64㎡。

２号建物　SB－02　（Fig. 10　PL. 6）

２号建跡は、調査区の北部に位置する東西棟の建物で、10号建物と重複し、すぐ北には1号建物が、また南西には1号住居がある。建物は、桁行長が340cm、梁行長が290cmの1間×1間で、主軸方位をN－73.5°－Wにとる。柱穴は、35～50cmの方形プランを呈し、深さは25～45cmを測る。柱穴内からは12～15cm径の明確な柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器甕片等がわずかに出土した。床面積は、9.86㎡。

３号建物　SB－03　（Fig. 10・13　PL. 5・30）

３号建物は、調査区の東縁に位置する東西棟の建物で、5m北には5号建物が、南3mの距離には8号建物があり、すぐ西には1号溝が南流している。建物は、桁行長が300cm、梁行長が210cmの1間×1間で、主軸方位をN－88.5°－Wにとる。柱穴は、50～80cmの方形プランであるが、南西隅柱は不整な方形プランを呈する。深さは25～40cmで、直径が20cmのやや大きい柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器壺や甕片がわずかに出土した。床面積は、6.3㎡。

5は口径が17.5cmの壺である。頸部は直口ぎみに立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。丁寧なナデ調整。胎土は精良で、小～中砂粒を含み、焼成は良好。橙色。6・7は器台である。6は口径が11.2cm。短く外反する口縁部は肉厚で、ストレートに仕上げた端部は凹線状浅く窪む。内外面ともに押圧ナデ調整で、内面には絞り痕が残る。胎土は粗く、多くの小～中砂粒のほかに雲母微細と赤褐色粒を含む。淡黄橙～明赤橙色。7は口径が10.5cm、底径が11.9cm、器高は14.1cm。口縁部と底部は肉厚の体部から緩やかに外反する。内面は指先による押圧ナデ、外面はナデ後に粗いハケ目調整。胎土は粗く、細～石英中砂粒を多く含むほかに雲母微細を含む。

遺構No	規　模	桁行全長（cm）	桁行柱間（cm）	梁行全長（cm）	梁行全長（cm）	主軸方位	柱筋	床面積（㎡）	備　　考
SB-01	1間×1間	360		240		N-82°－W	東西	8.6	SB－26→SB－24
SB-02	1間×1間	340		290		N-73.5°－W	東西	9.8	
SB-03	1間×1間	300		210		W-88.5°－W	東西	6.3	SB－26→SB－24
SB-04	1間×1間	240		180		N-25°－W	南北	4.3	
SB-05	2間×2間	450	230・220	280	140・140	N-40.5°－E	南北	12.6	
SB-06	2間×1間	450	240・210	170		W-68°－W	東西	7.6	
SB-07	1間×1間	230		230		—	—	5.3	
SB-08	1間×1間	190		170		N-6.5°－E	南北	3.2	
SB-09	1間×1間	260		150		N-60°－E	東西	3.9	
SB-10	2間×1間	360	180・180	290		N-5°－E	南北	10.4	
SB-11	2間×1間	560	280・280	190		N-19°－W	南北	10.6	
SB-12	2間×1間	480	240・240	240		N-17°－W	南北	11.5	
SB-13	2間×1間	430	230・200	260		N-76.5°－E	東西	11.1	
SB-14	1間×1間	400		270		N-71.5°－E	東西	10.8	

Tab.　2　掘立柱建物一覧表

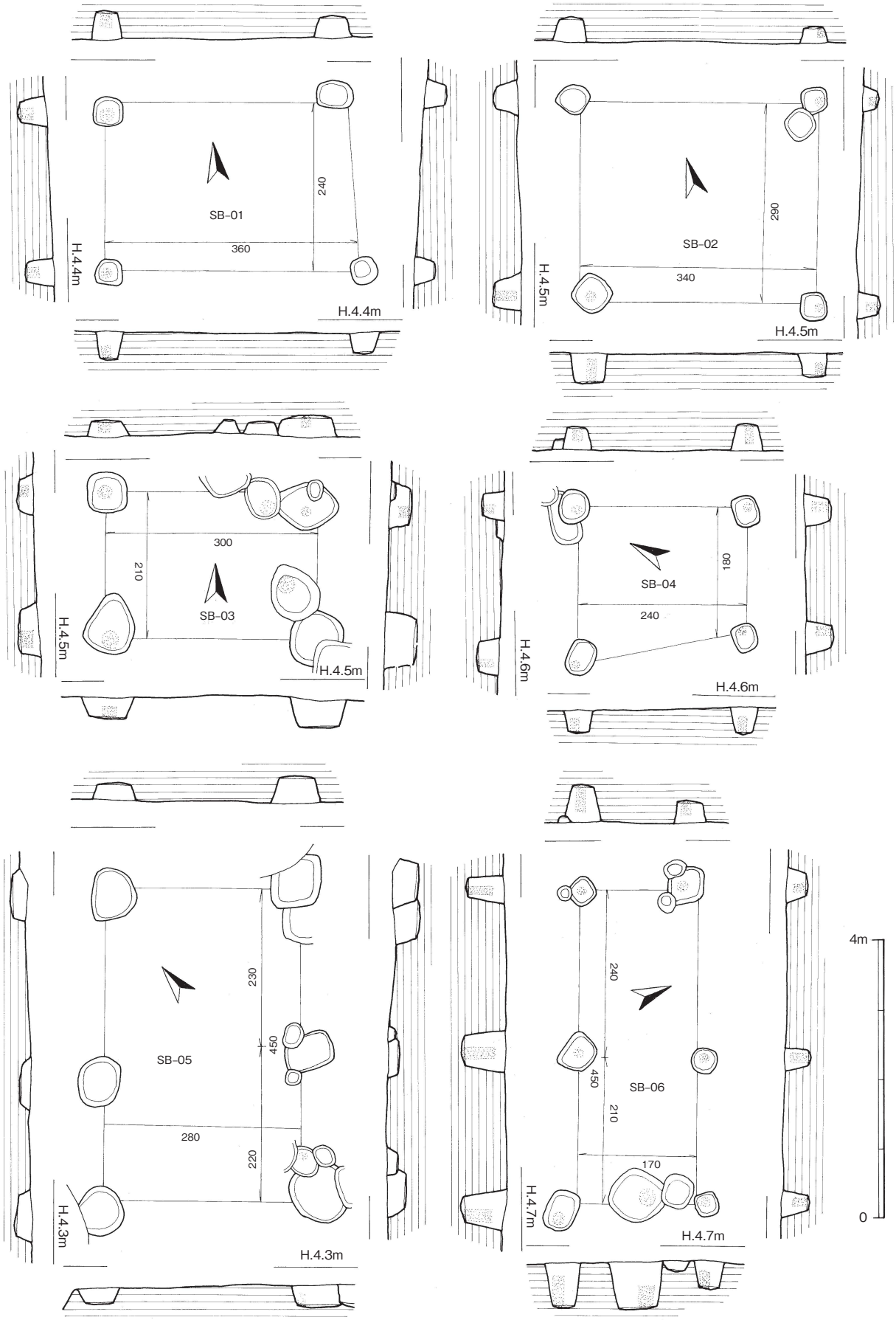


Fig.10　1～6号掘立柱建物実測図（1／80）

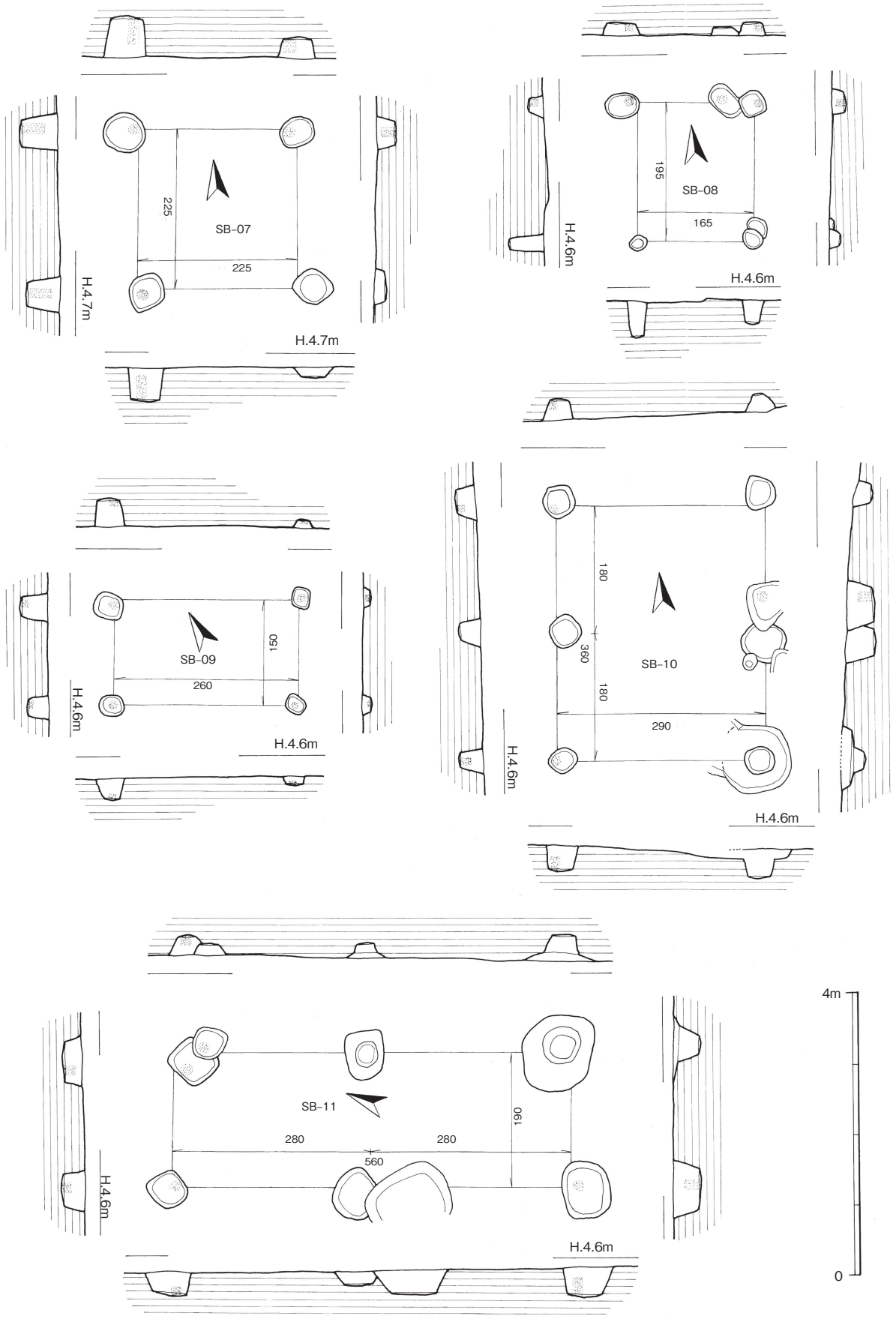


Fig.11　7～11 号掘立柱建物実測図（1 ／ 80）

4号建物 SB－04 (Fig. 10 PL. 6・8)

4号建物は、調査区の東辺に並ぶ3～5・8号建物の内で南に位置する南北棟の建物で、西には1号溝が南流する。建物は、桁行長が240cm、梁行長が180cmの1間×1間で、主軸方位はN－25° －W。柱穴は、長辺が35～50cm、短辺が35～40cmの方形プランをなす。深さは30～35cmを測り、直径が12～15cmの柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器壺や甕片が出土した。床面積は、4.32㎡。

5号建物 SB－05 (Fig. 10 PL. 7)

5号建物は、調査区の北東端にある南北棟の建物で、北梁柱は2号住居と南西隅柱は1号溝と重複している。また、南には3・4・8号建物が並んでいる。建物は、桁行長が450cmで柱間が220cm・230cmのほぼ等間、梁行長は280cmを測る2間×1間である。主軸方位は、N－40.5° －Eにとり、床面積は12.8㎡。柱穴は、一辺が約70cm、深さが25～40cmの方形プランをなし、覆土中からは弥生土器壺や甕片がわずかに出土した。

6号建物 SB－06 (Fig. 10 PL. 7～10・30)

6号建物は、調査区の中央部に位置する2間×1間の東西棟の建物で、北桁行柱は7号建物と重複している。建物は、桁行長が450cmで柱間が210cmと240cm、梁行長が170cmの東西に長い建物で、主軸方位をN－68° －Wにとる。35cm×35cm～50cm×60cmの方形プランをなす。深さは、35～65cmを測り、直径が15cmの柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器小片が出土した。床面積は、7.65㎡。

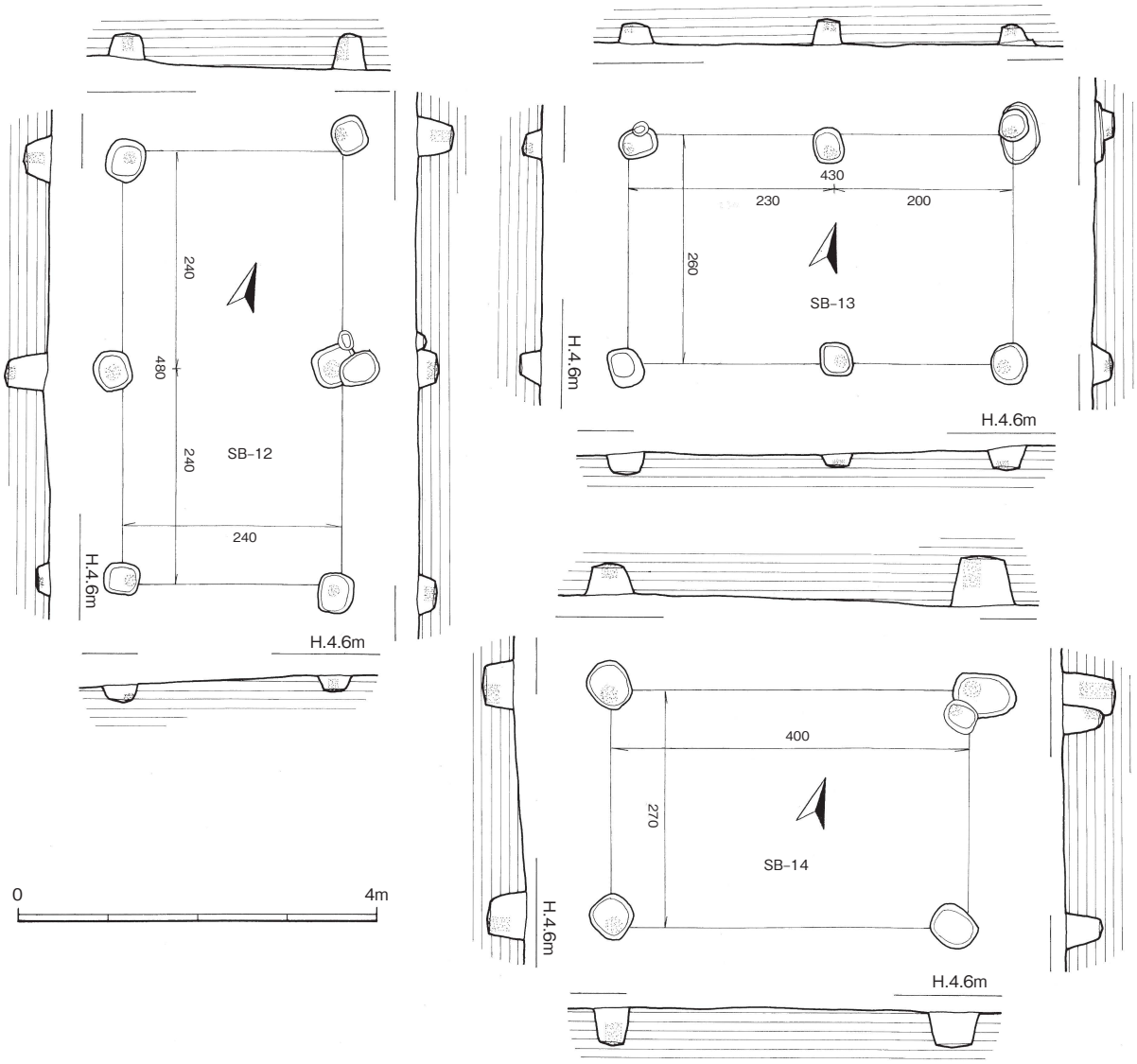


Fig.12 12～14号掘立柱建物実測図（1／80）

7号建物　SB－07（Fig. 11・13　PL. 7・8・33）

7号建物は、調査区の中央部に位置する正方形プランの建物で、北西隅柱は11号建物と南西隅柱は6号建物と重複している。また、すぐ東には1号溝が並行するように南流している。建物は、桁行長、梁行長とも225cmで、床面積は5.06㎡である。柱穴は、45cm×45cmの方形プランであるが、北西隅柱は55cm×60cmの円形プランをなしている。深さは、15～45cmを測り、直径が15cmの柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器小片がわずかに出土した。

8は滑石製石錘の基部である。現長は2.54cm、現幅は1.13～1.19cmで重さは11.1g。基部には孔径が0.3cmの紐通孔がある。縦筋の結節孔が刻まれており、下位にも円孔が穿たれていたと考えられる。

8号建物　SB－08（Fig. 11　PL. 6・8）

8号建物は、調査区の東辺に並ぶ3～5・8号建物群中にある南北棟の建物で、北西隅柱に接して10・11号土壙が、すぐ南西方には4号建物が位置している。建物は、桁行長が195cm、梁行長が165cmの1間×1間で、主軸方位をN－6.5°－Eにとる。柱穴は、長辺が20～45cm、短辺が20～35cmの円～楕円形プランをなすが、北東隅柱は一辺が35cmの方形プランをなす。深さは、20～50cmを測り、小径の柱穴ほど深い。直径が12～15cmの柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器壺や甕片が出土した。床面積は、3.21㎡。

9号建物　SB－09（Fig. 11　PL. 9）

9号建物は、調査区の西辺に位置する東西棟の建物で、1号住居の東辺にある建物群からやや離れた位置にあり、東へ7mの距離には1号住居が位置している。建物は、桁行長が260cm、梁行長が150cmの1間×1間で、主軸方位をN－60°－Wにとる。柱穴は、長辺が25～40cm、短辺が20～35cmの方形プランをなす。深さは15～38cmを測り、直径が10～15cmの柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器小片がわずかに出土した。床面積は、3.9㎡。

10号建物　SB－10（Fig. 11　PL. 6）

10号建物は、調査区の北東部に位置する南北棟の建物で、すぐ東には1号溝が、南には4～9号土壙が群在している。西側桁柱は2号建物と重複している。建物は、桁行長は360cmで柱間は180cmの等間、梁行長が290cmの2間×1間で、主軸方位をN－5°－Eにとるが、西桁柱の100cm内側に軒柱が付く可能性がある。柱穴は、長辺が40cm、短辺が30cmの方形プランをなす。深さは20～35cmで、一部の柱穴には柱径が12cmの柱痕跡が遺存していた。弥生土器甕片が出土した。床面積は、10.44㎡。

11号建物　SB－11

（Fig. 11　PL. 8）

11号建物は、調査区の中央部に位置する南北棟の建物で、南側梁柱は7号建物と重複し、南東隅柱は13号土壙を切っている。すぐ東には、4～9号土壙が群在し、西側には1号住居が

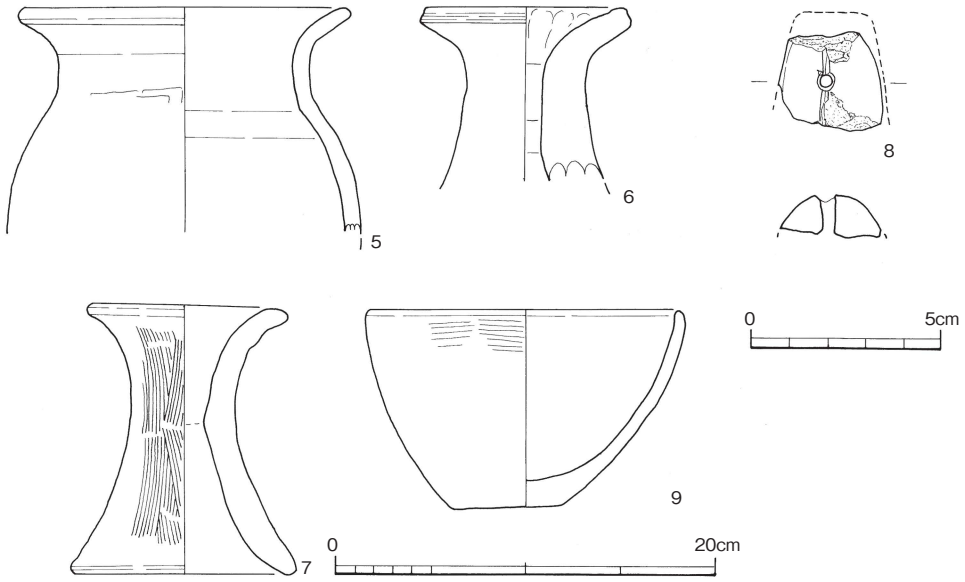


Fig.13　3・7・11号掘立柱建物出土遺物実測図（1／2・1／4）

ある。桁行長が560cmは柱間が280cmの等間、梁行長が190cmの2間×1間の建物で、主軸方位をN－19°－W。柱穴は、長辺が50～65cm、短辺が45～55cmの方形～不整方形プランで、深さは30～40cmを測る。柱穴からは、直径が15～18cmの柱痕跡が検出された。弥生土器小片が少量出土した。床面積は10.64㎡。

9は口径が16.4cm、底径が5.6cm、器高が10.6cmの鉢。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく直口する。調整は口縁部がヨコナデ、内面は押圧ナデ。胎土は良質で小～中砂粒を含み、橙褐色。

12号建物　SB－12（Fig. 12　PL. 9・10）

12号建物は、調査区の南西端にある南北棟の建物で、東側桁柱は13号建物の西側梁柱と重複するように接している。建物は、桁行長が480cmで柱間は240cmの等間、梁行長が240cmの2間×1間で、主軸方位はN－17°－Wにとる。柱穴は、一辺が40～50cmの方形プランをなす。深さは15～35cmで、直径が15～20cmの柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器壺や甕片が出土した。床面積は、11.52㎡。

15号建物　SB－13（Fig. 12　PL. 9・10）

13号建物は、調査区の南西端にある東西棟の建物で、西梁柱は2号建物と接し、東へ3mの距離には14号建物が位置している。建物の桁行長は430cmで柱間は200cmと230cm、梁行長が260cmの2間×1間である。主軸方位は、N－76.5°－Eにとり、床面積は11.18㎡である。柱穴は、長辺が35～45cm、短辺が30～40cmの方形プランであるが、東梁柱は円形プランをなしている。深さは、15～25cmを測り、直径が12～15cmの柱痕跡が検出された。遺物は、弥生土器壺や甕の小片がわずかに出土した。

14号建物　SB－14（Fig. 12　PL. 9・10）

14号建物は、調査区の南部に位置する東西棟の建物で、すぐ東には6号建物が、西には13号建物がある。建物は、桁行長が400cm、梁行長が270cmの1間×1間であるが、桁行長から中柱を有する2間の可能性が想起される。主軸方位をN－71.5°－Eにとり、床面積は10.8㎡。柱穴は、長辺が45～70cm、短辺が40～50cmの方～長方形プランをなし、深さは30～40cmを測る。柱穴からは15～20cmの柱痕跡が検出された。

3）土　壙（SK）

1号土壙　SK－01（Fig. 14　PL. 14）

1号土壙は、調査区北端部に位置し、4m南には1号建物がある。平面形は、長辺が107cm、短辺が100cmの不整な円形プランを呈する。緩やかに立ち上がる壁面は、削平が著しく深さは10～14cmを測る。壙底は、中央部が浅くんだ凹レンズ状をなす。覆土は、暗茶褐色土の単一層で弥生土器壺や甕・器台片がわずかに出土した。

2号土壙　SK－02（Fig. 14）

2号土壙は、調査区の北部にある小土壙で、1号建物と重複している。平面形は、長辺が102cm、短辺が82cmの卵形に近い不整円形を呈する。壁面は、西壁が緩やかなほかは急峻に立ち上がり、壁高は33～38cmを測る。壙底は、浅い凹レンズ状で、断面形は逆台形をなす。弥生土器壺や甕片が出土した。

3号土壙　SK－03（Fig. 14）

3号土壙は、調査区の北東部に位置し、すぐ東には1号溝や21号土壙があり、10号建物と重複している。西壁が消失しているが平面形は、短辺が95cmで長辺が140cmほどのやや不整な楕円形プランをなそう。壁面は、やや急峻に立ち上がり、壁高は25～32cmである。壙底は、中央部が浅く窪んだ凹レンズ状をなし、断面形は逆台形である。覆土は、少量の黄褐色粘土粒を含んだ茶褐色土の単一層で、弥生土器甕小片がわずかに出土した。

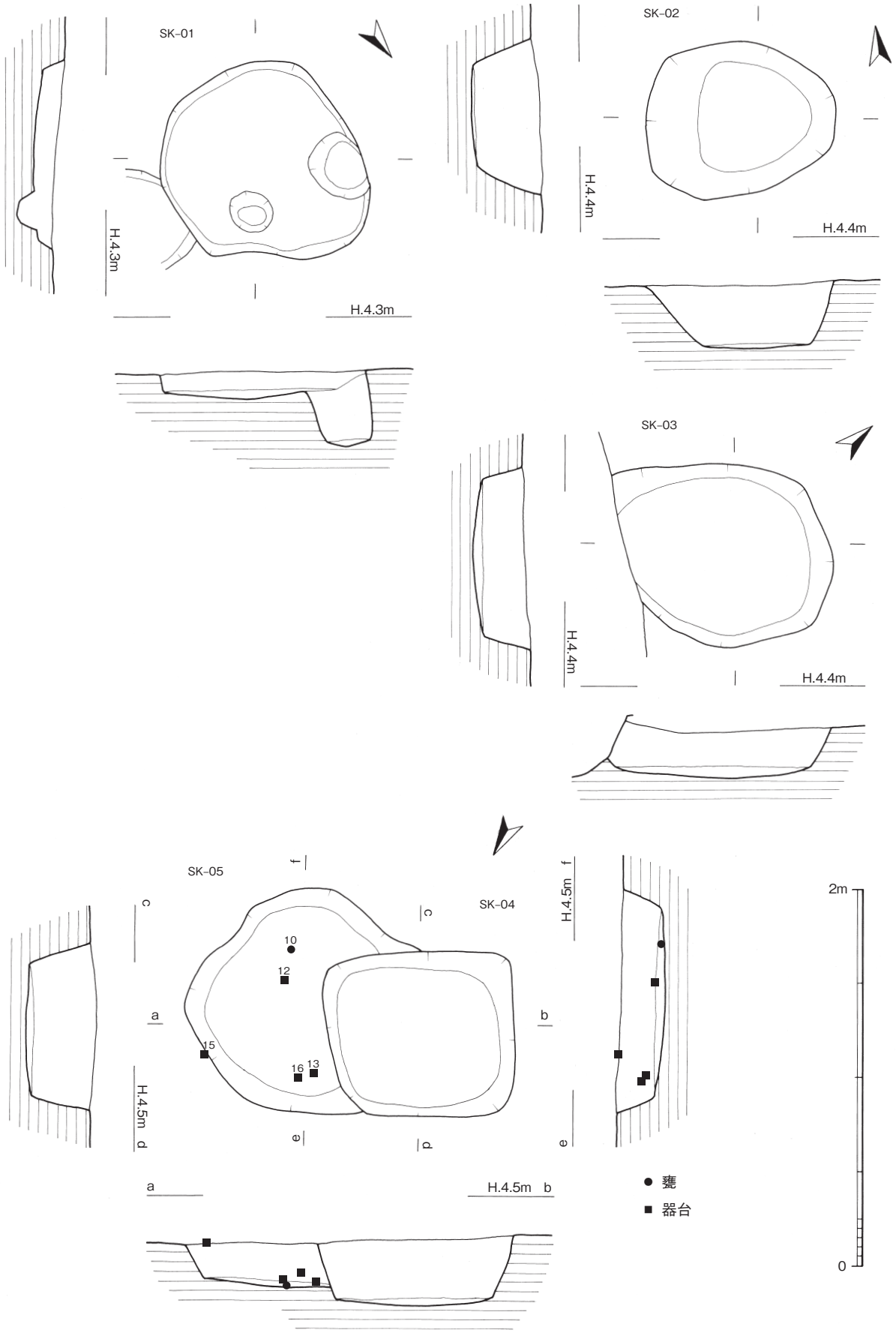


Fig.14　1～5号土壙実測図（1／30）

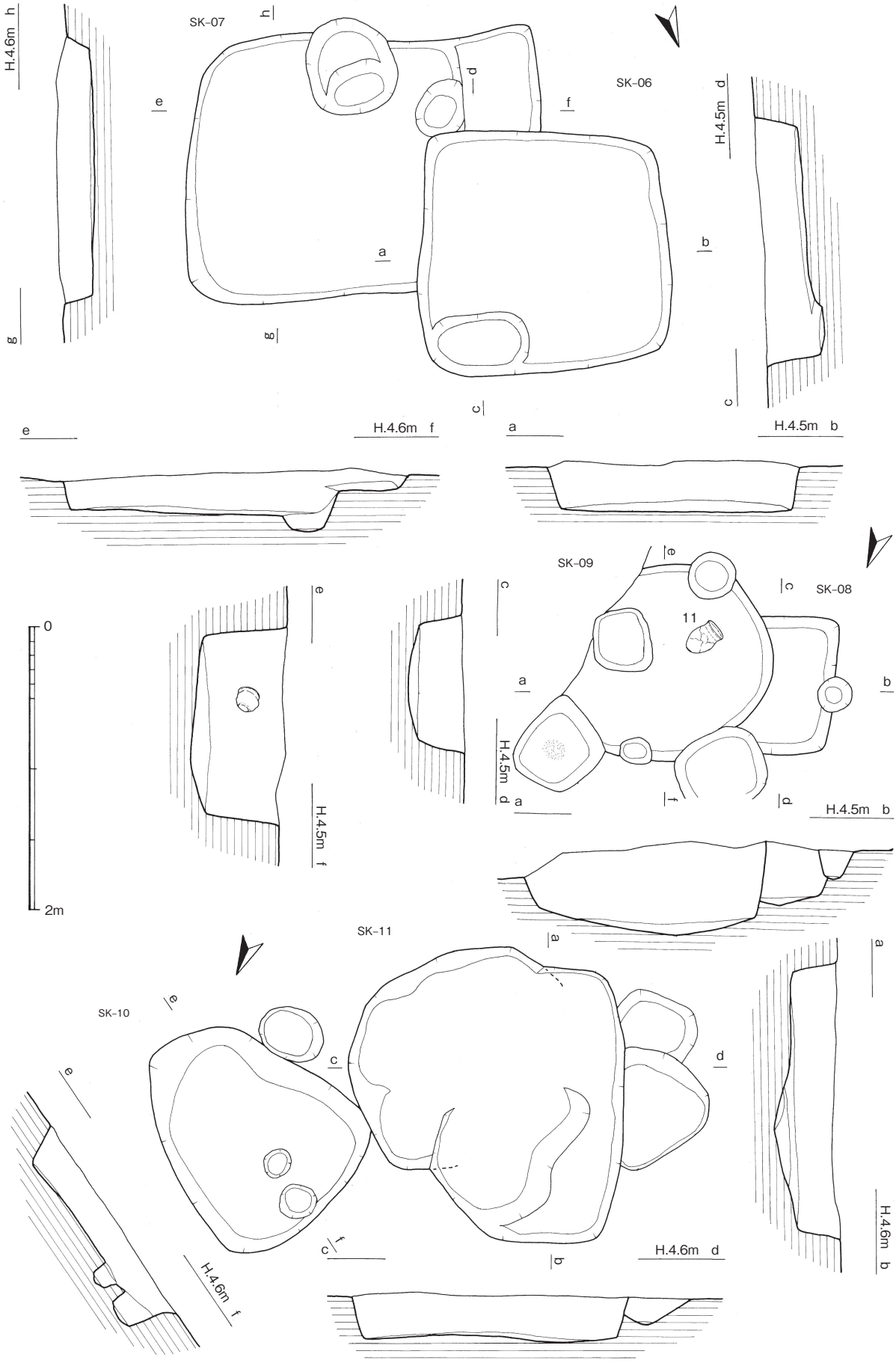


Fig.15　6～11 号土壙実測図（1 ／ 40）

４号土壙　SK－04（Fig. 14・18　PL. 11）

４号土壙は、調査区の東部を南流する1号溝の西岸に群在する土壙群中に位置する小土壙で、5号土壙の西壁を切っている。また、すぐ北には2・10号建物、西には11号建物、南には6号土壙が隣接している。平面形は、長辺が100cm、短辺が87cmの方形プランを呈する。深さが33～37cmを測る壁面は、やや急峻に立ち上がる。壙底は、浅い凹レンズ状で断面形は逆台形をなす。覆土は、暗茶褐色土～黄褐色粘土粒を含んだ茶褐色土の互層で、弥生土器甕片に混じって須恵器小片が出土した。

10は口径が11.3cm、底径が12cm、器高が13.3cmの器台。肉厚の口縁部と脚部は短く緩やかに外反する。体部内面が絞りのほかは押圧ナデ調整。胎土は粗く、微細～石英粗砂粒と雲母微細や赤褐色粒を含む。内面は暗赤紫～淡灰橙色、外面はくすんだ淡黄橙色。

５号土壙　SK－05（Fig. 14・18　PL. 11・30）

５号土壙は、調査区の東部に群在する土壙群中にある小土壙で、西壁は4土壙に切られており、すぐ東には8・9号土壙が、南には6号土壙が隣接している。平面形は、短辺が120cmで長辺が140cmほどの不整な楕円形プランをなそう。深さが31cmの壁面は、やや急峻に立ち上がり、壙底は、緩やかな凹レンズ状をなす。覆土は、淡黒茶～暗茶褐色土である。遺物は、弥生土器壺や甕・器台がまとまって出土した。

11は口径が18.5cm、底径が7.7cm、器高が24.6cmの甕。口縁部は倒卵形の胴部から短く「く」字状に外反する。調整は口縁部外面がヨコナデのほかは押圧ナデ後に粗いハケ目。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。淡灰褐色～橙褐色。12～15は器台である。口縁部は筒状の体部から緩やかに外反する。14は内面にシャープな稜を作ってストレートに外反する。外面は押圧ナデ後にハケ目調整、内面は指先による押圧ナデで、14には絞り痕が残る。胎土には微細～粗砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。12は明赤橙色、13は橙色、14・15は淡黄橙色。

６号土壙　SK－06（Fig. 15　PL. 11）

６号土壙は、調査区の東部、1号溝の西岸に群在する土壙群中にあり、北には4・5・8・9号土壙が、西には11号建物が位置している。平面形は、長辺が175cm、短辺が170cmの方形プランを呈し、南隅壁は7号土壙を切っている。壁面は、急峻に立ち上がり、壁高は30cm。床面は平坦で、東隅壁に沿ってある35cm×65cmの楕円形ピットにむかって緩やかに傾斜している。暗茶褐色の覆土中からは、弥生土器壺や甕・器台片が出土した。

７号土壙　SK－07（Fig. 15　PL. 11）

７号土壙は、調査区の東を北流する1号溝の西岸に隣接して位置し、南には13号土壙が、北には8・9号土壙がある。北隅壁は6号土壙によって削平されているが、平面形は、長辺が245cm、短辺が175cmの長方形プランをなす。壁面は、やや急峻に立ち上がるが、壁高は32cmで西壁に沿って幅が45cm、高さが15cmのベッド状遺構が付設されている。浅い凹レンズ状をなす床面は、ベッド状遺構にむかって緩やかに傾斜している。覆土は、暗茶～淡黒茶褐色土で弥生土器壺・甕・器台片が出土した。

８号土壙　SK－08（Fig. 15　PL. 11）

８号土壙は、調査区の東部に群在する土壙群中にある小土壙で、西～南には4～7号土壙が隣接して連なっている。土壙の東壁は9号土壙に削平されているが、平面形は、一辺が100cmほどの方形プランをなそう。深さが40cmの壁面は、急峻に立ち上がる。壙底は、凹レンズ状で、断面形は舟底状をなす。遺物は、弥生土器壺・甕・器台片がわずかに出土した。

９号土壙　SK－09（Fig. 15・18　PL. 11・30）

９号土壙は、調査区の東部に群在する土壙群中にあり、東壁は1号溝の西岸に削平されているが、西壁は8号土壙の東壁を切っている。平面形は、短径が140cm、長径が160cmほどの楕円形プランをなそう。急峻に立ち上がる壁面は、深さが65cmで、断面形は舟底状をなす。覆土は、暗茶褐色土の単一層である。遺物は、

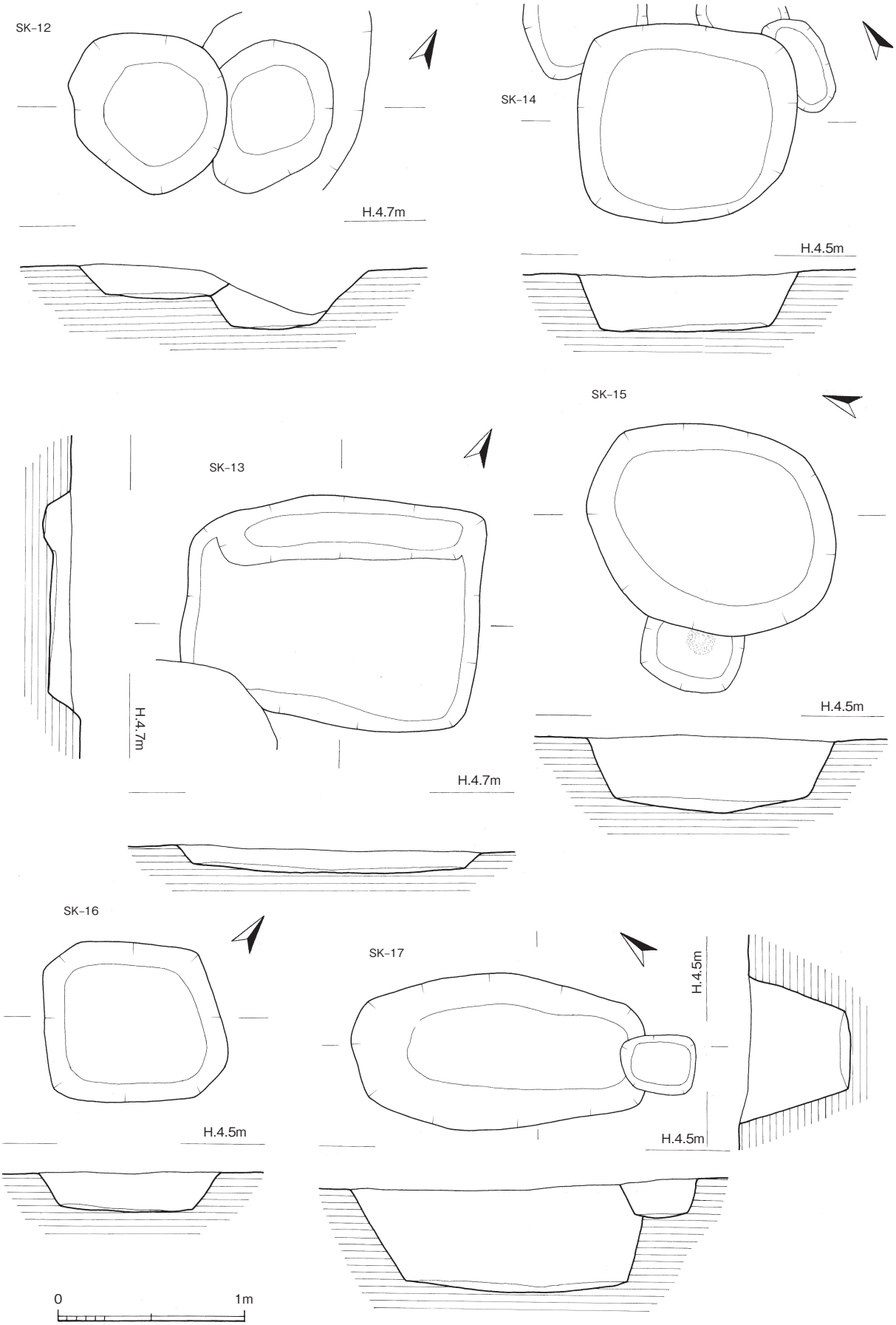


Fig.16　12 ～ 17 号土壙実測図（1 ／ 30）

壙底から25cm上面で甕の完形品や器台片が出土した。

16は口径が17cm、器高が24.4cmの甕で、底部は小さな丸底状をなす。口縁部は緩やかな「く」字状をなし、胴部はやや肩の張った長胴形を呈する。外面はハケ目、内面は押圧ナデ後にハケ目調整。胎土は粗く小～粗砂粒を含む。色調は橙褐色。

10号土壙　SK－10（Fig. 15）

10号土壙は、調査区中央部の東辺にある土壙で、西壁は1号溝の東岸に接し、東隅壁は11号土壙を切っている。平面形は、一辺が195cmの不整な三角形状をなしているが、本来的には長辺が195cm、短辺が100cm余の長方形土壙と一辺が150cm余の方形土壙の重複と考えられる。壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱型をなしている。弥生土器壺片と甕片がわずかに出土した。

11号土壙　SK－11（Fig. 15）

11号土壙は、調査区中央部の東辺に位置する小土壙で、すぐ北には3号建物、南には8号建物が隣接している。南西隅壁が10号土壙によって削平されているが、平面形は長辺が160cm、短辺が100～115cmのやや不整な長方形プランをなしている。壁面は、やや緩やかに立ち上がり、壁高は20～25cmを測る。平坦な床面は、南へむかって緩傾斜している。暗茶褐色の覆土から弥生土器壺や甕・高坏片がわずかに出土した。

12号土壙　SK－12（Fig. 16）

12号土壙は、調査区中央部の東寄りに位置する小型の土壙で、東縁を南流する1号溝の西岸を切っている。土壙のすぐ西には、6・7号建物が、また1号溝を挟んだ東には4号建物がある。平面形は、直径が85cmの円形プランを呈する。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は18cmを測る。壙底は、浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、茶褐色土で弥生土器甕片等が出土した。

13号土壙　SK－13（Fig. 16）

13号土壙は、調査区のほぼ中央部に位置する土壙で、すぐ北には6・7号土壙がある。平面形は、長辺が160cm、短辺が125cmの長方形プランを呈し、南西隅壁は11号建物の南東隅柱に切られている。壁面は、やや急峻に立ち上がるが、削平が著しく壁高は7～8cmときわめて浅い。壙底は平坦で、壙央が浅い凹レンズ状をなしている。主軸方位をN－64.5°－Eにとる。覆土は、黄褐色粘土粒を含んだ暗茶褐色土の単一層で、弥生土器甕片がわずかに出土した。

14号土壙　SK－14（Fig. 16）

14号土壙は、調査区の中央部に位置する土壙で、北には15号土壙が、東へ2mの距離には13号土壙がある。平面形は、長辺が117cm、短辺が103cmの隅丸方形プランを呈し、北隅壁は11号建物の西桁柱を切っている。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は30cmを測る。壙底は平坦で、壙央が浅い凹レンズ状をなしている。覆土は暗茶褐色土の単一層で、弥生土器壺や甕片がわずかに出土した。

15号土壙　SK－15（Fig. 16）

15号土壙は、調査区の中央部に位置する土壙で、すぐ南には14号土壙が、また東には11号建物が、西には1号住居が隣接している。平面形は、長辺が132cm、短辺が110cmの楕円形プランを呈する。高さが40cmの壁面は緩やかに立ち上がり、壙底は凹レンズ状をなしている。覆土は、茶～暗茶褐色土の互層で、下層には黄褐色粘土粒が混入している。弥生土器甕片がわずかに出土した。

16号土壙　SK－16（Fig. 16）

16号土壙は、調査区の中央部にある小土壙で、2m北には1号住居が、西には17号土壙が隣接して位置している。平面形は、長辺が70cm、短辺が60cmの方形プランを呈し、緩やかに立ち上がる壁面の深さは21cmを測る。壙底は、平坦で壙央がわずかに凹レンズ状をなしている。覆土は、黄褐色粘土粒が混入した暗茶褐色土の単一層で、弥生土器小片がわずかに出土した。

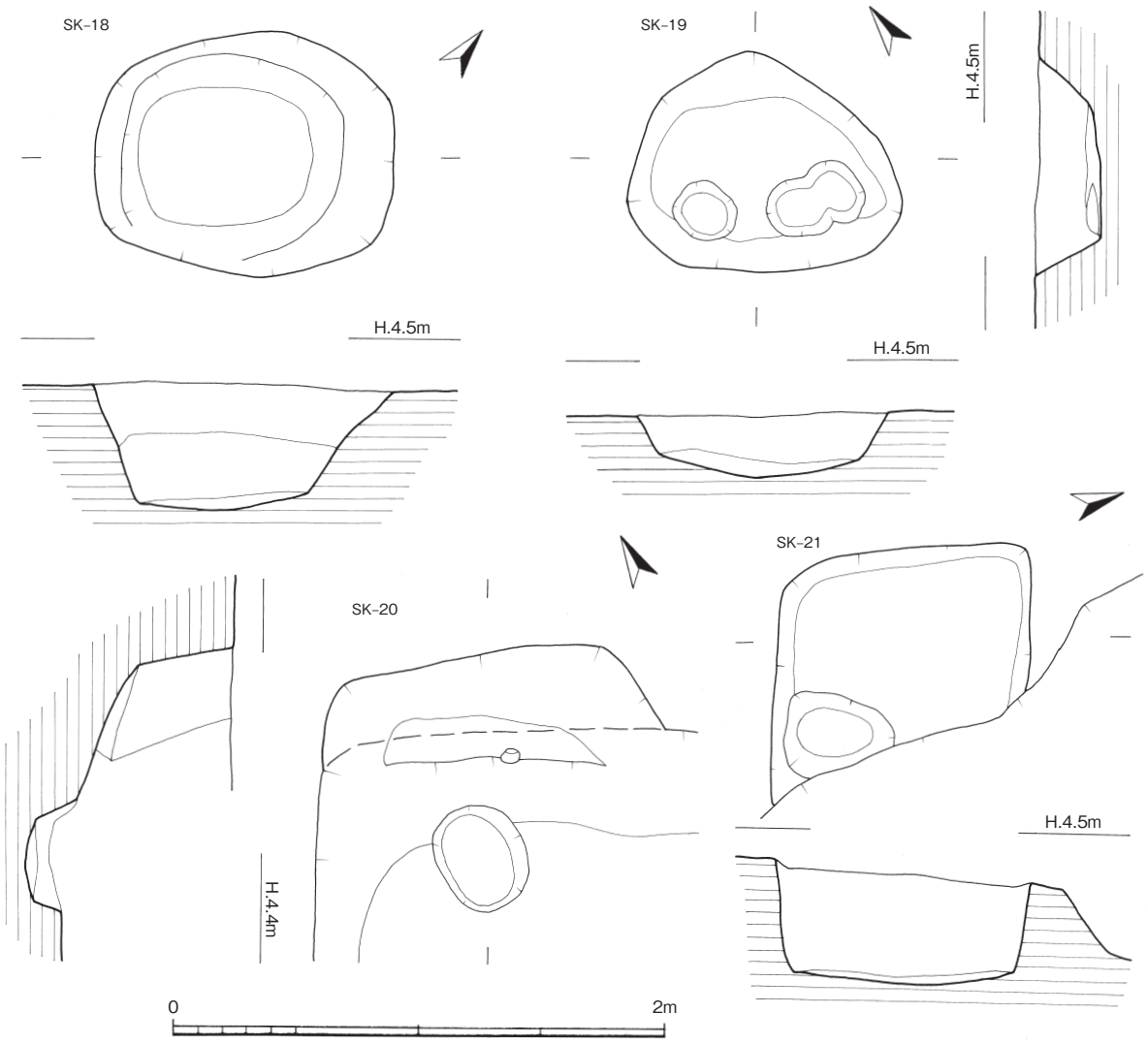


Fig.17　18～21 号土壙実測図（1／30）

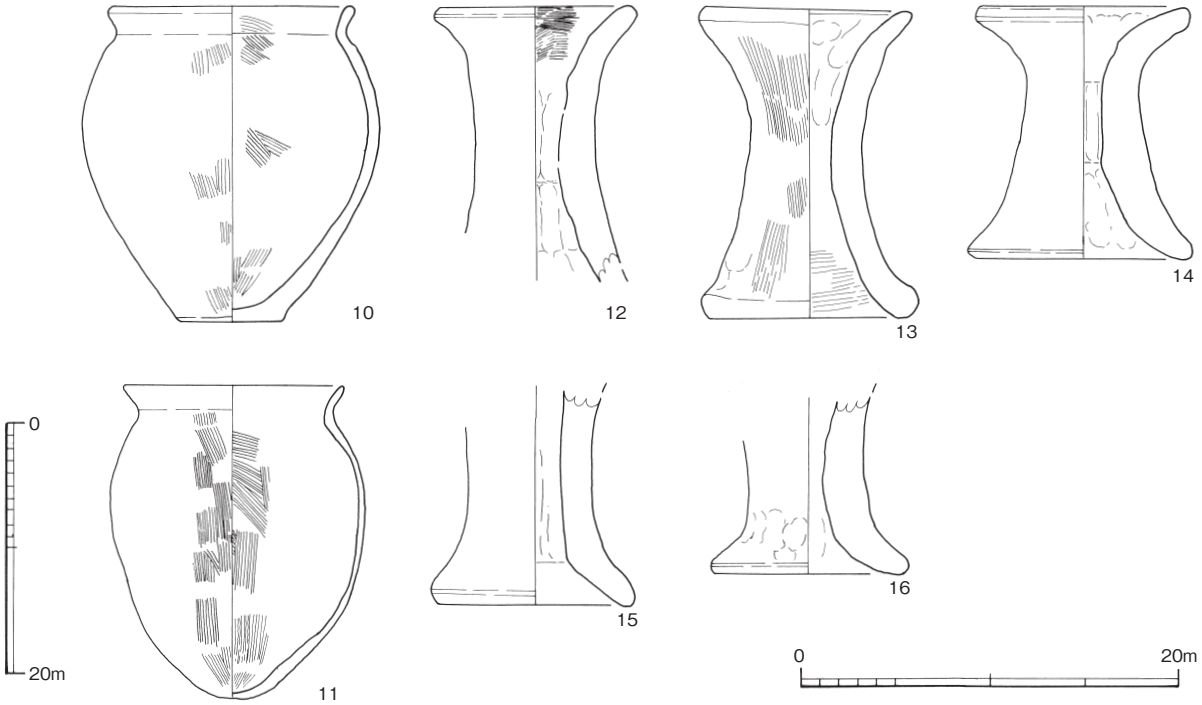


Fig.18　4・5・9 号土壙出土遺物実測図（1／4・1／6）

17号土壙　SK－17（Fig. 16　PL. 12）

17号土壙は、調査区の中央部に位置し、北には1号住居と18号土壙が、東には16号土壙が隣接している。南小口壁が小ピットで削平されているが、平面形は、長辺が155cm、短辺が82cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN－40.5°－Wにとる。壁面は、北小口壁が緩やかに立ち上がるが、南小口壁と両側壁はやや急峻に立ち上がり、壁高は55cmを測る。壙底は、壙央が緩やかな凹レンズ状をなし、断面形は浅い舟底状をなしている。覆土は、上層が暗茶褐色土、中～下層は暗灰茶褐色土が凹レンズ状に堆積していた。弥生土器甕片が出土した。形状的に土壙墓の可能性が想起される。

18号土壙　SK－18（Fig. 17）

18号土壙は、調査区の中央部西寄りにある1号住居の南西壁に接して位置する小土壙で、すぐ北には19号土壙、南には17号土壙がある。平面形は、長辺が163cm、短辺が135cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN－31°－Eにとる。壁面は、緩傾斜して立ち上がるが、中位で緩やかな稜を作る。壁高は、69cm。断面形は、壙央が浅く凹レンズ状に窪む舟底状をなす。覆土は、黄褐色粘土粒をわずかに含んだ暗茶褐色土で、少量の弥生土器壺と甕・器台片が出土した。

19号土壙　SK－19（Fig. 17　PL. 12）

19号土壙は、調査区の中央部にある1号住居の南隅壁に接して位置する小土壙で、南には18号土壙、南西には9号建物がある。平面形は、長辺が150cm、短辺が118cmの不整な楕円形プランを呈する。緩やかに立ち上がる壁面は、深さが34cm。凹レンズ状をなす壙央は、西壁側にむかって緩傾斜している。覆土は、暗茶褐色土の単一層で、弥生土器甕片が出土した。

20号土壙　SK－20（Fig. 17）

20号土壙は、調査区中央部の北西寄りにある小土壙で、大半は1号住居の北隅壁によって削平されている。平面形は、一辺が180cmほどの方形プランをなそうか。急峻に立ち上がる壁面は深さが70cmで、壙底は浅い凹レンズ状をなす。断面形は、箱型。遺物は、弥生甕片がわずかに出土した。

21号土壙　SK－21（Fig. 17）

21号土壙は、調査区の北東部にある小土壙で、すぐ西には3号土壙と10号建物が、南には9号土壙が位置している。東壁は、1号溝によって大きく削平されているが、平面形は、一辺が190cmほどの方形プランをなそう。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は59.8cmを測る。壙底は平坦で、断面形は箱型をなす。遺物は、弥生土器壺と甕片がわずかに出土した。

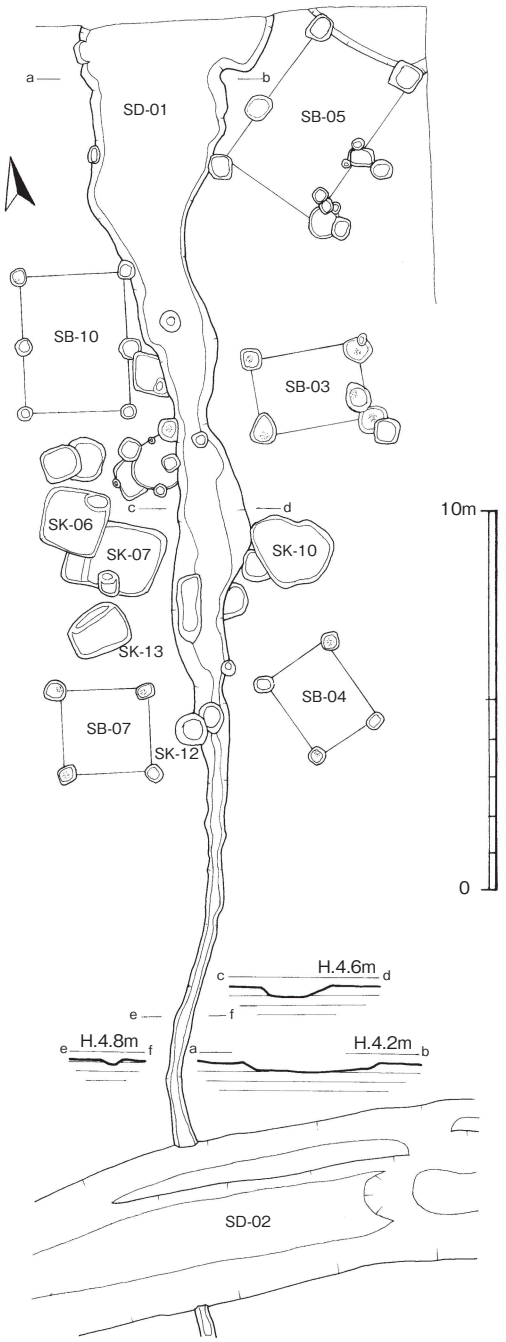


Fig.19　1号溝実測図（1／200）

4)溝 遺 構(SR)

1号溝 SD－01 (Fig. 19・20 PL. 13・33)

1号溝は、調査区の東縁を南北にのびる細流で、北へむかって流れている。南端の溝幅は、35～40cmで15～17mほど緩やかに蛇行した後に次第に溝幅を拡げ、北端では水溜り的に拡がり溝幅は5m、深さは30cmになる。溝底の標高は、南端が4.5m、北端が3.6mである。覆土は、濃褐色土の単一層で、弥生土器の壷や甕・器台・鉢片が出土した。

17は鋤先状口縁の丹塗り壺。内唇を内方に摘み出し、頸部にはM字凸帯が巡る。外唇部には刻み目を施文する。胎土はやや緻密で、小～中砂粒を含み、橙色。口径は29cm。18は底径が16.6cmの器台。19～21は鉢。19は口径が25.6cm。口縁部はストレートに外反し、体部は半球形をなす。胎土はやや緻密で、淡橙色。20は口径が22.2cm、底径が9cm、器高は12.5cmで歪みが著しい。口縁部は短く「く」字状に外反し、肉厚の体部は内彎ぎみに立ち上がる。底部には焼成後の穿孔がある。21は口径が13.6cm、底径が6cm、器高が6.5cmの小型鉢。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく直口ぎみに摘み上げている。内外面ともに押圧ナデ調整。

22は安山岩製石庖丁の半欠品。刃部は丁寧に研ぎ込まれ、約7mm径の紐孔が穿孔されている。23～25は滑

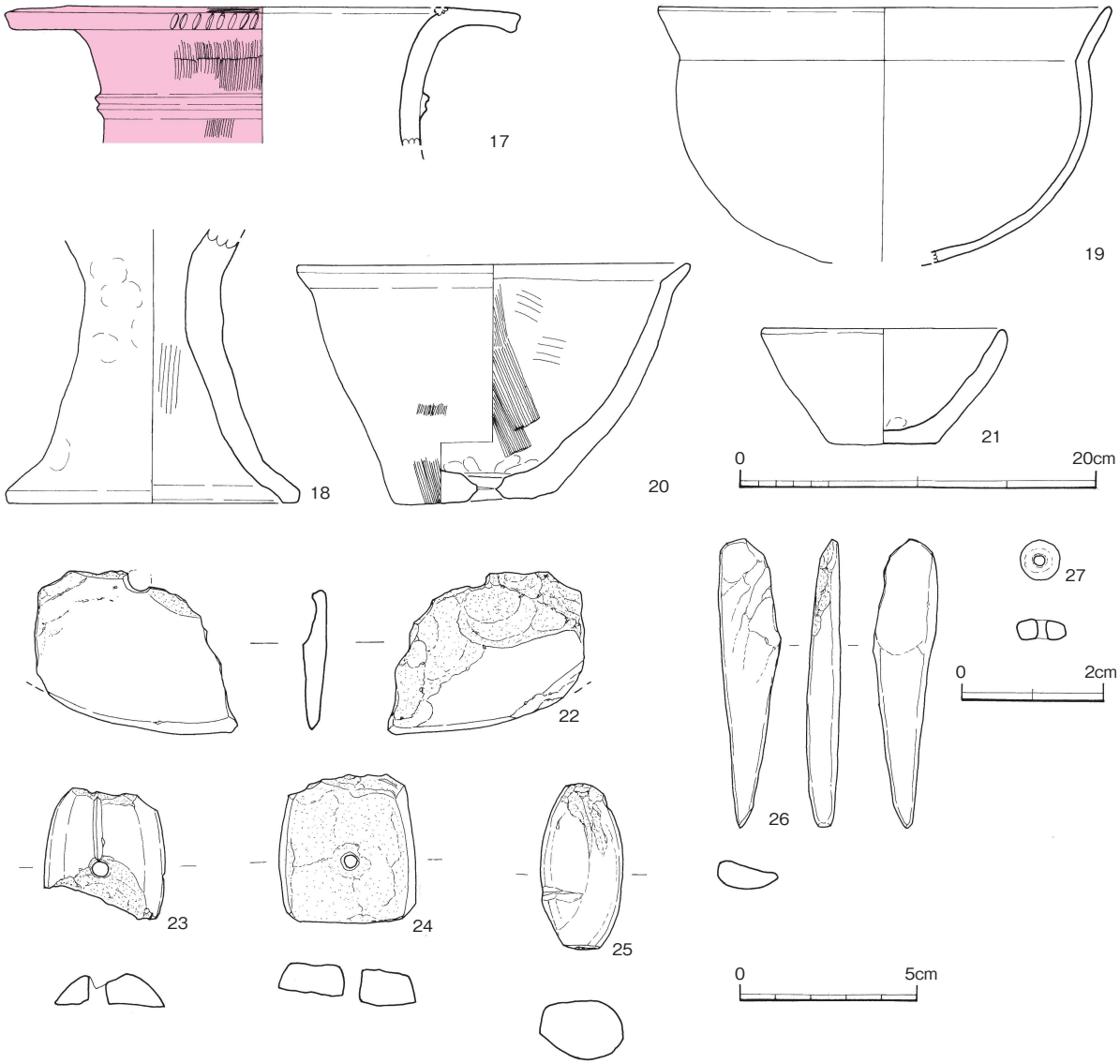


Fig.20 1号溝出土遺物実測図（1／1・1／2・1／4）

石製の石錘。23は基部から紐孔にむかって紐結溝が刻まれている。孔径は0.55cm。溝幅は0.25mm。25は未製品で横位に紐結溝を刻みかけている。長さは4.68cm、幅は2.41cm、重さは30.1g。27はライトブルーのガラス小玉である。直径は0.61cm、厚さは0.36cm、孔径は0.13cm。

２号溝　SD－02

(Fig. 21～42　PL. 14～32)

２号溝は、調査区の南端部をやや北に小さく膨らむように蛇行する東西方向にのびる溝で、溝幅は東端部で430cm、中央部で370cm、長さは24mを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形はU字状をなす。深さは、東端が93cm、中央部が73cm、西端が61cmである。北壁の東側には、溝底より10cmの高いところに長さが820cm、奥行きが60～65cmのフラット面が付いている。浅い凹レンズ状の溝底は、このフラット面の東端より東側が15～20cmほど1段低くなる階段状をなしている。標高は、東端の最深部が3.55mで、段落ちが始まる高まりが3.68m。溝底はここから西へはやや高くなり、中央部(J-1区)は3.9mで20cm高くなり、そこをピークに西はやや低くなり、西端の標高は3.78mである。この溝の中には大量の土器や石器類が投棄されていた。遺物は、5層の下層から出土しはじめ、6層とその下に堆積する8～10層には土器片が幾重にも折り重なるように堆積している。遺物的には完形品を含めた弥生土器壺や甕、高坏、器台が主体をなすが、その隙間を縫うように太型蛤刃石斧や石庖丁、石錘などが積み重なって出土した。さらに、間層を挟んだ溝底上の12・13層からは、やや時期的に遡及する土器とともに鍬や柄杓などの木器が出土する。遺物の出土状況は、押しなべて全体にわたって出土しているが、東側に比べて西側はやや薄くなる。同時に、北壁側よりも南壁側のほうが厚く溝の検出面付近

Fig.21　２号溝実測図（1 ／ 100）

までびっしり貼り付いた状況を呈していることから、南側から投棄したものと考えられる。この溝の東は、第5次調査区の1号溝（SD－01）と、西は第2次調査区の100号溝（SD－100）と繋がり、その流れは東から西へと下っている。溝底の標高は、第5次調査区の東端が4.5m、第2次調査区の西端部が約2.8mで、その比高差は1.7mである。

28～76は壺でA～G類まで7区分されるがA～C類が大勢を占める。28～40はA類の袋状口縁壺でA1～A3の3類に区分される。34・37を除いて丹塗壺で、30はA1類。口径が9.6cm、底径が6.8cm、器高が6.2cmで口縁部下と玉葱状の胴部上にM字凸帯が巡る。38はA2類の壺で、口径が15cm、底径が9.4cm、器高が31.4cm。41～53はB類の素口縁広口壺でB1～B4に4区分される。41・42はB1類。43～48は口縁部が朝顔状に外反するB2類。44は口径が28.8cm、器高が36.2cm。48は口径が27cm、器高は34.3cmでいずれも丹塗りである。49・50は口縁部が短く外反するB3類。50は丹塗りで口径は25.7cm、器高は34cm。51～53はB4類のもので頸部や胴部にM字凸帯を巡らし、頸部には暗文を描く。54～69はC類の鋤先口縁壺である。54～65は口縁部を水平に仕上げ、頸部や胴部に三角凸帯やM字凸帯を巡らすC1類。58は三角凸帯下に粘土紐を半月状の貼付ける。61は頸部上半が丹塗り、下半は黒色顔料を塗布している。65は口径が22.3cm、器高は39.1cm。66～69は口縁部上唇が内傾するC2類である。70は瓢形壺である。71は口径が14.8cmの素口縁の細頸壺でM字凸帯間に暗文が施文される。72は口径が8.7cm、底径が5.5cm、器高が8.7cmの小型壺で口縁部は短い頸部から大きく外反する。77～127は甕でA～D類に4区分される。77・78はL字口縁のA1類である。77は口径が19.6cm、底径が7.7cm、器高は20.5cm。81は口径が18cm、器高が23.6cmのA2類で、胴部上半に窓が付く。81はB1類、83は口径が33.1cm、器高が27.3cmの丹塗りのB2類。82は口径が24.4cmのC1類で丹塗りの頸部下と胴部凸帯間には暗文を描く。84～91は「く」字状口縁のC2類の甕である。86は口径が25.4cm、器高は31cmで胴部には1条の三角凸帯が巡る。94～100はC3類の「く」字状口縁の甕。101～110はC4類。111～117は口径に対して器高が低い「く」字状口縁のD類甕。115は口径が18cm、器高が19.2cmの丹塗り甕。128～138は鋤先口縁の高坏で、A類とB類に大別される。128・129・131はA類で、口縁部の張り出しは弱く内彎する坏部は深い。132・133・135はB類。139～191は鉢でA～D類に4区分される。139～142はA1類の埦形鉢。143～148はA2類で体部が半球形をなす。152・153は口縁部が直線的に立ち上がるB類。179～185はC1類。181は内面が丹塗り、外面が黒塗り。186～191はC2類の鉢で底部穿孔があり、甑への転用品か。192・193は蓋。194～

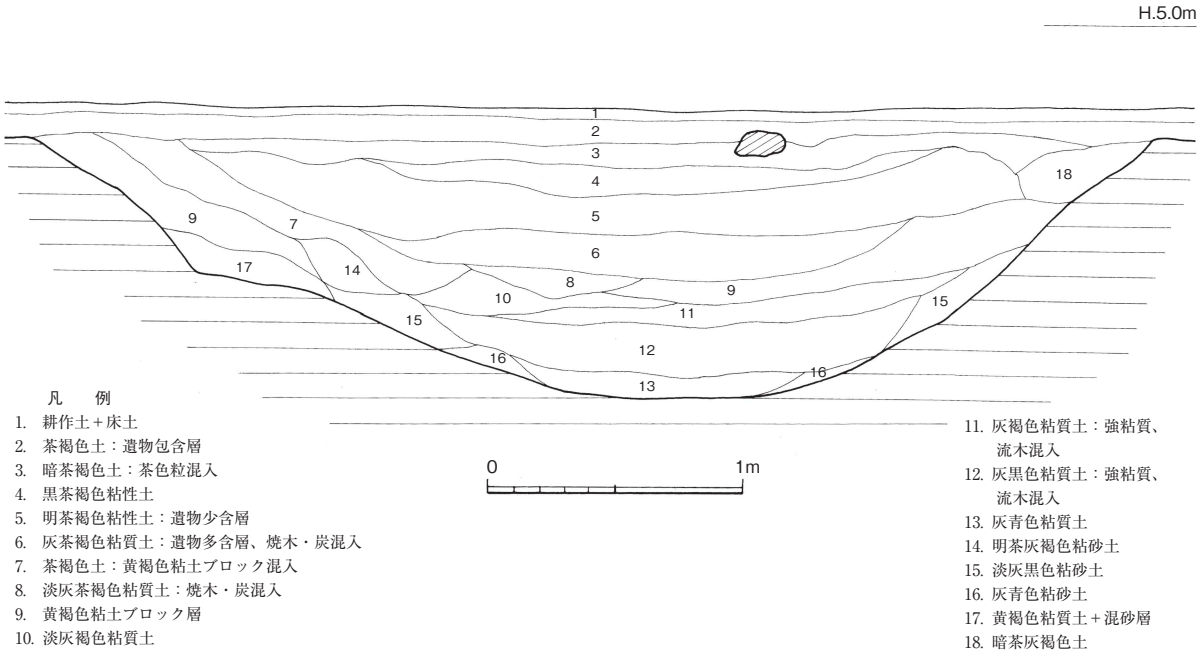


Fig.22　２号溝東壁土層断面実測図（1 ／ 30）

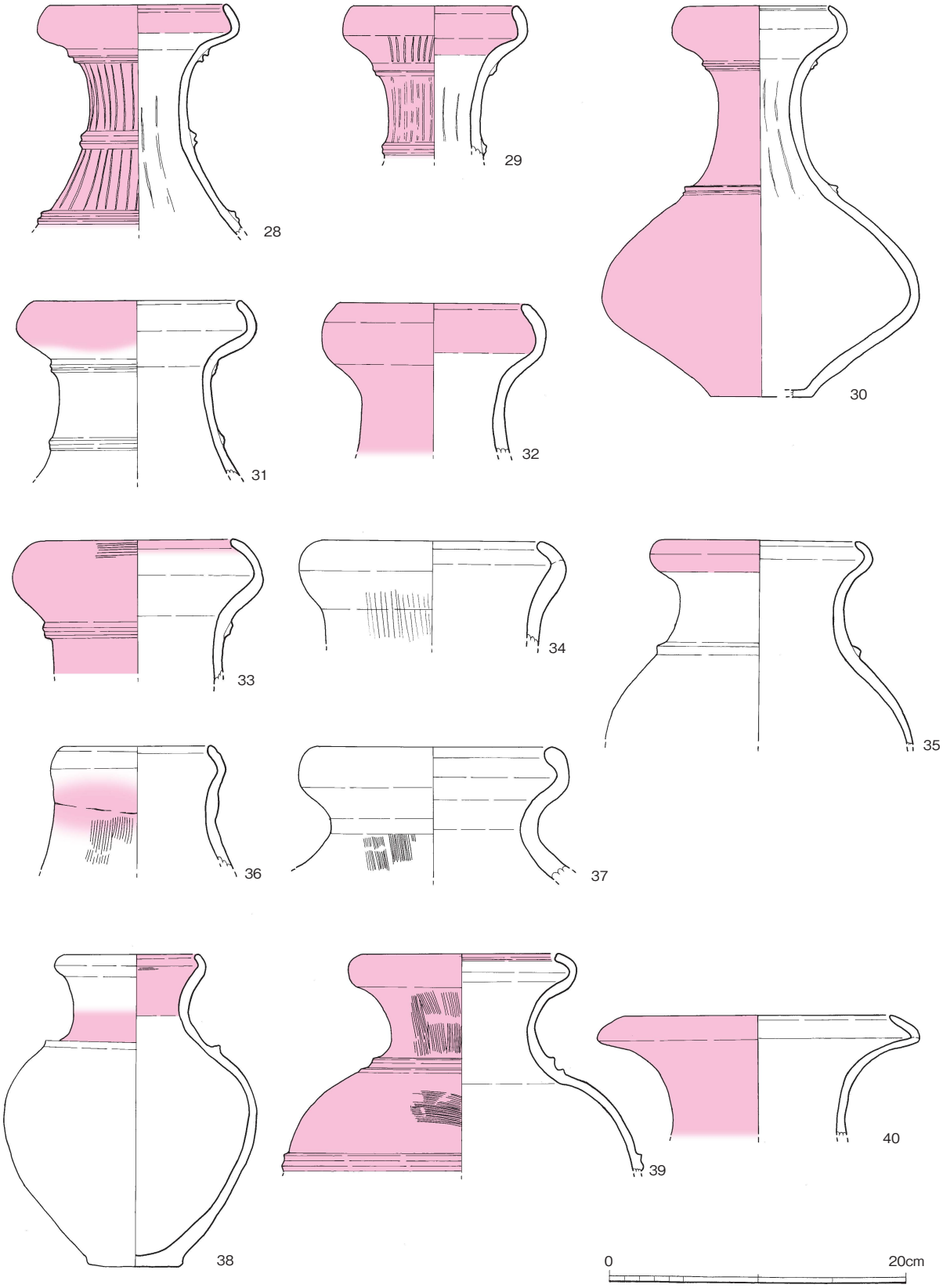


Fig.23　２号溝出土遺物実測図１（1／4）

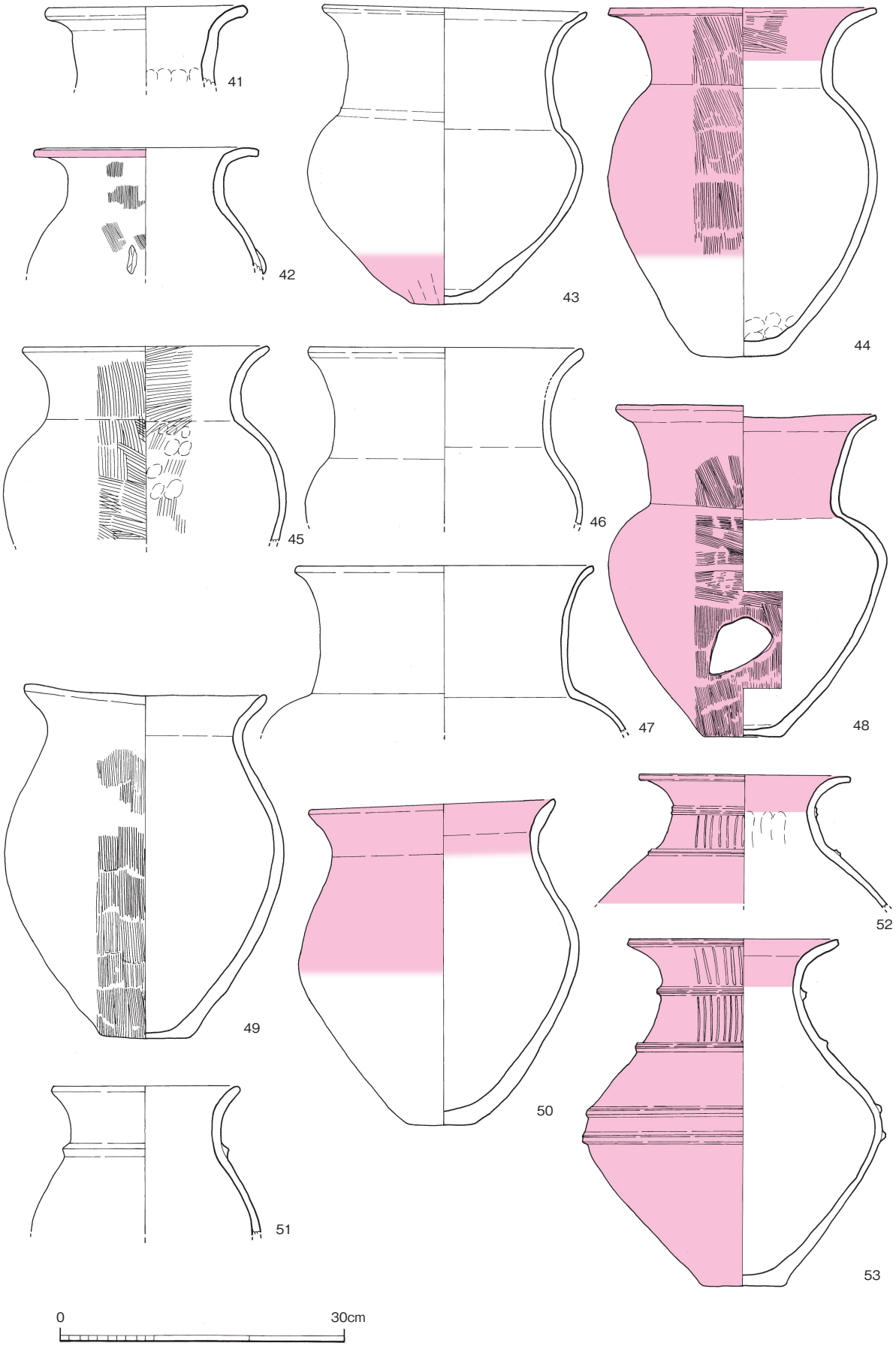


Fig.24　２号溝出土遺物実測図２（1 ／ 6）

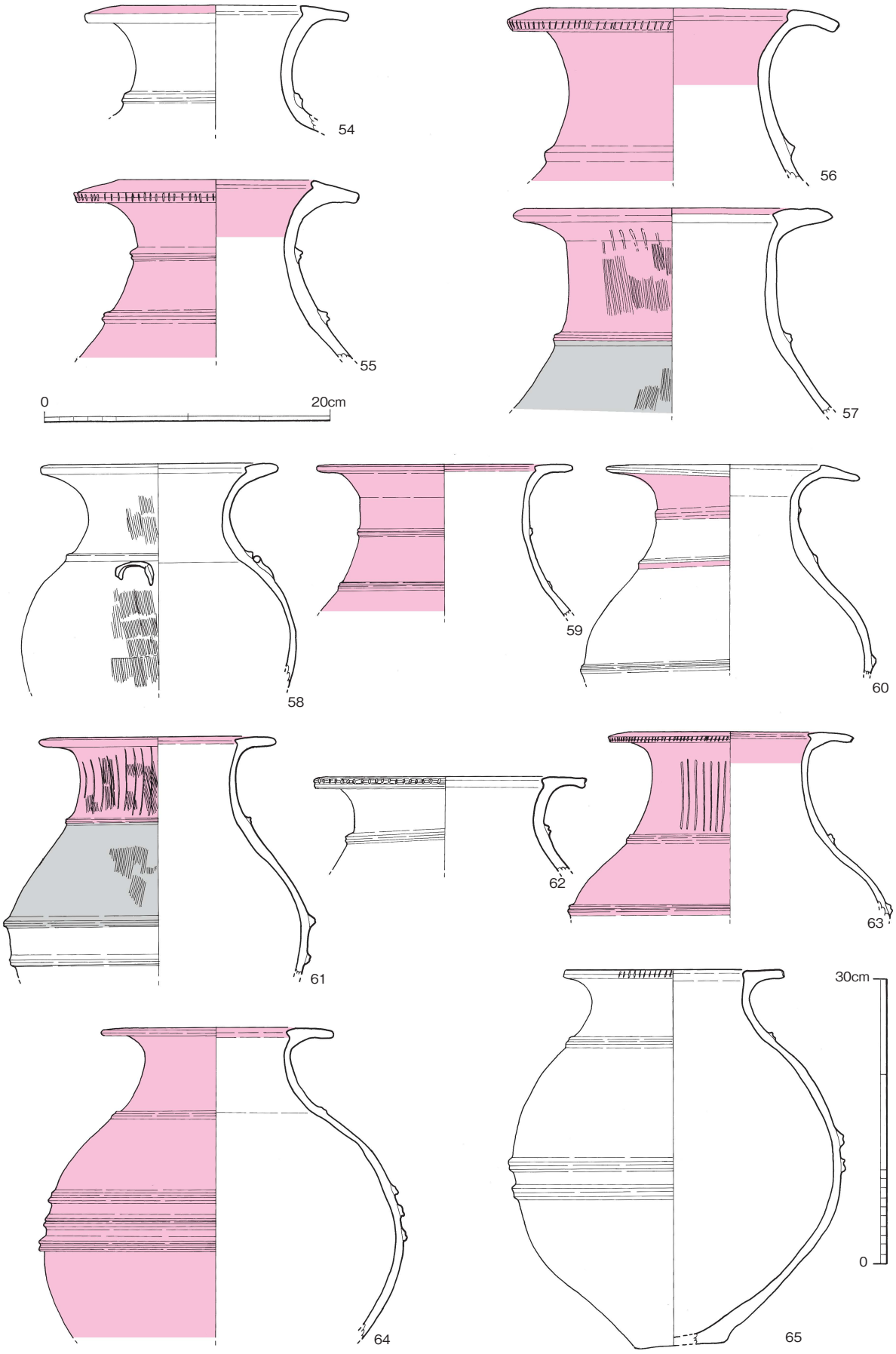


Fig.25　２号溝出土遺物実測図３（1 ／ 4・1 ／ 6）

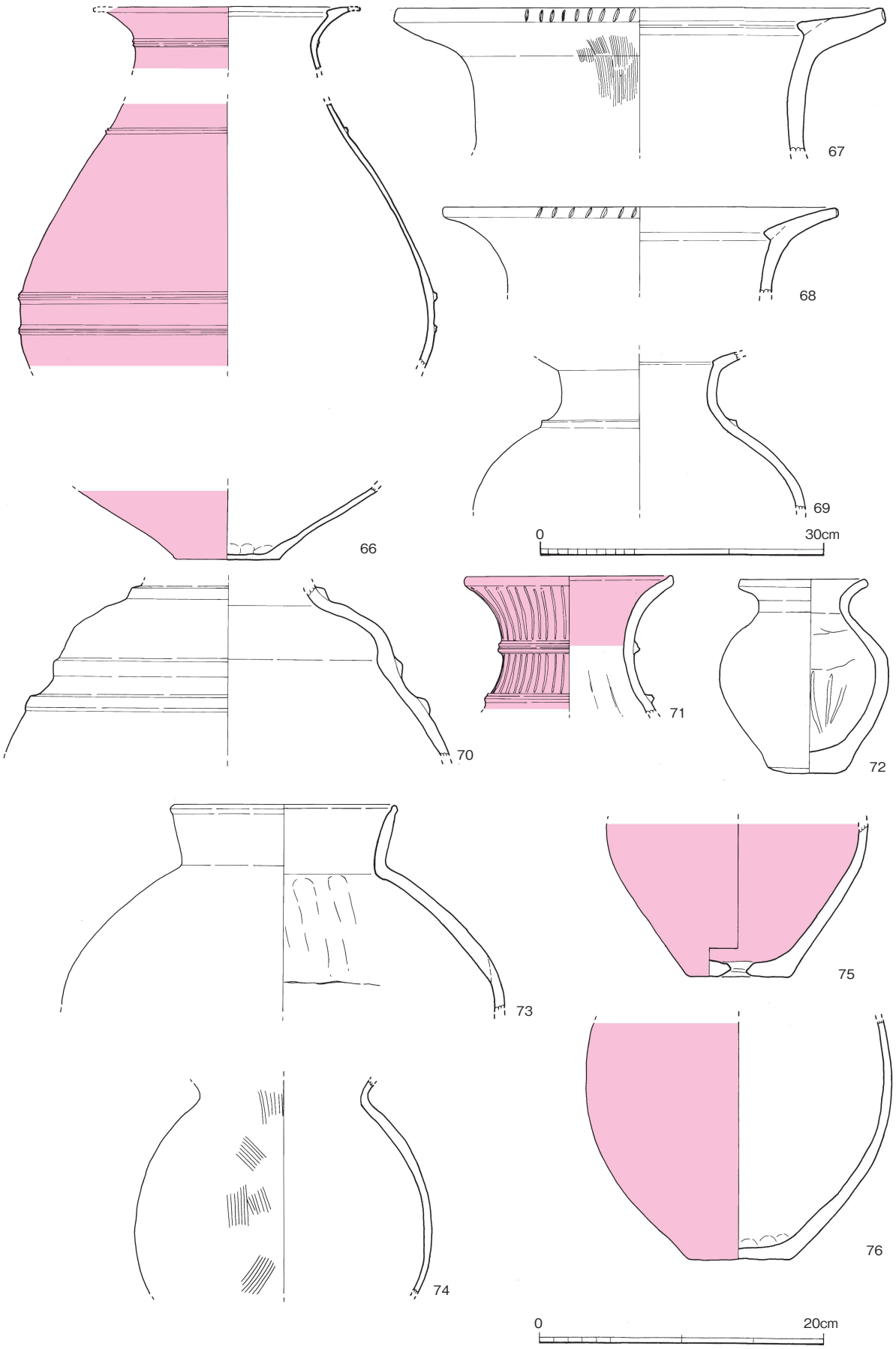


Fig.26　２号溝出土遺物実測図４（1 ／ 4・1 ／ 6）

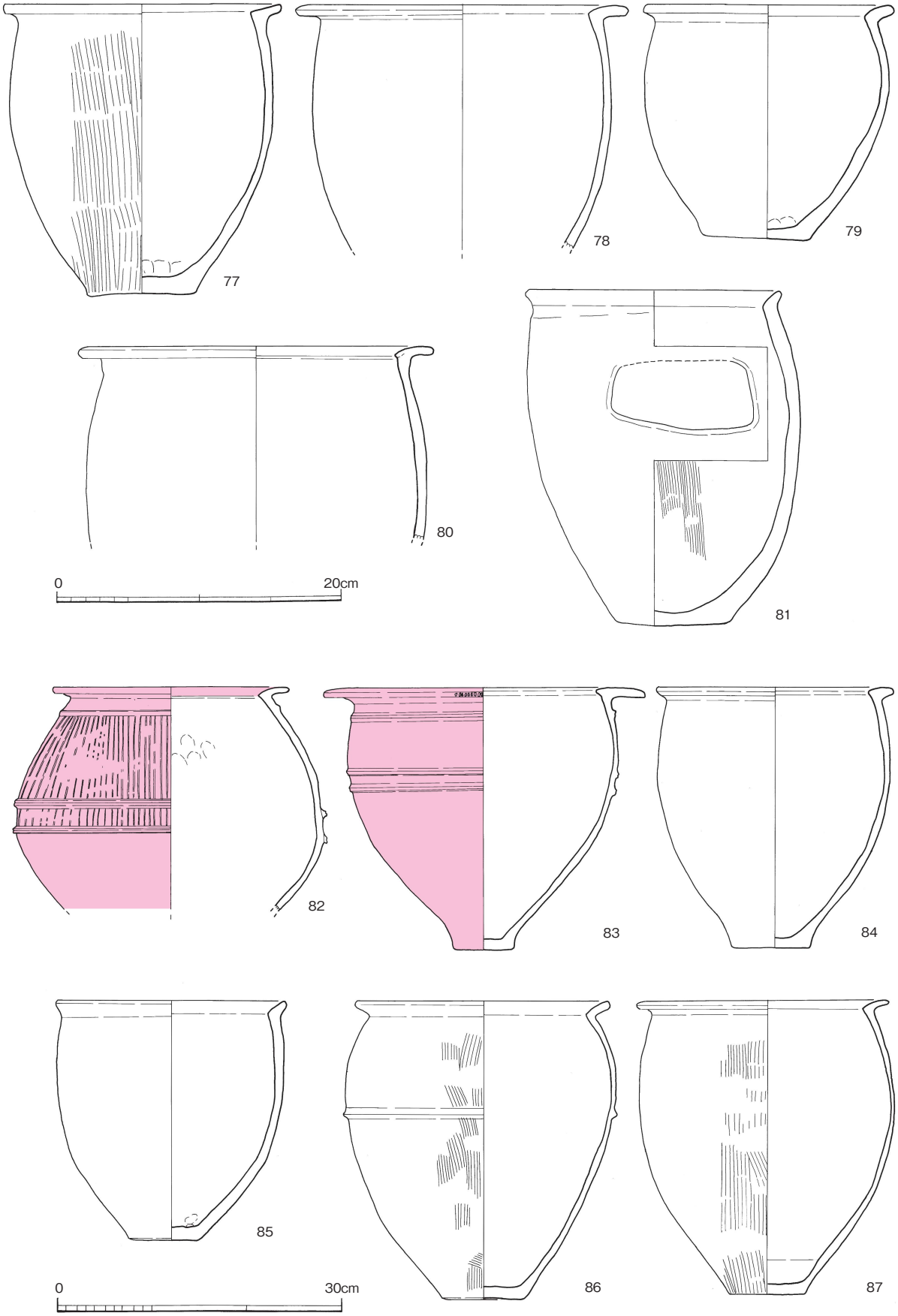


Fig.27　２号溝出土遺物実測図５（1 ／ 4・1 ／ 6）

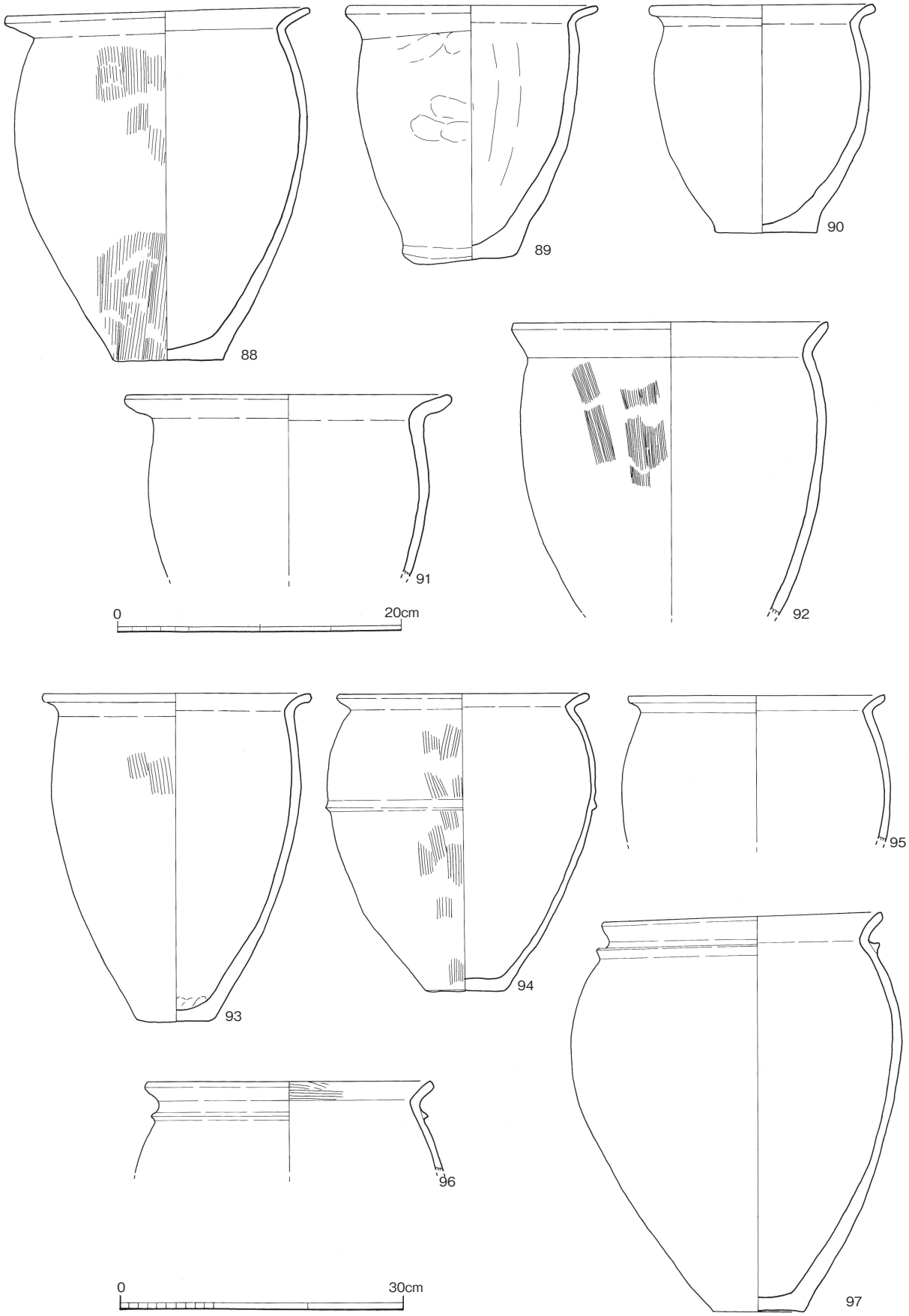


Fig.28　２号溝出土遺物実測図６（1／4・1／6）

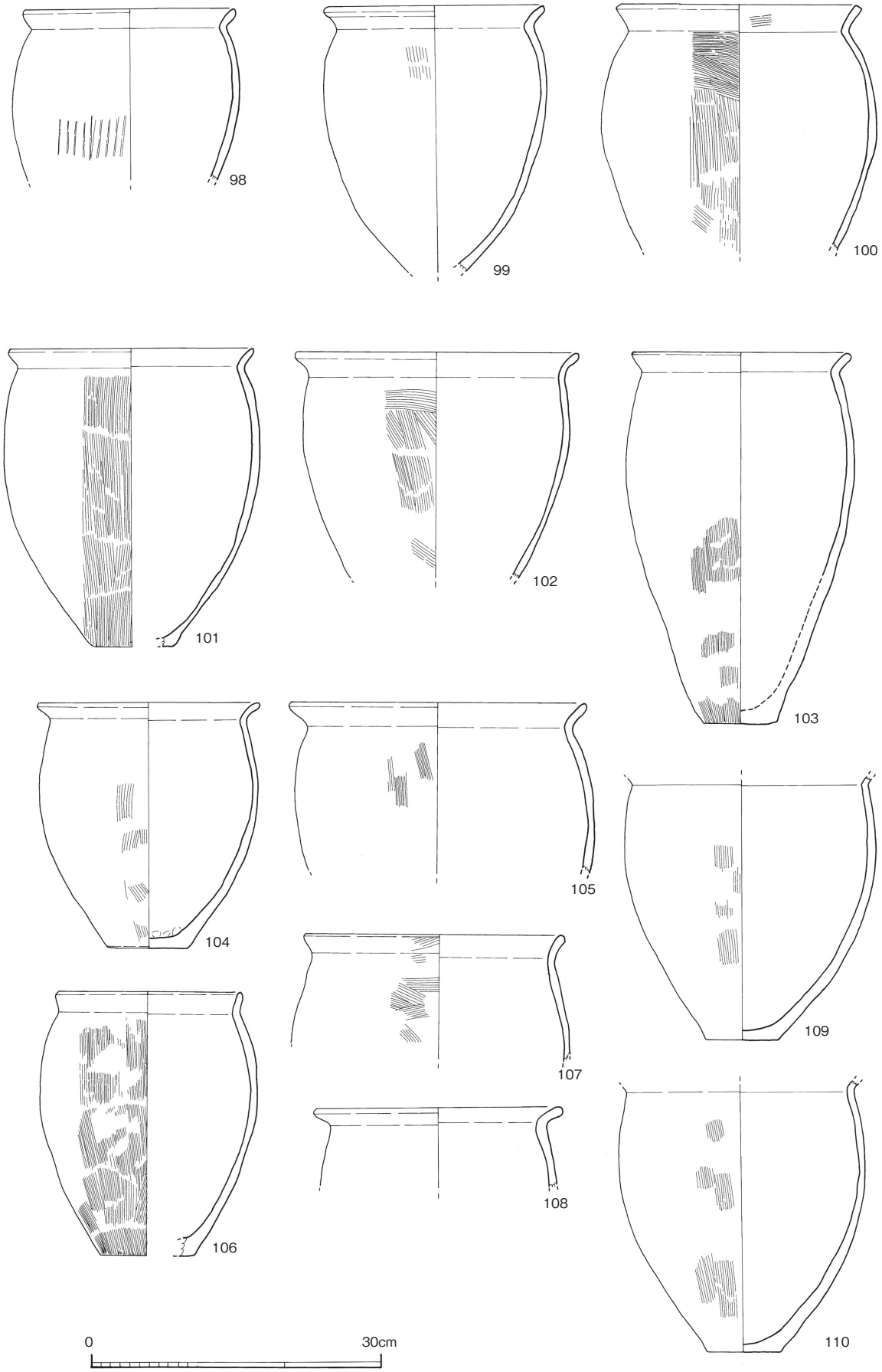


Fig.29　２号溝出土遺物実測図７（1 ／ 6）

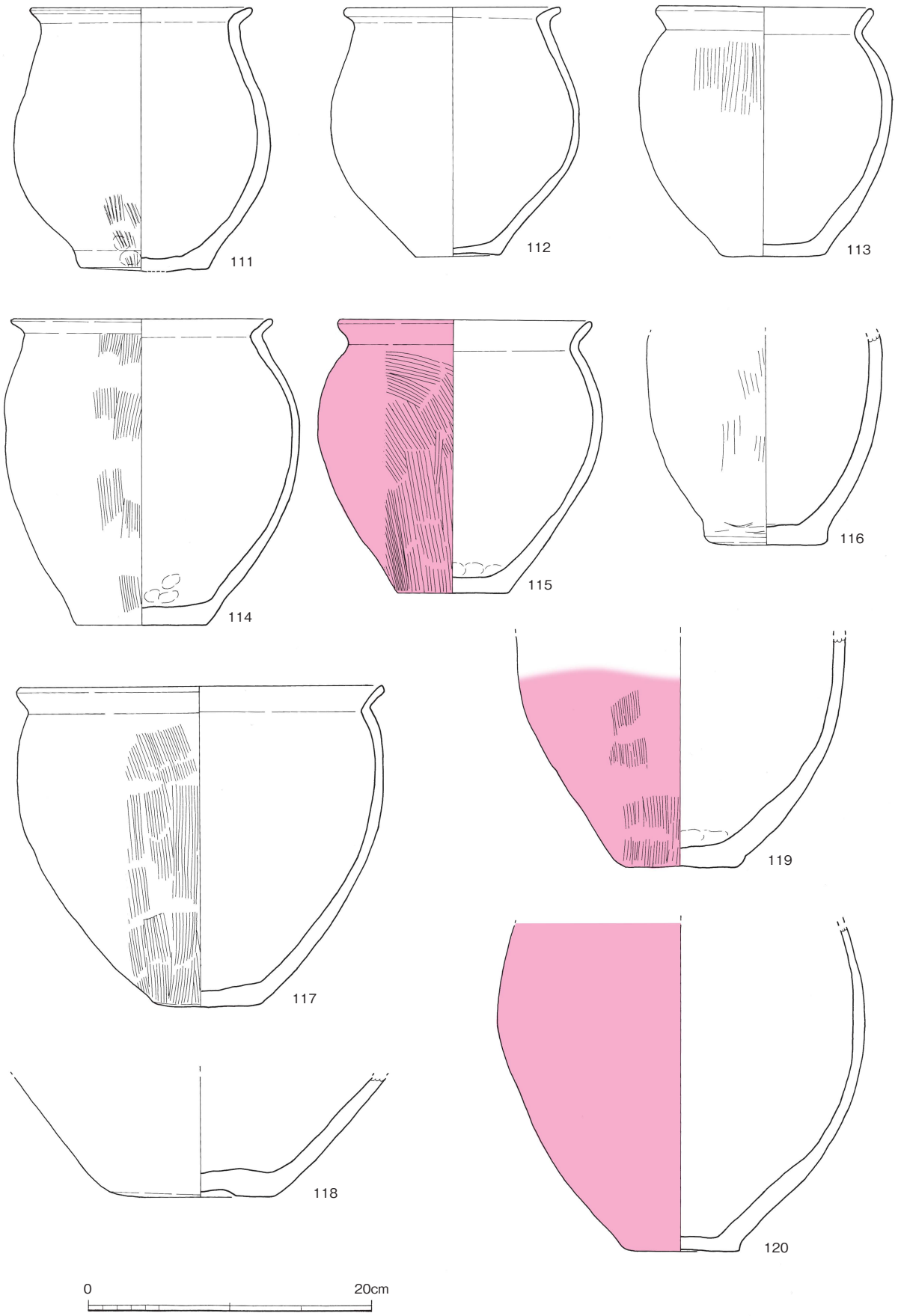


Fig.30　２号溝出土遺物実測図８（1 ／ 4）

236は器台で、A～F類に6区分される。

237は匙状土製品で、中央に直径が4.5～5.5cm、深さが3cmの袋状に膨らみを作り、把手は斜め上方へ繋いでいる。胎土はやや緻密で、小砂粒を含み、橙褐色。238～241は手捏の把手状土製品である。直径は2.5～4cm。242はソケット状の刻みがある土製品。243は直径が12cmの円盤状土製品。平底状で上縁を上方に摘み上げている。胎土は粗く小～粗砂粒を含み、橙色。244は直径が6.27～6.71cmの有孔円盤。斜め上方から中央にむかって小孔2孔を穿つ。245は直径が2.9cm、重さが21.6gの球状土製品。246～250はミニチュア土器で、246・247は尖り底。246は口径が2.7cm、器高は3.7cm。胎土は緻密で、小砂粒と赤褐色粒・雲母をわずかに含む。248～250は平底。いずれも指頭押圧ナデ調整。

251はライトブルーのガラス小玉で、直径が0.45cm、厚さが0.3cm。

252は古銅輝石安山岩の石槍である。丁寧な押圧剥離加工で断面形を菱形に仕上げている。縄文時代前期の所産か。253～258は滑石製紡錘車である。いずれも表裏面を丁寧に磨き、側縁は面取りした後に研磨加工を施している。直径はもっとも小さい253が3.94～3.98cm、大きい255は5.07～5.12cmで中央部に円孔が

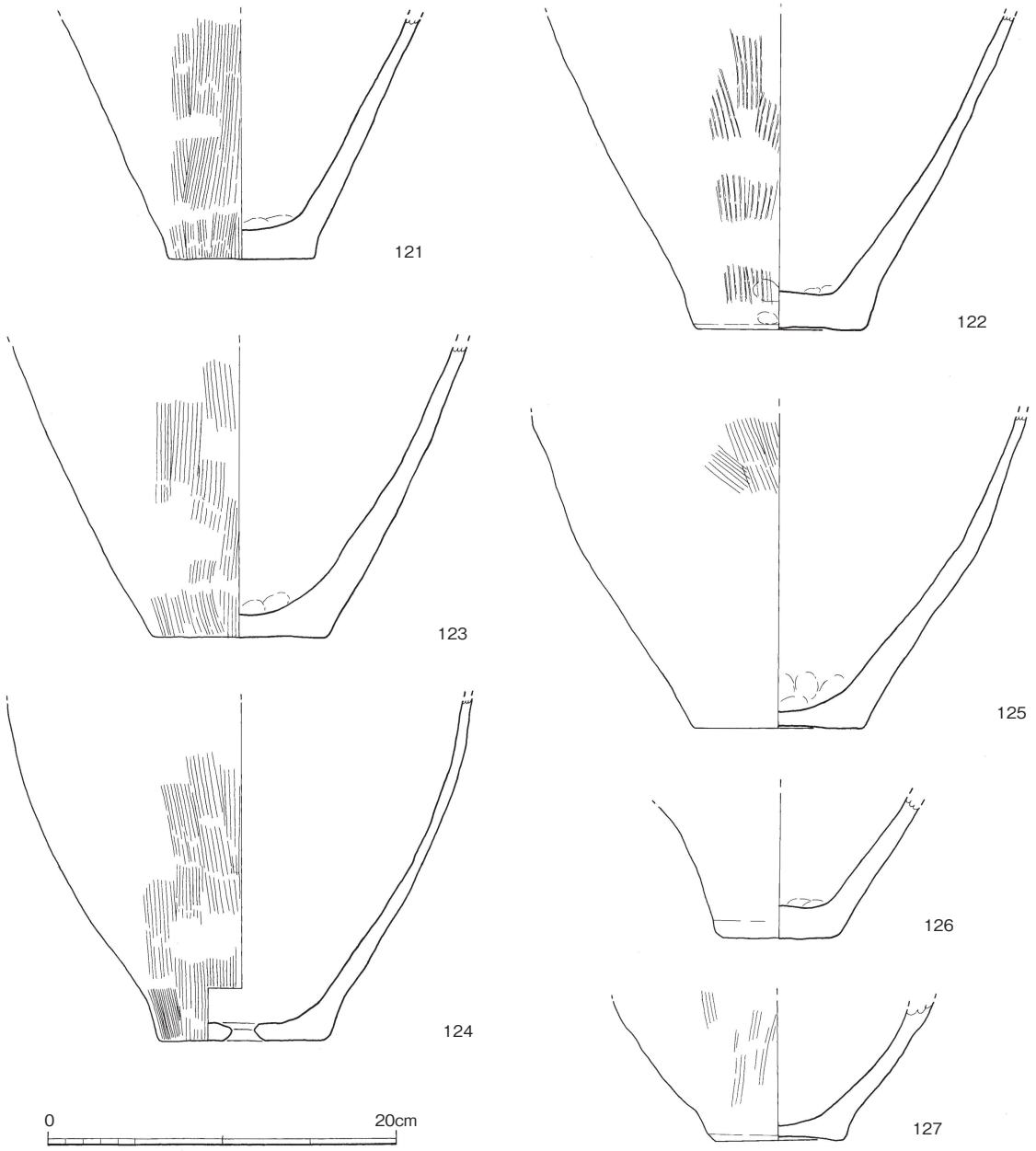


Fig.31　２号溝出土遺物実測図９（1 ／ 4）

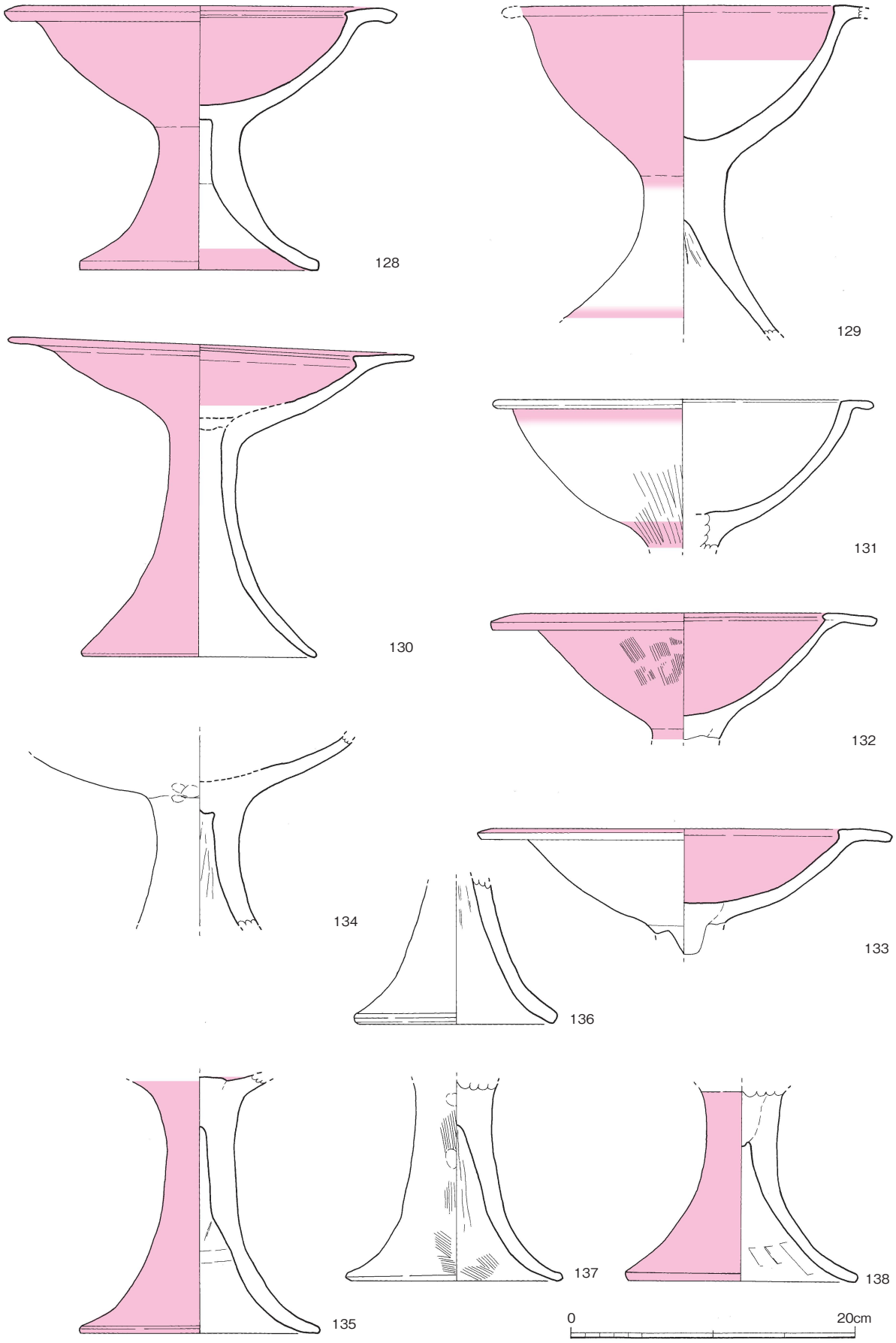


Fig.32　2 号溝出土遺物実測図 10（1 ／ 4）

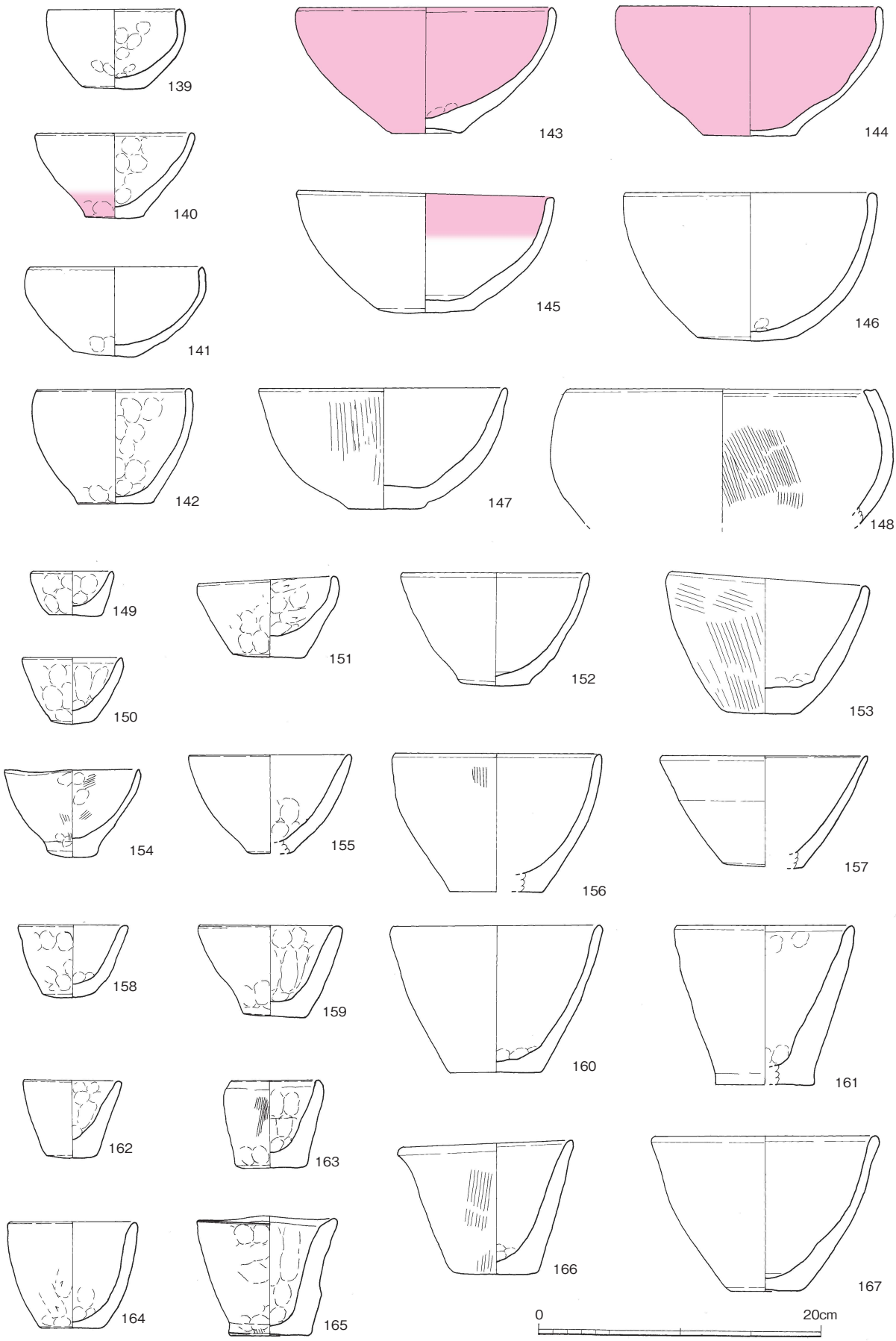


Fig.33　2 号溝出土遺物実測図 11（1 ／ 4）

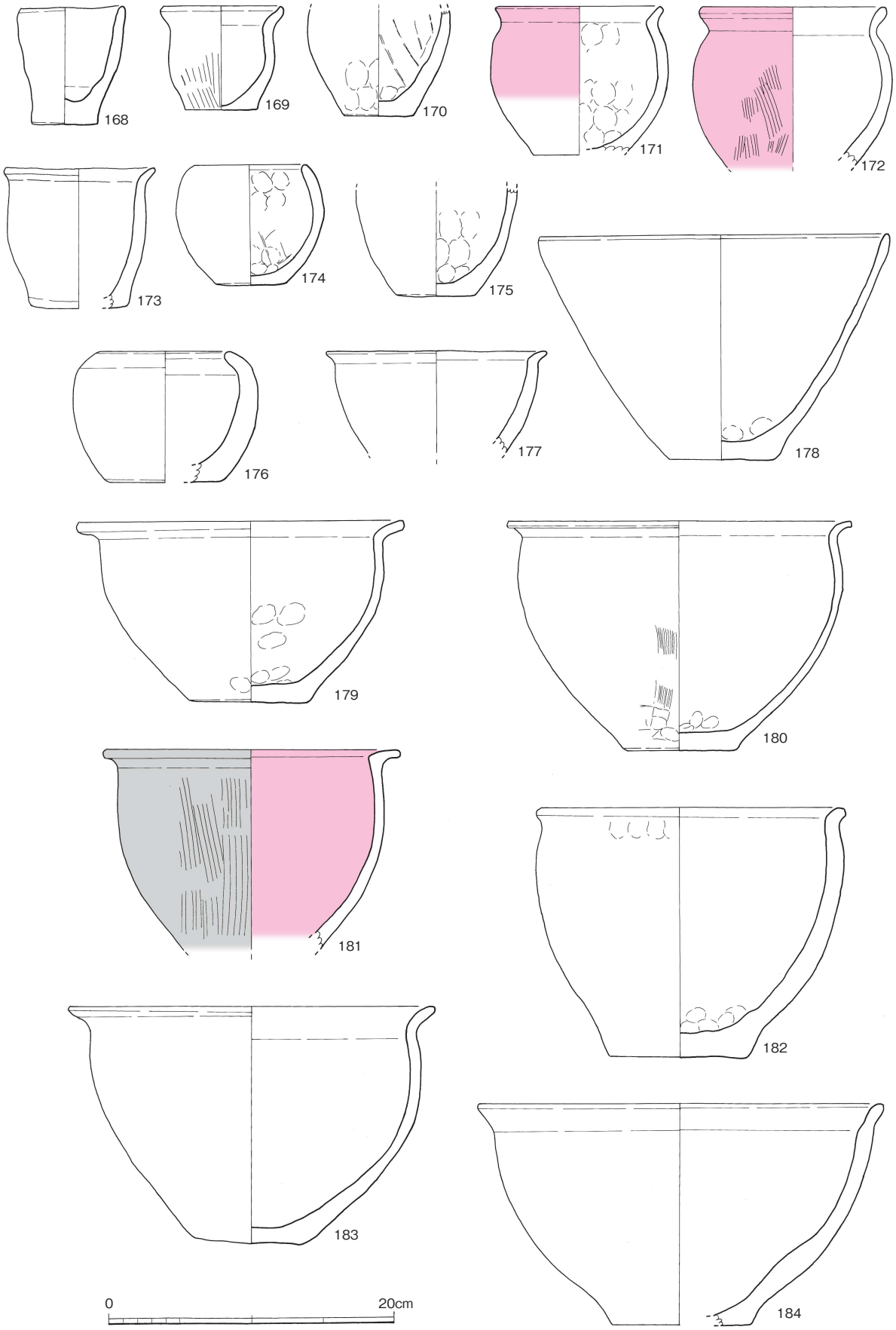


Fig.34　2 号溝出土遺物実測図 12（1 ／ 4）

穿たれている。259・260は円盤状石製品。紡錘車か石錘の未製品であろう。259は三郡変成岩、260は頁岩である。261は安山岩、262は頁岩の石庖丁である。263は滑石製の不明石製品である。表裏面に研磨痕があり、断面形は凸レンズ状をなす。円孔が穿たれており、戈型模造品の可能性も考えられる。264～272は石錘である。264～267は投弾型の石錘で長軸に沿って紐結溝を刻み廻したもの（264～266）と紐結溝に円孔を穿ったもの（267）がある。264は長さが3.74cm、重さが7.4g。265は長さが4.72cm、重さは10.7g。266は重さが25.2g。267は長さが6.65cm、重さは38.9g。268～273は釣鐘型の石錘である。基部側と底面側に1孔を穿っ

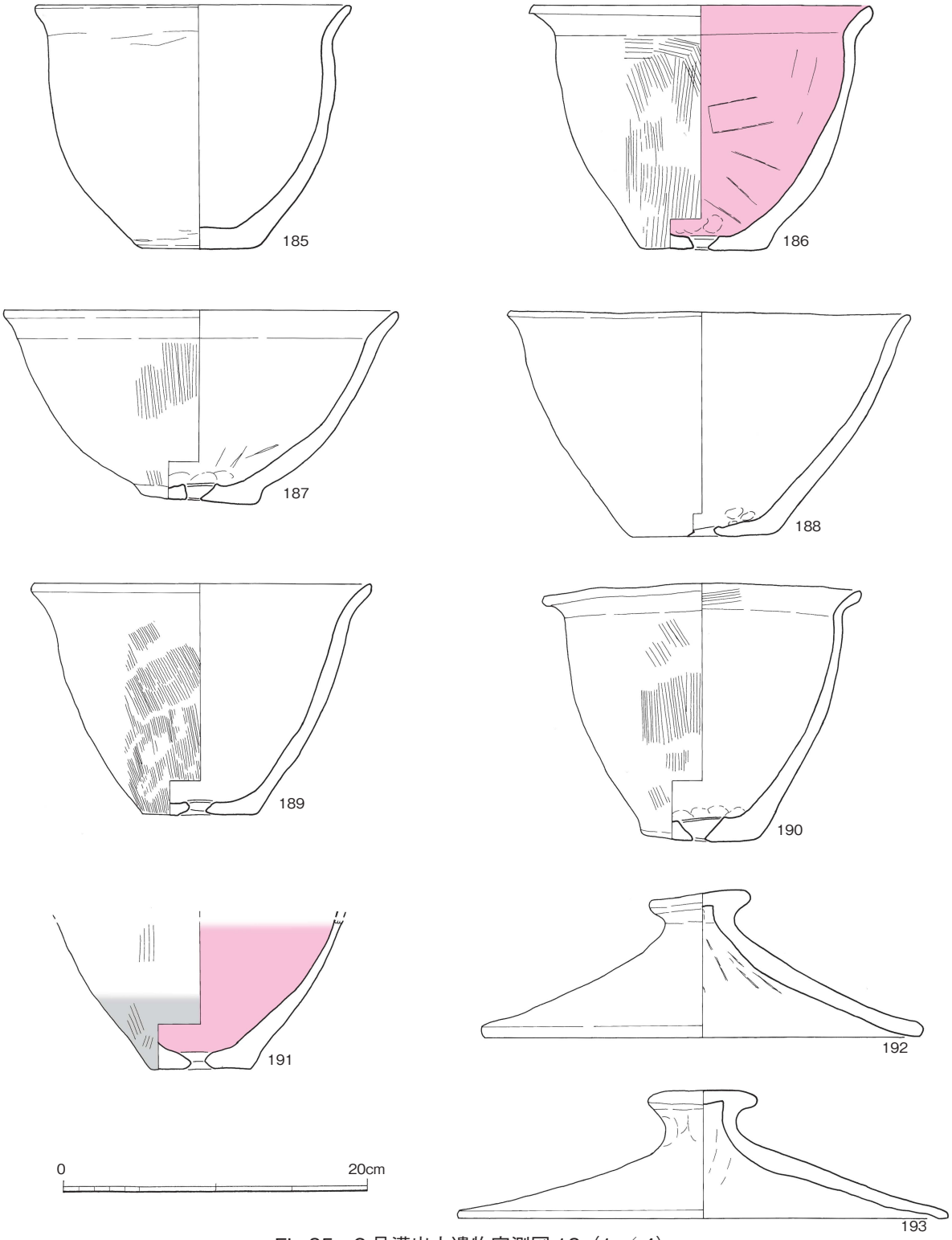


Fig.35　２号溝出土遺物実測図 13（1 ／ 4）

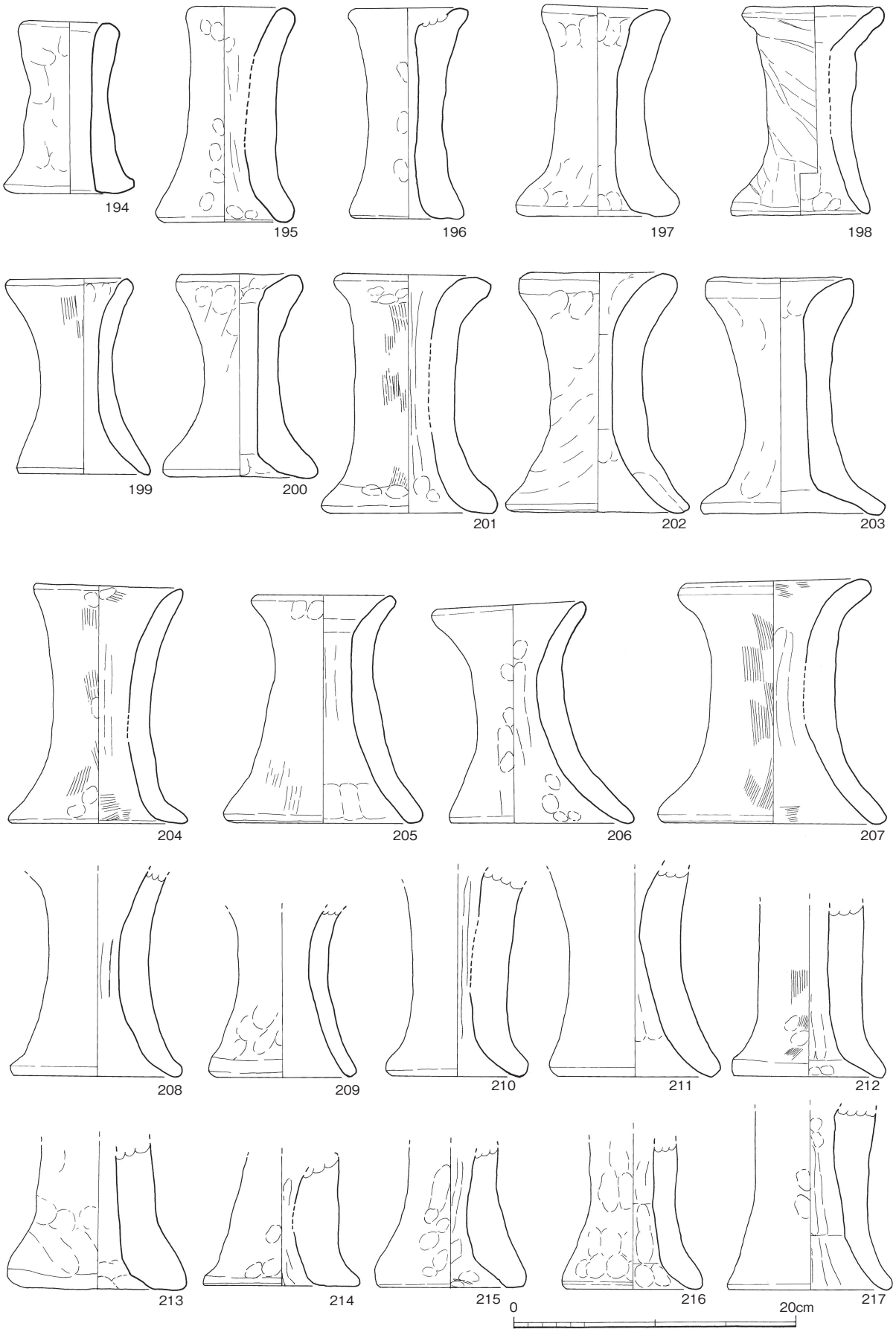


Fig.36　2 号溝出土遺物実測図 14（1 ／ 4）

たものと2孔を穿ったものがあり、各々の孔までには紐結溝が刻み込まれている。長さは5.69～8.9cm、重さは73.4～207g。273は未成品。いずれも滑石製である。275は両端を欠いた棒状の石錘で、両端に横位の紐結溝を掘り込んだものであろう。砂岩質。276は直径が16～16.6cm、厚さが5.5cmの片岩質石錘である。中央部に内孔径が1.4cmの円孔を表裏両面から穿孔している。重さは2,400gで延縄漁に具したものであろう。277は軽石製浮子である。長さが6.58cm、幅が5.24cm、厚さが3.05cm、重さが28.9gで3ヵ所に結紐痕がある。278は玄武岩の敲石。279は扁平片刃石斧である。現長は4.23cm、幅は1.94cm、厚さは0.57～0.69cmで長軸中央に幅4mmの溝が長軸中央の表裏面に刻み込まれている。片側縁には再加工痕があり、欠損した片刃石斧の再利用品であろう。280～284は玄武岩の太型蛤刃石斧である。いずれも刃部が欠損している。285は玄武岩の未成品で、蛤刃石斧か敲打石であろうか。286～288は砥石。286は手持ち型、287は据置型の仕上げ砥である。砥面は4～5面でよく研ぎ込まれている。砂岩質。

289・290は柄杓である。289は芯持ち刳り抜きの柄杓である。全長は32.6cmで、柄部の長さは12.1cm、柄の端部径は4.7cm。身部は長さが21.7cm、幅は8.7cm＋α、厚さは0.7～1.5cmで深さは6.8cmである。柄の先端

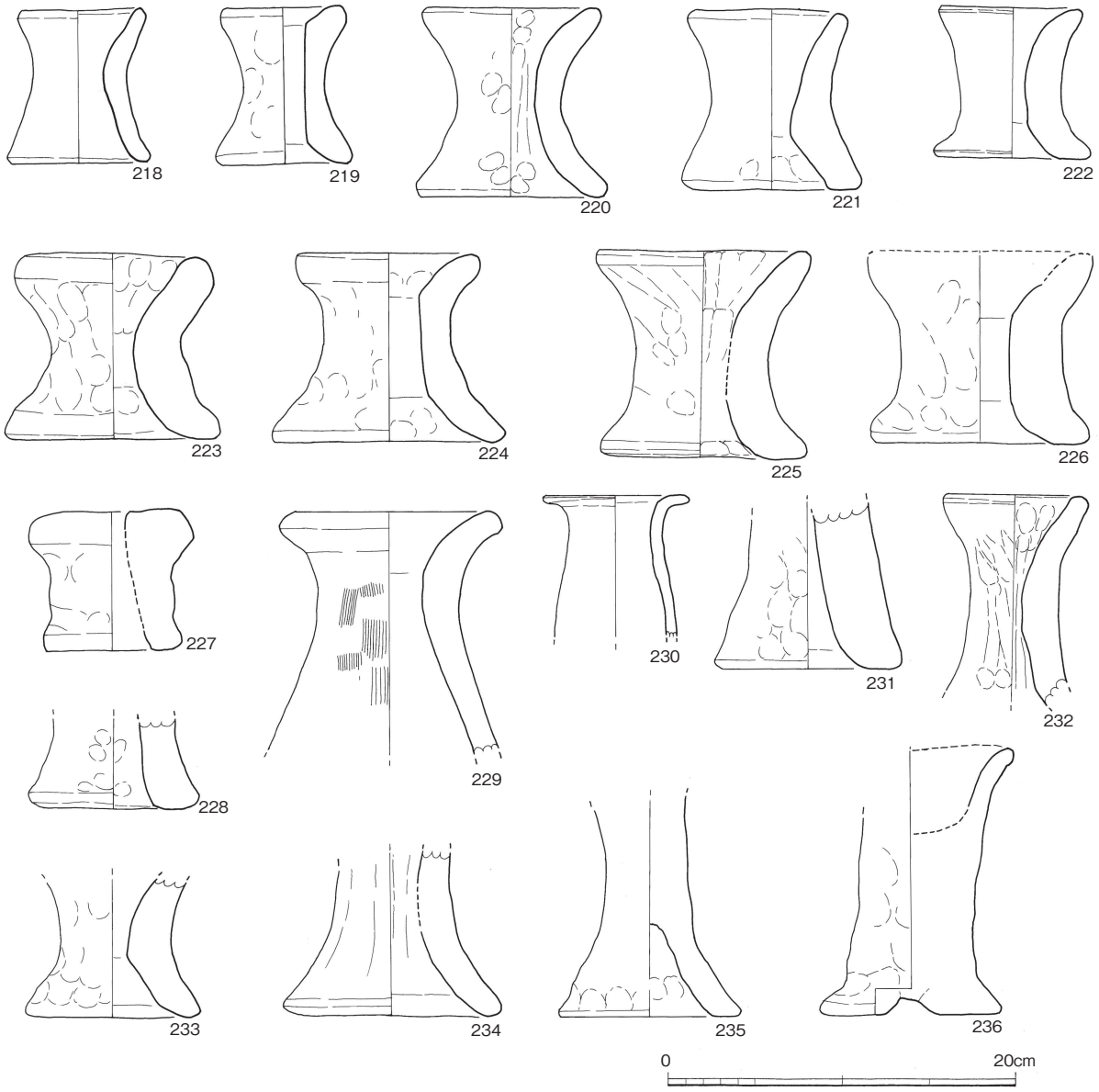


Fig.37　２号溝出土遺物実測図 15（1 ／ 4）

はグリップ状に削り出している。290はケヤキ材の柾目取りで、身部は焼失している。柄部の長さは17.1cm、幅は4.3cm、厚さは1.2cmで半月状にやや丸味をもたせ、先端部はグリップ状に削り出して仕上げている。291は柾目取りのカシの平鍬である。基部の中央には2.5cm×5cmの長方形のホゾ穴を彫り、その両肩には円孔を穿っている。長さは28.9cm＋α、器厚は1.5cmであるが収縮が著しい。292は芯持ちの槌であるが、折れた縦杵の再利用とも考えられる。槌端部には面取加工痕が残る。長さは33.4cm＋αで、槌長は22.6cm、槌径は6×6.6cm、柄長は10.8cm＋α、握径は2.3cmである。293は柾目取りしたシイ材の抉入板材である。長さは35.7cm、幅は7.6cm、厚さは1.6cmである。

5)その他の遺構と包含層の遺物(Fig. 43・44　PL. 33)

竪穴住居や掘立柱建物などのほかにひとつのまとまった遺構として把握できなかった柱穴群やプラン的に不整形な土壙状の落ち込みがあり、その覆土や鳥栖ローム層全体を覆う薄い包含層からも器台や紡錘車、石錘などの石器が出土した。

294は39号ピットから出土した口径が10.2cm、底径が12cm、器高が10.6cmの歪な器台である。肉厚の体部は短く口縁部や脚部は短く外反する。押圧ナデ調整で、内面には緩やかな稜を作る。胎土は粗く、微細～粗砂粒を多く含む。295は91号ピット出土の器台。底径は14.1cm。脚部はストレートに外反し、端部を丸く納める。胎土は良質で、細～石英粗砂粒と雲母微細、赤褐色粒を含む。296は224号ピット出土した鉢の脚台。底

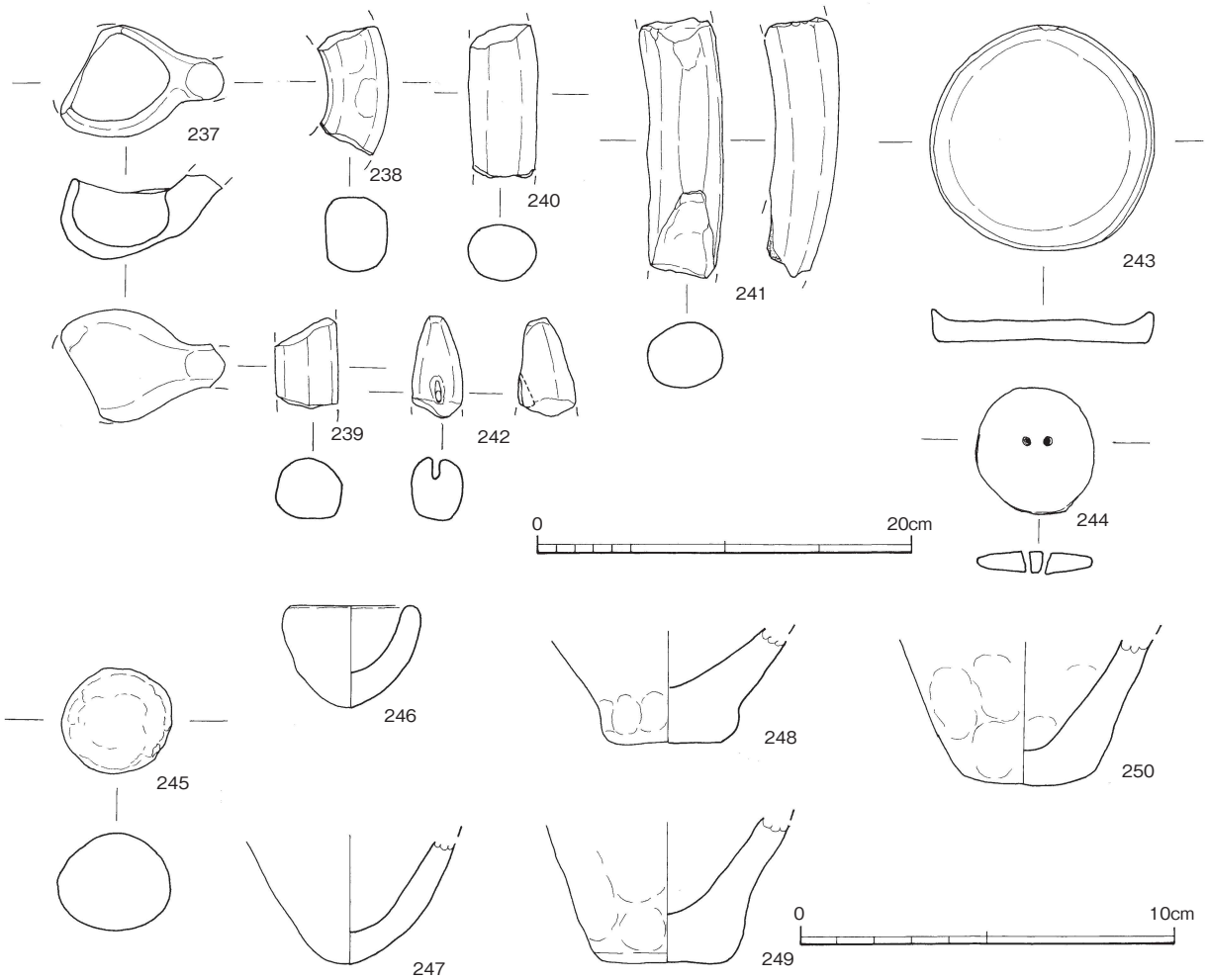


Fig.38　2号溝出土遺物実測図16（1／2・1／4）

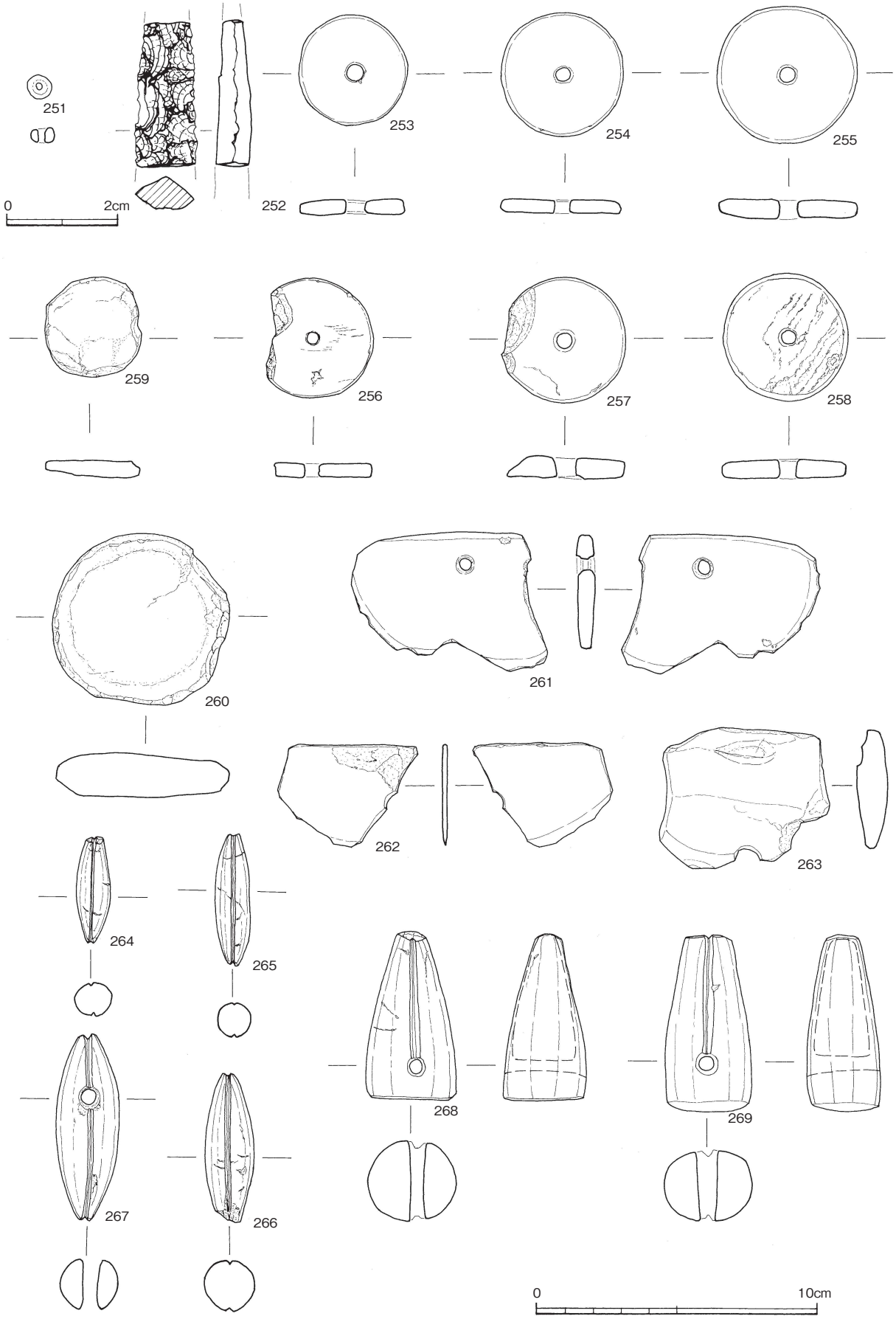


Fig.39　2 号溝出土遺物実測図 17（1 ／ 1・1 ／ 2）

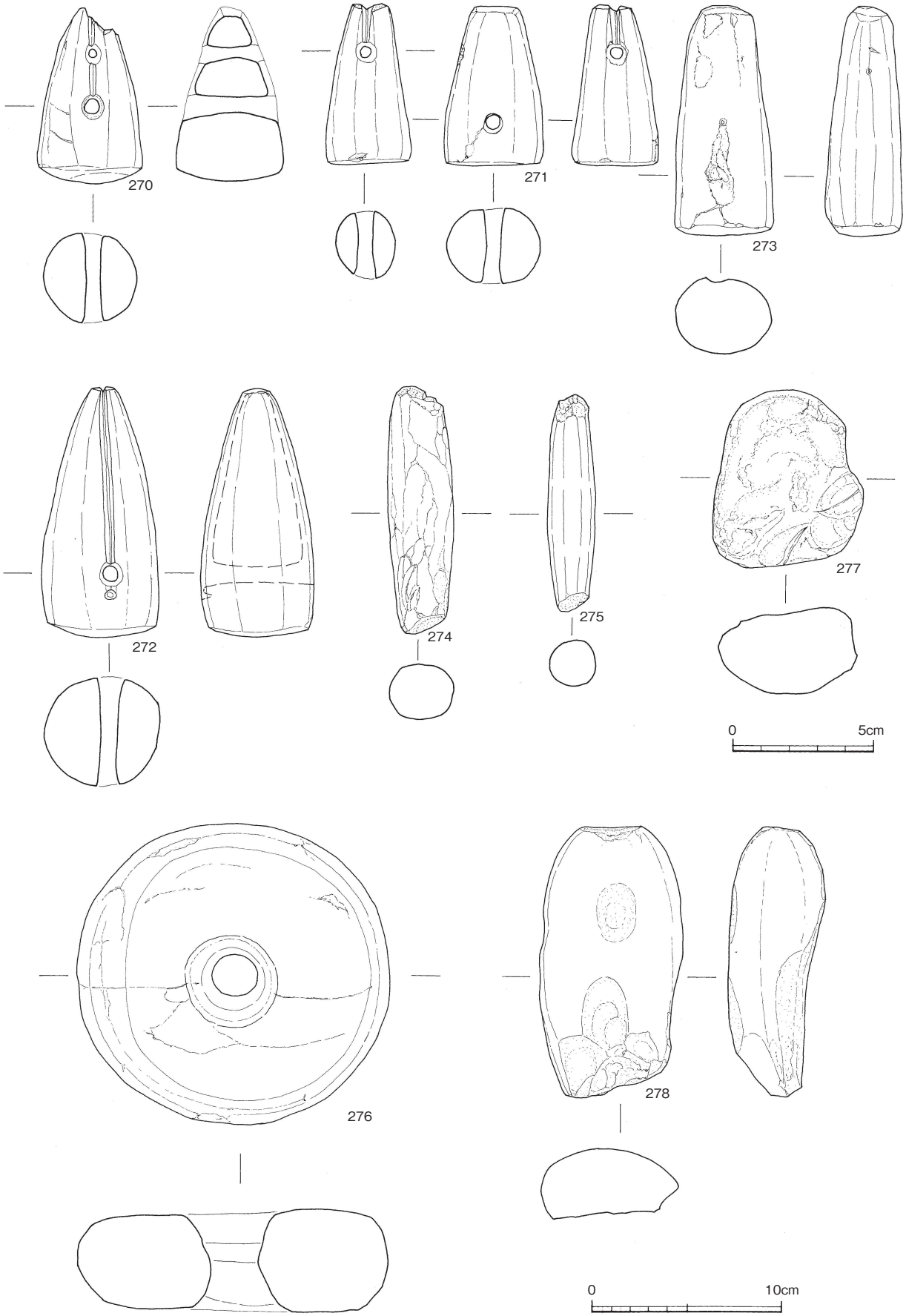


Fig.40　２号溝出土遺物実測図 18（1 ／ 2・1 ／ 3）

Fig.41　２号溝出土遺物実測図 19（1 ／ 2・1 ／ 3）

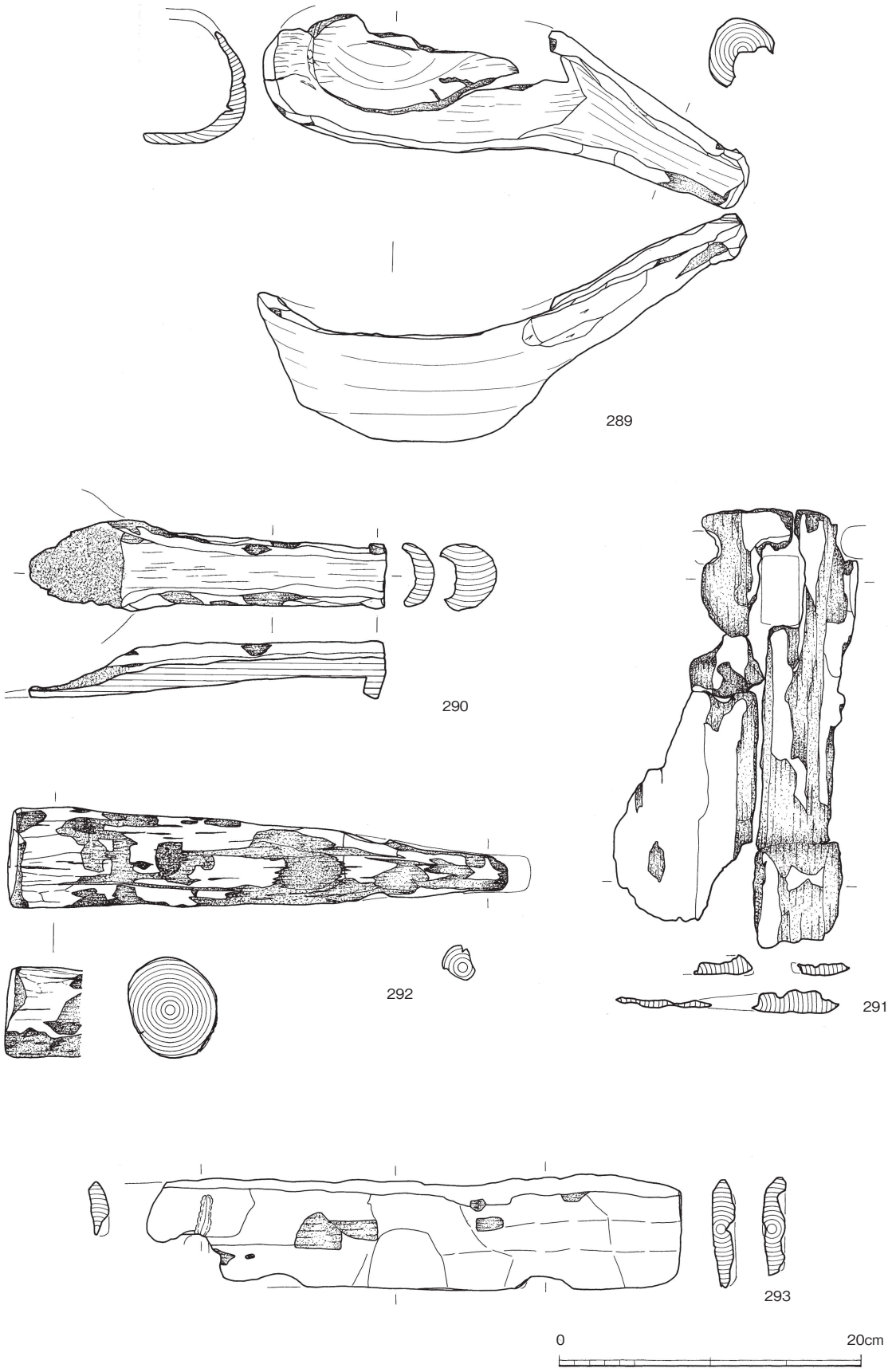


Fig.42　2 号溝出土遺物実測図 20（1 ／ 4）

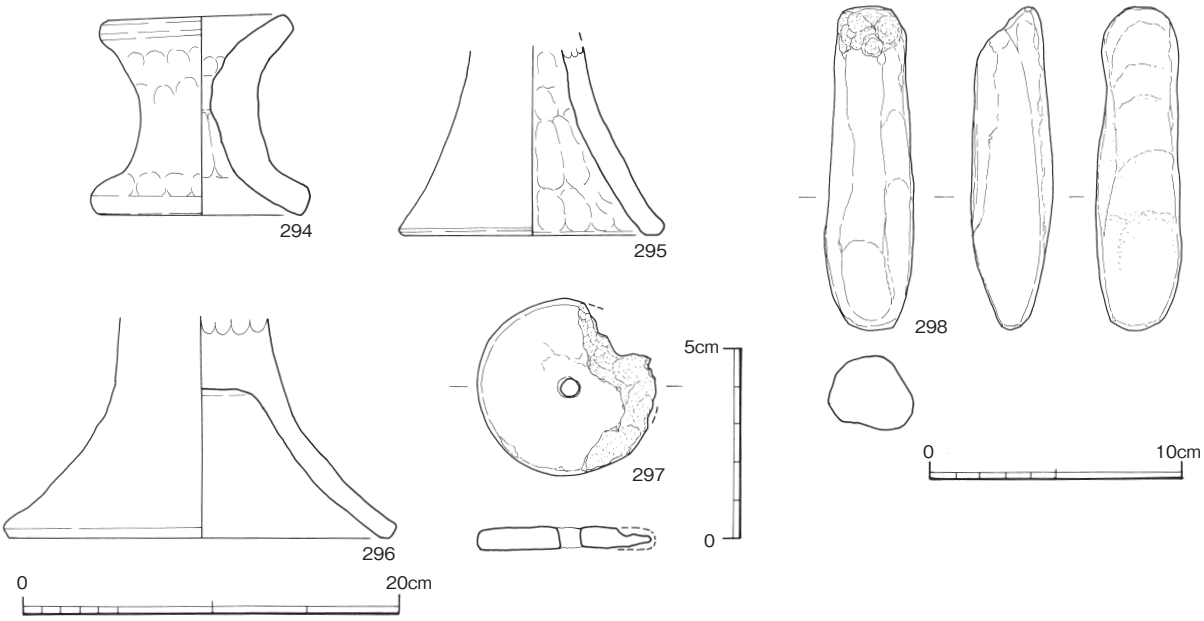


Fig.43　ピット出土遺物実測図（1／2・1／3・1／4）

径は20.8cm。脚部はラッパ状に外反する。胎土はやや粗く、小～粗砂粒と赤褐色粒を含む。297は247号ピット出土の滑石製紡錘車。直径は4.62cmで、中央部に孔径が0.58～0.65cmの円孔をやや斜めに穿っている。重さは19.9g。298は74号ピット出土の乳棒状石製品。

299～303は遺物包含層から出土した。299・300は滑石製紡錘車。299は直径が3.93～3.98cm、重さは35g。300は直径が4.35～4.41cmで重さは27.6g。301は幅が4.7cm、背厚が0.55cmの輝緑凝灰岩製石包丁。背部に0.35cm径の紐通孔を穿ち、刃部は丁寧に研磨している。302は石錘の未成品。長さは8.7cm、幅は5.7cm、厚さは4.5cm。長軸に沿って紐節溝状の刻みがあり、その線上に円孔を穿っているが貫通していない。変成岩製で重さは457g。303は破砕土器再利用の土錘である。直径は4.17～4.72cm、厚さは1.04cm、重さは22.5g。両端に結紐用の抉り込みがある。

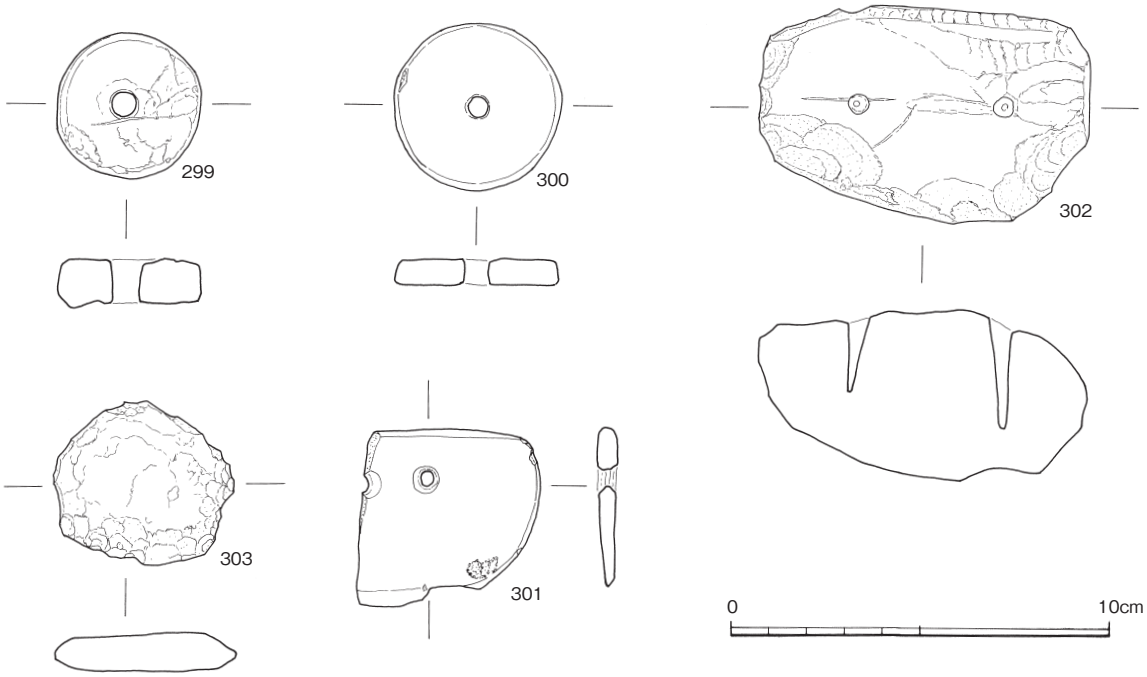


Fig.44　包含層出土遺物実測図（1／2）

Ⅲ．おわりに

夕景の中で見渡す平野は、山の端に沈む夕日に照らされて輝く頭を垂れた稲穂ばかりであったが、四半世紀が過ぎた今日は、西九州道の高架橋やショッピングモールの銀傘で昔日の感が久しい。この間に伊都区画整理事業地内の発掘調査が進み、平野東縁の様相は次第に明らかになりつつある。ここではその新知見を加味して今宿五郎江遺跡を俯瞰してみたい。

第3次調査では、古墳時代初めの竪穴住居と弥生時代中期末～後期の掘立柱建物、土壙、溝を検出した。このうち弥生時代の2号溝は、幅が4m、長さが20mで溝中には300箱に達する土器や石製品および木製品など多種多様な遺物が投棄されており、その大半は壺や甕などの土器が占めている。出土遺物は、須玖Ⅱ式から高三潴式期に比定されることから開削期は弥生時代中期末に始まり、後期前半には遺物が投棄されて機能を停止したと考えられる。この2号溝は、東隣の第5次調査区のSD-01に発し、本調査区の2号溝を経て第2次調査区のSD-100に繋がった後にそこから北西に流れを変えている。この一連の溝の東縁は確認されていないが、今宿五郎江遺跡の占地する低丘陵を南北に分断している感がある。この溝を境として遺跡の南北ではその在り方に若干の差異が窺がえる。まず、北台地上では第1次調査区で環壕の北西隅溝が確認されている。その規模や環壕内の様相は明らかになっていないが、環壕を取巻く南西縁（第3次調査区）には掘立柱建物群が拡がっている。これに対して南の台地上には多数の掘立柱建物群（第2・9次調査区）が拡がっている。この建物群の外側には、幅3m余の溝が台地の縁辺に沿って巡っている。この溝は、今宿五郎江遺跡の東縁にあたる第13次調査区に発し、南の第10次調査区で流れを西へ転じて第9次調査区に続く。その西端は更に西へのびながら北へ流れを変えて第12次、11次調査区へと続き、その北端は本調査区の西50mに位置する第4次調査区まで繋がっている。また、東縁の第13次調査区では、幅が4m余の陸橋部が確認されており、丘陵の縁辺を巡る環壕と報告されている。この間の広さは東西長が200m、南北長は180mで総面積は35,000㎡に及ぶ。この一連の溝を中心に今宿五郎江遺跡の弥生期を俯瞰すれば、多少の時期差を加味しても弥生時代中期後葉～末には一連の溝が開削され、後期初頭～前半、遅くとも後半には大量の土器や石器の投廃棄とともに埋没してその機能を終えている。この環壕は、台地の縁辺に沿うように開削し、東縁に陸橋部を配している。第12次調査区では井泉が検出されており、流路としての機能も保持していたものと考えられる。ここで注目すべきは本調査区の2号溝に連なる東西方向の溝である。この溝を境にして、北台地にはひとつの環壕が掘られ、その環壕を更に囲むように台地の縁辺に環壕を配している。いわば二重環壕的な様相をなし、北台地の小環壕の機能付けが重要になってくる。同時に、東西の溝の南北では掘立柱建物を中心とする集落内の在り方に若干の差異が窺がえ、北台地上の小環壕との関わりを含めて詳細な検討を必要とする。

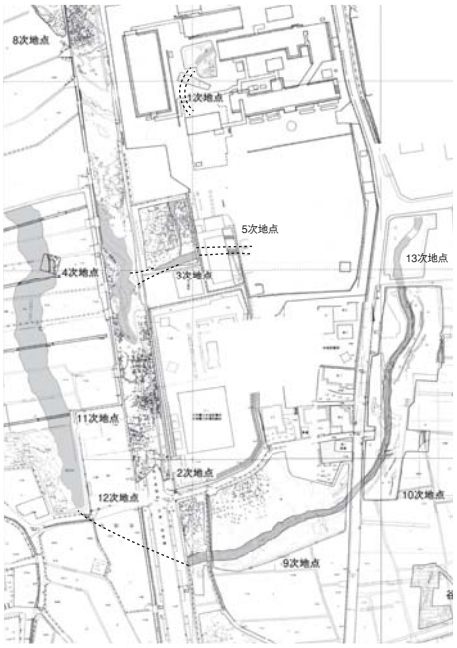


Fig.45　今宿五郎江遺跡環壕概念図
（1/4,000）

今宿五郎江遺跡第３次調査出土剥片石器について

森　貴教(九州大学大学院)

はじめに

今宿五郎江遺跡第３次調査では溝SD-01・02などから玄武岩製の剥片石器（以下、本資料）が多数出土した。本稿はこの玄武岩製剥片石器の概要を提示し、弥生時代中期後半から後期初頭における今山産玄武岩を用いた剥片石器利用について考察するものである。

１．資料の概要

今宿五郎江遺跡は、弥生時代の石斧製作址として著名な福岡市西区今山遺跡の南東約２㎞に位置する弥生時代中期後半から後期を中心とする環濠集落である（森本2010）。本資料はSD01・02などから出土したものが多く、所属時期は出土した土器より弥生時代中期後半から後期初頭と考えられる。本資料27点のうち特徴を良好に示す剥片石器３点（資料①～③）を抽出・図化し、その他のものは法量などを計測し観察表を作成した（図１・表１）。以下、個別にみていく。

資料①は玄武岩製のスクレイパー（削器）である。背面には複数の先行剥離痕が認められる。平面形は楕円形を呈し、末端部には微細剥離痕が認められ摩耗している。資料②は玄武岩製のスクレイパーである。表面、裏面は自然面（礫面）を残す。粗い剥離により末端部に刃部が形成されている。剥離痕は不連続である。資料③は玄武岩製のスクレイパーである。表面、裏面は自然面を残す。平面形は扇形を呈し、粗い剥離により刃部が形成されている。本資料のなかでは最大幅18.1㎝と大型である。

２．今山産玄武岩の利用と剥片石器

玄武岩の原産地である今山は、縄文時代から打製石斧の産地として使用され（吉留2005）、早良区重留遺跡第１次調査では縄文時代後期後半から晩期前半に属する玄武岩製打製石斧、同未完成品・剥片が出土している（米倉2007）。しかし、その利用が本格化するのは弥生時代である。弥生時代開始期から自家消費的な両刃石斧の製作が行われていたと考えられるが、前期末以降に最も盛行する。

本資料の所属時期である弥生時代中期後半（須玖Ⅱ式）は今山遺跡における両刃石斧の製作が終了した時期である（米倉編2005）。当該期には今山遺跡での石斧製作の終焉と代替するように古今津湾沿岸の湯納遺跡、飯氏遺跡、今宿五郎江遺跡において小規模な石斧製作が開始される（吉留ibid.）。このような今山産玄武岩利用の時期的変遷を念頭に置いていたため筆者は当初、本資料は弥生時代中期後半以降の比較的小規模な石斧製作に関連する可能性が高いとみていた。

ところが観察の結果、石斧製作とは直接関係しないスクレイパー・RF（二次加工のある剥片）・UF（使用痕を有する剥片）が大半を占めていることが明らかになった。石斧製作（剥離工程）で生じる剥片にはいくつかの形態的な特徴がある。最大長４㎝以下、最大幅６㎝以下のやや横長の剥片が多く、末端部には微細剥離痕が全く認められない。自然面は背面の一部にのみ残存している（米倉編ibid.）。他方、本資料は石斧製作で生じる剥片と比較して大型（最大幅11～13㎝）であり、表裏ともに自然面が残存するものが多いこと、そして末端部に微細剥離痕が認められるなどの差異が認められた。このことから玄武岩の転礫を素材として便宜的に石器が製作されていたといえる。弥生時代中期後半は立岩系石庖丁の流通の最盛期であり糸島地域でも散見されるが、不安定な入手だったことが窺える。使用方法の詳細は不明だが、本資料は今山産玄武岩が石斧のみでなく収穫具などとしても利用された可能性を示し、原産地周辺の遺跡群における資源利用と生業様式を考察するうえで非常に重要である。

おわりに

本稿では今宿五郎江遺跡第３次調査出土の玄武岩製剥片石器をとおして、今山産玄武岩の利用について考察を加えた。本資料の報告が今後の調査・研究の一助になれば望外の幸せである。

謝辞　本稿の作成にあたり小林義彦、瀧本正志、谷　直子の諸氏に資料調査などでお世話になりました。末筆ではありますが、深く感謝申し上げます。なお本研究は、平成24年度日本学術振興会特別研究員奨励費（24・2191）の助成を受けたものである。

参考・引用文献（五十音順）

二宮忠司(編)　1991『今宿五郎江遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集　福岡市教育委員会
森本幹彦　2010「今宿五郎江遺跡の成立とその背景―弥生時代後半期の環濠集落とその対外交流の様相―」『福岡考古』第22号　福岡考古懇話会
吉留秀敏　2005「今山産玄武岩の利用とその変遷」『石器原産地研究会第7回研究集会発表要旨』石器原産地研究会
米倉秀紀(編)　2005『今山遺跡第8次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集　福岡市教育委員会
米倉秀紀　2007「9. 小結（縄文時代のまとめ）」『入部XⅡ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第925集　福岡市教育委員会

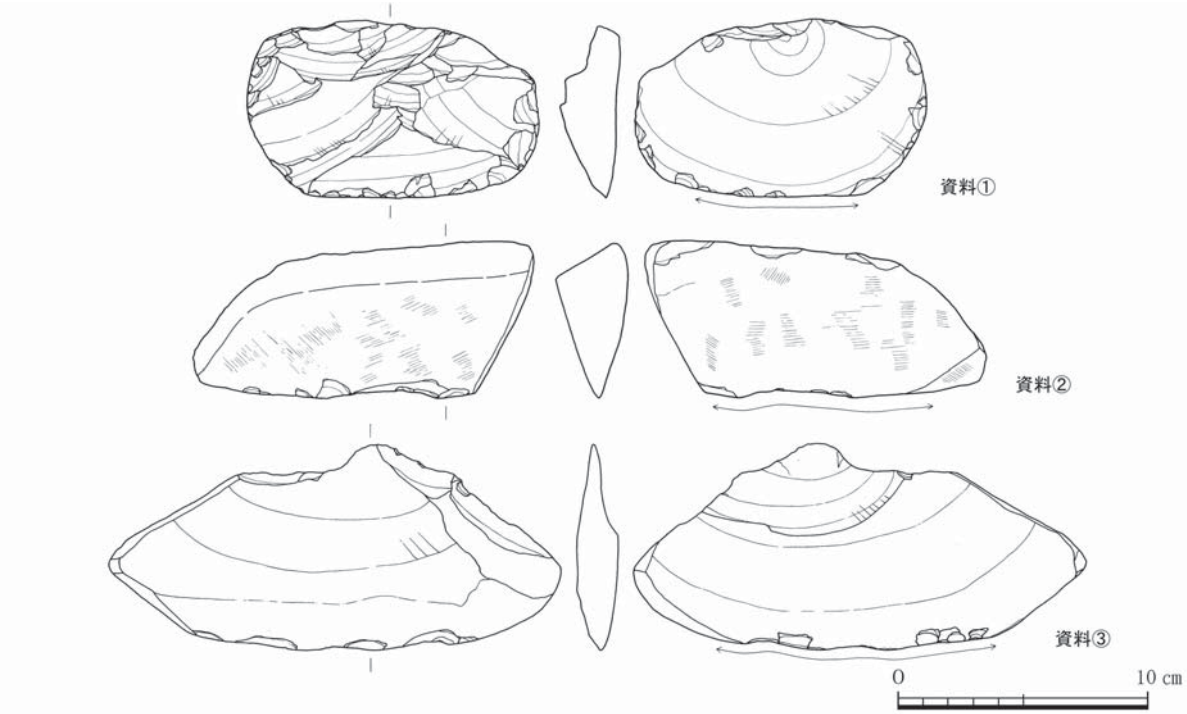


図１　剝片石器実測図（S=1/3）

表1　剝片石器観察表

No.	出土位置	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量（g）	備考	
1	―	スクレイパー	玄武岩	7.2	11.6	2.4	240	微細剝離痕あり	資料①
2	―	スクレイパー	玄武岩	6.3	13.6	3.0	300	微細剝離痕あり	資料②
3	―	スクレイパー	玄武岩	8.3	18.1	1.9	336	微細剝離痕あり	資料③
4	SD－02	スクレイパー	玄武岩	8.5	12.4	1.7	264	微細剝離痕あり	
5	SD－02	スクレイパー	玄武岩	9.2	9.8	2.1	241	微細剝離痕あり	
6	SD－02	スクレイパー	玄武岩	8.3	11.3	2.0	255	微細剝離痕あり	
7	SD－02	スクレイパー	玄武岩	6.5	14.6	1.7	265	微細剝離痕あり	
8	SD－02	スクレイパー	玄武岩	8.0	11.9	2.1	347	微細剝離痕あり	
9	―	スクレイパー	玄武岩	10.9	12.4	2.8	524	微細剝離痕あり	
10	―	スクレイパー	玄武岩	6.4	17.0	2.0	270	微細剝離痕あり	
11	―	スクレイパー	玄武岩	4.8	8.9	1.2	62	微細剝離痕あり	
12	―	スクレイパー	玄武岩	8.1	12.4	2.2	250	微細剝離痕あり	
13	SD－02	スクレイパー?	玄武岩	5.9	8.2	1.8	153		
14	SD－02	スクレイパー?	玄武岩	8.9	11.9	3.0	387		
15	SD－02	UF	玄武岩	9.6	14.5	2.5	449	石器製作には関連していない	収穫具?
16	SD－02	UF	玄武岩	6.8	11.4	1.7	144	石器製作には関連していない	収穫具?
17	SD－02	UF	玄武岩	6.7	8.8	2.6	134	石器製作には関連していない	収穫具?
18	SD－02	UF	玄武岩	8.4	13.0	2.9	428	石器製作には関連していない	収穫具?
19	SD－02	UF	玄武岩	9.2	11.3	2.3	315	石器製作には関連していない	収穫具?
20	SD－02	UF	玄武岩	7.5	10.4	3.0	313	石器製作には関連していない	収穫具?
21	SD－02	UF	玄武岩	6.0	10.3	2.1	155	石器製作には関連していない	収穫具?
22	SD－01	RF	玄武岩	7.3	10.9	2.3	261	用途不明	
23	SD－02	RF	玄武岩	8.6	17.2	3.4	500＜		
24	―	RF	玄武岩	9.2	9.8	3.8	336	用途不明	
25	―	RF	玄武岩	7.9	11.7	2.5	320	用途不明	
26	―	RF	玄武岩	4.4	11.0	1.6	136	用途不明	
27	―	剝片	玄武岩	7.2	11.3	1.2	101	石斧製作に関連する可能性あり	

Tab.3　出土土器分類表１

器種	分類		所見
壷	A	1	袋状口縁壷で頸部が長細いもの。タマネギ状の胴部が付き、底部は平底である。頸部や肩部にM字状の突帯が付く。口縁部内面から外面全体にかけて丹塗りのものが多く、頸部に暗文を施すものが多い。
		2	袋状口縁壷で頸部が太く短いもの。球形の胴部が付き、底部は平底である。口縁端部を丸くおさめるものと、M字状のものがある。肩部や胴部に突帯がめぐるものがある。口縁部内面から外面全体にかけて赤色顔料を塗布するものがある。
		3	袋状口縁壷で口縁の外側に稜線を有するものである。口縁部はやや丸味を帯びながら屈曲している。口縁部から外面にかけて赤色顔料を塗布する。
	B	1	素口縁広口壷で、頸部が直線的に立ち上がり、口縁部に向けて外反するもの。口縁端部を丸くおさめ、球形の胴部が付くと思われる。口縁部内面から外面全体にかけて赤色顔料を塗布するものもある。
		2	素口縁広口壷で、口縁が朝顔形にひらくもの。胴部最大径が胴部上半にくる肩の張った胴部が付く。底部は平底である。口縁部内面から外面全体にかけて赤色顔料を塗布するものもある。
		3	素口縁広口壷で、口縁が短く外反し、やや長胴の扁球形の胴部が付く。底部はやや丸味をもつ平底である。外面全体に赤色顔料を塗布するものもある。
		4	素口縁広口壷で口縁部が強く外反し、頸部や肩部に突帯をもつもの。扁球形の胴部が付き、底部は平底である。頸部に暗文をもつものや、胴部にも突帯をもつものがある。外面に赤色顔料を塗布するものもある。
	C	1	鋤先口縁壷で、口縁が平坦あるいはやや垂れ下がるもの。球形の胴部が付く。底部は平底であろう。口縁端部に刻目を施すものや、頸部から胴部にかけて突帯を付けるものがある。頸部に暗文をもつものもあり、口縁部から外面全体にかけて赤色顔料を塗布するものや、口縁から肩部まで赤色、肩部以下を黒色と塗り分けるものもある。
		2	鋤先口縁壷で、口縁がやや立ち上がるもの。鋤先部分の内側への張り出しが三角突帯状をなす。ややつぶれた球形の胴部をもつ。底部は平底である。口縁端部に刻目を施し、頸部から胴部にかけて突帯を付ける。外面全体に赤色顔料を塗布するものもある。
	D		いわゆる瓢形の壷である。肩部の段はゆるく、頸部と肩部に突帯がめぐる。
	E		素口縁の細頸壷である。口縁部にむかって外反する頸部に、断面M字状の突帯がめぐり、暗文を施す。外面全体に赤色顔料を塗布する。
	F		強く外反する口縁部と球形の胴部をもつ小形壷である。底部はやや丸味をもつ平底である。
	G		直口縁の壷である。口縁は直立気味に立ち上がり、球形の胴部が付くと思われる。
甕	A	1	L字状の屈折口縁の甕で、やや丸味をもつ胴部に平底が付く。口縁部は平坦か、やや立ち上がる。
		2	短いL字口縁の甕で、胴部に不整形の隅丸長方形の窓が付く。全体に器壁が厚くいびつな胴部で、平底の底部が付く。
	B	1	鋤先口縁の甕で、やや丸味をもつ胴部が付く。口縁部は平坦で、内側に小さく張りだし、外側にやや長くのびる。
		2	鋤先口縁の甕で、胴部が丸く張りだし、平底の底部が付く。口縁部は平坦で、外側に長くのびた鋤先状である。口縁部下と胴部に突帯がめぐる。口縁部から外面全体に赤色顔料を塗布する。
		1	屈折口縁で、くの字口縁に近い甕である。球形に近い胴部が付く。胴部状半に暗文を施し、胴部最大径付近に突帯がめぐる。口縁部から外面全体に赤色顔料を塗布する。
		2	屈折口縁で、くの字口縁に近い甕である。張り出しの強い胴部が付く。底部はややゆるやかに立ち上がる平底である。胴部に突帯がめぐるものもある。

Tab.4　出土土器分類表２

器種	分類		所見
壺	C	3	くの字口縁の甕で、くの字の屈曲がやや緩いもの。胴部の張りは強く、胴部最大径の大きさが口径と近くなる。平底の底部が付く。口縁部下に突帯がめぐるものもある。
		4	くの字口縁の甕で、くの字の屈曲が緩いもの。胴部の張りは強く、やや長胴化し、胴部最大径の大きさが口径と同じくらいになる。ゆるく立ち上がる平底、あるいはやや丸底の底部が付く。
	D		くの字口縁の甕で、口径に比して器高が低く、胴部が張りだすもの。口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。平底の底部が付く。外面全体に赤色顔料を塗布するものもある。
高杯	A		鋤先口縁の張り出しが弱く、坏部の深さが深いもの。脚部の高さはやや低く、裾広がりになる。坏部内面から外面全体にかけて赤色顔料を塗布するものが多い。
	B		鋤先口縁の張り出しが強く、坏部の深さが浅いもの。脚部の高さはA類よりやや高く、細長くなる。坏部内面から外面全体にかけて赤色顔料を塗布するものが多い。
鉢	A	1	小形の碗形を呈する鉢である。口縁端部を丸くおさめる。胴部はやや丸味を持つ。平底である。
		2	碗形を呈する鉢で、口縁部を丸くおさめるものと、M字状をなすものがある。胴部はやや丸味をもつ。平底、やや上げ底、レンズ底に近いものなどがある。内・外面全体に赤色顔料を塗布するものもある。
	B		直線的に立ち上がる胴部をもつ鉢である。口縁端部は丸くおさめる。底部は平底のものが多い。
	C	1	ゆるく屈折する短い口縁がつく鉢である。胴部はやや丸味をもつ。底部は平底である。内面に赤色、外面に黒色の顔料を塗布するものもある。
		2	ゆるく外反する短い口縁がつく鉢である。胴部は半球形に近く丸味をもって膨らむ。底部に焼成前穿孔があり、甑の可能性がある。内面に赤色、外面に黒色の顔料を塗布するものもある。
	D		手ずくねのミニチュア土器である。碗形・鉢形などで、素口縁のものや、短く屈曲する口縁の付くものなどバリエーションが多い。いずれも指オサエの痕跡が明瞭である。
蓋	A		低平に広がり、天井部が屈曲し、つまみとなる蓋である。口縁部内面が黒変している。
器台	A		口径と脚径がほぼ同径の器台で、器壁はやや厚く、孔は絞って作ったものと、棒状工具により作ったものとがある。口縁部の外反が弱いものは、支脚の可能性がある。
	B		口径より脚径が大きくなる器台である。器壁はやや薄いものと厚いものがあり、孔内面に絞り痕が残る。一部被熱しているものもある。
	C		口径と脚径がほぼ同径で器高が低い器台である。器壁はやや厚く、孔は絞って作ったものと、棒状工具により作ったものとがある。被熱しているものもある。
	D		口径が脚径より大きく、器高が低いもの。
	E		口径より脚径が大きくなり、器壁が薄いもの。通常の器台ほ半分ほどの器壁の厚みしかなく、器台ではないかもしれない。
	F		孔が貫通せず、全体にやや傾いているもの。器台ではなく支脚の可能性が高い。下半しか残存しないものも、傾いており、台付甕などの脚部ではない。

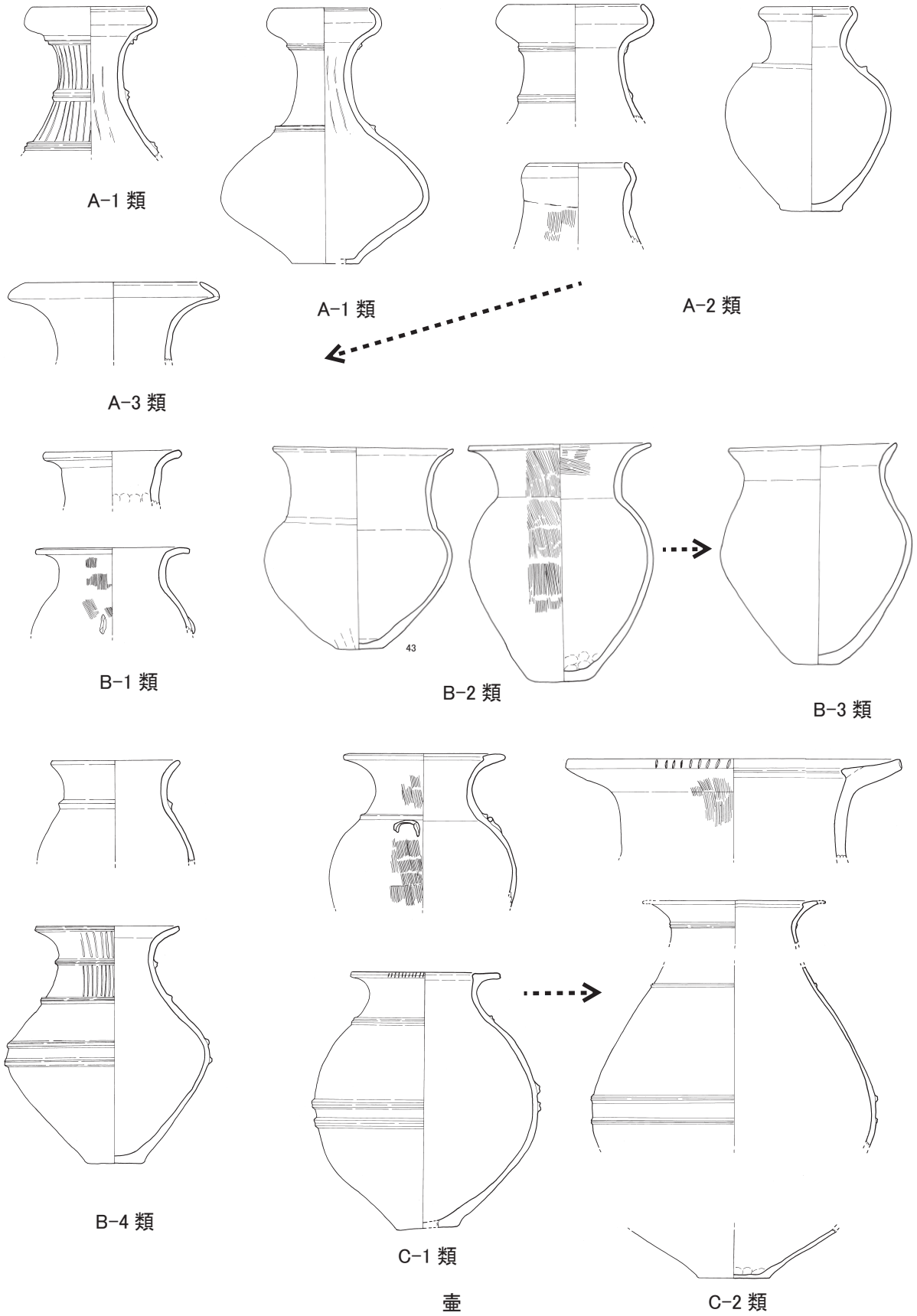


Fig.45　土器分類図 1

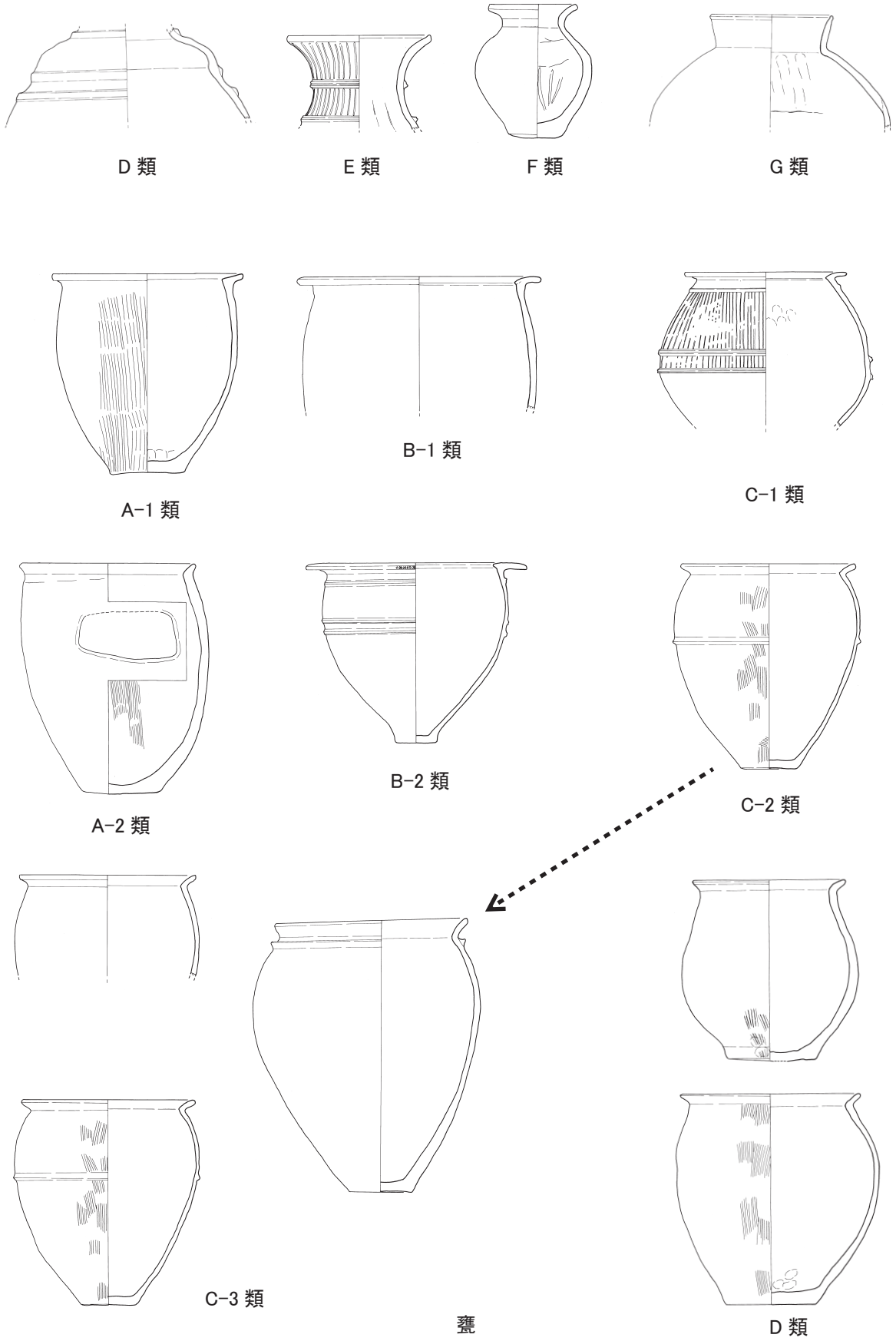


Fig.46　土器分類図２

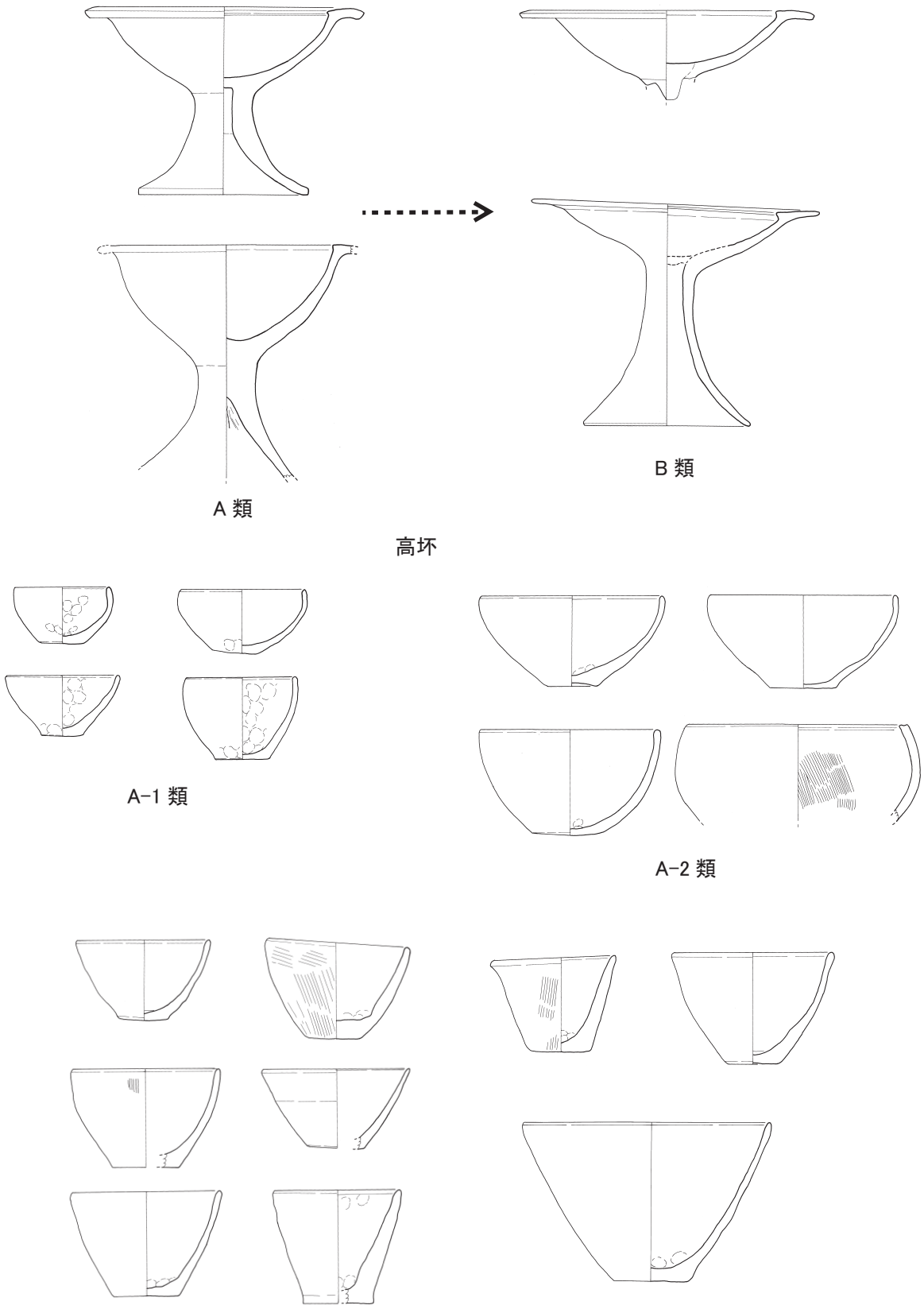
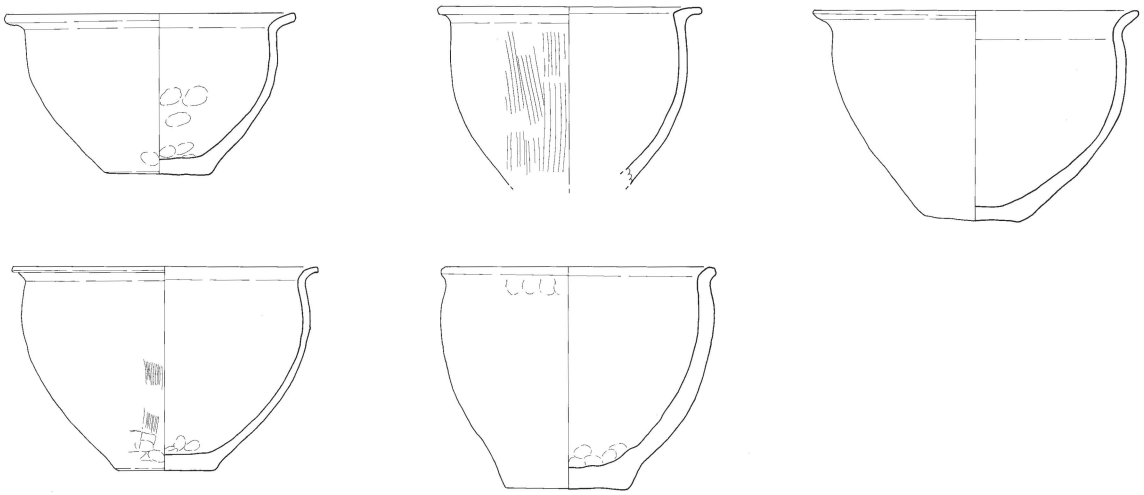
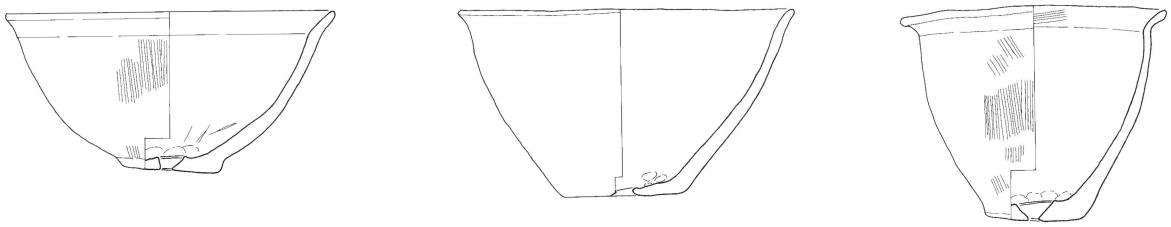


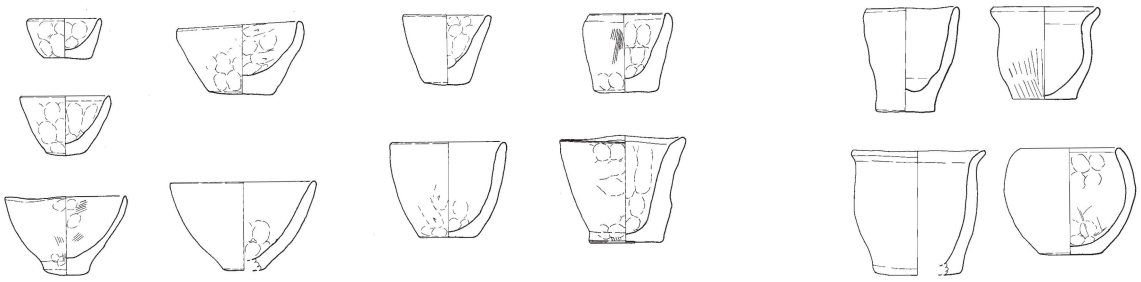
Fig.47　土器分類図３



C-1 類

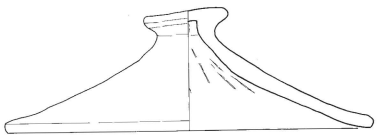


C-2 類



D 類

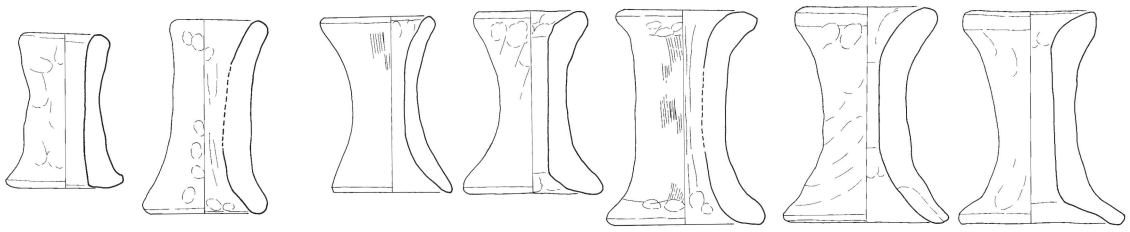
鉢



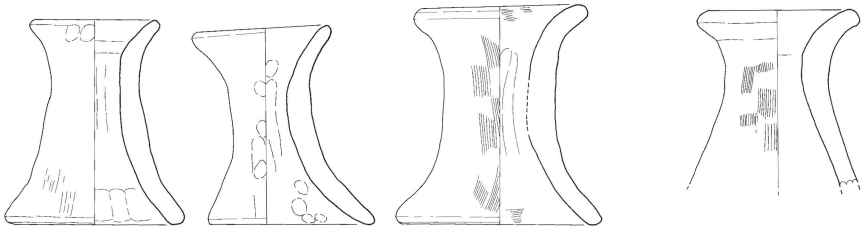
A 類

蓋

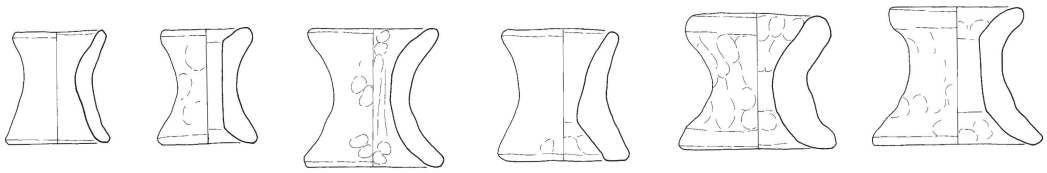
Fig.48　土器分類図 4



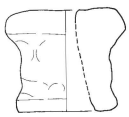
A 類



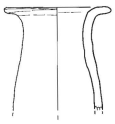
B 類



C 類



D 類



E 類

F 類

器台

Fig.49　土器分類図５

Tab.5　出土遺物（土器）観察表　1

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.9	2	SC-01	古墳	壷	F	14.0 ＋ α 12.3 	砂粒を含む	良好	淡赤褐色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.9	3	SC-01	古墳	壷	F	20.4 ＋ α 16.4 	5㎜前後の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	なし	タテハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ	黒斑あり
Fig.9	4	SC-02	古墳	壷	F	11.5 10.4 	緻密・直径1㎜位の砂粒を少し含む	良好	黒～橙色	黒塗り	タテハケメ・ナデ	タテハケメ・ナデ	
Fig.13	5	SB-03	弥生	壷	B 1	11.9 ＋ α 17.5 	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙	なし	ナデ・工具痕あり	ナデ	
Fig.13	6	SB-03	弥生	器台	B	9.6 ＋ α 11.2 	粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含む。赤色粒子・雲母片を含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.13	7	SB-03	弥生	器台	B	14.1 10.5 11.9	粗い。直径1～3㎜の砂粒・雲母片を多く含む	良好	明赤橙色	なし	タテハケメ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.13	9	SB-11	弥生	鉢	A 2	10.6 16.4 5.6	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙褐色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ・磨滅	
Fig.18	10	SK-04	弥生	器台	A	13.3 11.3 12.0	粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含む。赤色粒子・雲母片を含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.18	11	SK-05	弥生	甕	C4	24.6 18.5 7.7	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙褐色	なし	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig.18	12	SK-05	弥生	器台	A	14.5 ＋ α 10.7 	粗い。直径1～3㎜の砂粒・雲母片を多く含む	良好	明赤橙色	なし	ナデ	ハケメ・指オサエ・ナデ	
Fig.18	13	SK-05	弥生	器台	A	16.5 11.2 11.5	緻密・直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig.18	14	SK-05	弥生	器台	A	11.0 ＋ α 11.0	粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含。・雲母片を少し含む	良好	淡黄橙色	なし	ナデ	ナデ・絞り痕あり	
Fig.18	15	SK-05	弥生	器台	A	9.4 ＋ α 10.5	粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含。・雲母片を少し含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.18	16	SK-09	弥生	甕	C4	24.4 17.0 2.4	粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含む	良好	橙褐色	なし	タテハケメ	タテハケメ	黒斑あり
Fig.20	17	SD-01	弥生	壷	B 1	7.8 ＋ α 29.0 	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	口縁部内面～外面全体丹塗り	ナデ・口唇部刻目	ナデ・磨滅	
Fig.20	18	SD-01	弥生	器台	B	15.5 ＋ α 16.6	緻密・直径1㎜位の砂粒を含む	良好	赤褐色	なし	指オサエ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig.20	19	SD-01	弥生	鉢	C1	13.4 ＋ α 25.6 	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡橙色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	

Tab.6　出土遺物（土器）観察表　2

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.20	20	SD-01	弥生	鉢	C2	12.5 22.2 9.0	直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	底部穿孔あり
Fig.20	21	SD-01	弥生	鉢	B	6.5 13.6 6.0	やや緻密。直径1㎜の砂粒を含む	良好	灰褐色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.23	28	SD-02	弥生	壷	A 1	15.5 ＋ α 12.0	緻密・直径1㎜位の砂粒・赤色粒子を含む	良好	赤～橙色	口縁部内面～外面全体丹塗り	ナデ・暗文	ナデ・絞り痕あり	
Fig.23	29	SD-02	弥生	壷	A 1	10.4 ＋ α 11.0	緻密・直径1㎜位の砂粒を僅かに含む	良好	赤～橙色	口縁部内面～外面全体丹塗り	ナデ・暗文	ナデ・絞り痕あり	
Fig.23	30	SD-02	弥生	壷	A 1	26.2 9.6 6.8	緻密・直径1㎜位の砂粒・赤色粒子を含む	良好	赤～橙色	外面丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・絞り痕あり	
Fig.23	31	SD-02	弥生	壷	A 2	11.8 ＋ α 14.0	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	口縁部外面丹が残る	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.23	32	SD-02	弥生	壷	A 2	10.1 ＋ α 12.8	緻密・直径1㎜位の砂粒を僅かに含む	良好	橙色	口縁部内面～外面全体丹塗り	ナデ	ナデ	
Fig.23	33	SD-02	弥生	壷	A 2	9.7 ＋ α 12.8	緻密。直径1～2㎜の砂粒を少し含む	良好	橙色	口唇部内面～外面全体丹塗り	ナデ	ナデ	
Fig.23	34	SD-02	弥生	壷	A 2	7.0 ＋ α 14.6	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.23	35	SD-02	弥生	壷	A 2	13.5 ＋ α 13.0	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	口縁部外面丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.23	36	SD-02	弥生	壷	A 2	8.4 ＋ α 10.0	緻密・直径1㎜位の砂粒を僅かに含む	良好	淡橙褐色	外面に丹が残る	ハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.23	37	SD-02	弥生	壷	A 2	8.8 ＋ α 16.0	緻密・直径2㎜位の砂粒を含む	良好	淡橙色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ・磨滅	
Fig.23	38	SD-02	弥生	壷	A 2	31.4 15.0 9.4	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	灰白	口縁部内面～外面全体丹が残る	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.23	39	SD-02	弥生	壷	A 2	21.7 ＋ α 22.6	やや緻密。直径1㎜の砂粒を含む	良好	灰～橙色	口唇部内面～外面全体丹塗り	ハケメ	ナデ	
Fig.23	40	SD-02	弥生	壷	A 3	11.8 ＋ α 26.0	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	外面丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.24	41	SD-02	弥生	壷	B 1	8.3 ＋ α 21.0	緻密。直径1㎜位の砂粒を少し含む	良好	灰白	なし	ナデ	ナデ	
Fig.24	42	SD-02	弥生	壷	B 1	13.1 ＋ α 23.4	緻密。直径1～2㎜位の砂粒を少し含む	良好	橙色	外面に丹が残る	ハケメ	ナデ	胴部に縦位の貼り付け文

Tab.7　出土遺物（土器）観察表　3

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.24	43	SD-02	弥生	壷	B 2	30.9 27.4 7.0	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	浅黄橙色	底部外面に丹が残る	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.24	44	SD-02	弥生	壷	B 2	36.2 27.8 8.0	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	口縁部内面から外面全体丹塗り	タテハケメ	ナデ・磨滅	
Fig.24	45	SD-02	弥生	壷	B 2	20.3 ＋ α 25.0	砂粒・金雲母を含む	良好	淡褐色	なし	ハケメ	指オサエ・ハケメ	
Fig.24	46	SD-02	弥生	壷	B 2	18.3 ＋ α 28.4	やや粗い。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.24	47	SD-02	弥生	壷	B 2	17.3 ＋ α 31.0	やや粗い。直径1㎜位の砂粒・赤色粒子を多く含む	良好	橙色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.24	48	SD-02	弥生	壷	B 2	34.3 27.0 8.2	直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙～灰白色	口縁部内面から外面全体丹塗り	ハケメ	ハケメ・ナデ	胴部に外面穿孔あり。黒斑あり
Fig.24	49	SD-02	弥生	壷	B 3	36.6 25.2 9.6	やや粗い。直径1～3㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	タテハケメ	ナデ・磨滅	
Fig.24	50	SD-02	弥生	壷	B 3	34.0 25.7 6.6	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙～浅黄橙色	口縁部内面から外面全体丹が残る	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.24	51	SD-02	弥生	壷	B 4	15.5 ＋ α 19.6	緻密・精良	良好	黄灰色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.24	52	SD-02	弥生	壷	B 4	13.4 ＋ α 22.0	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	口縁部内面から外面全体丹塗り	ナデ・暗文	指オサエ・ナデ	
Fig.24	53	SD-02	弥生	壷	B 4	36.0 21.8 9.0	緻密。直径1～2㎜位の砂粒を少し含む	良好	橙色	口縁部内面から外面全体丹塗り	ナデ・暗文	ナデ	
Fig.25	54	SD-02	弥生	壷	C 1	8.8 ＋ α 18.4	緻密。直径1㎜位の砂粒を少し含む	良好	橙色	口縁部に丹が残る	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.25	55	SD-02	弥生	壷	C 1	12.5 ＋ α 20.0	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	口縁部内面から外面全体丹塗り	ナデ・暗文・口唇部刻目	ナデ	
Fig.25	56	SD-02	弥生	壷	C 1	12.0 ＋ α 23.4	緻密。直径1㎜位の砂粒・赤色粒子を含む	良好	橙～灰白色	口縁部内面から外面全体丹塗り	ナデ・口唇部刻目	ナデ・磨滅	
Fig.25	57	SD-02	弥生	壷	C 1	14.3 ＋ α 22.4	緻密。直径1㎜位の砂粒・赤色粒子を少し含む	良好	橙～黒色	外面上半丹塗り、下半黒塗り	ハケメ・ナデ・暗文	ナデ	
Fig.25	58	SD-02	弥生	壷	C 1	23.3 ＋ α 24. 6	やや粗い。直径1～4㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	胴部に半円の貼り付け突帯
Fig.25	59	SD-02	弥生	壷	C 1	15.7 ＋ α 26.4	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	口縁部内面から外面全体丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	

Tab.8　出土遺物（土器）観察表　4

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.25	60	SD-02	弥生	壷	C 1	22.3 ＋ α 25.6 	直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	淡橙色	外面に丹が残る	磨滅	磨滅	
Fig.25	61	SD-02	弥生	壷	C 1	24.7 ＋ α 24.4 	緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	外面上半丹塗り、下半黒塗り	タテハケメ・暗文・ナデ	ナデ	
Fig.25	62	SD-02	弥生	壷	C 1	9.6 ＋ α 28.0 	緻密。直径1㎜位の砂粒・赤色粒子を含む	良好	橙色	なし	ナデ・口唇部刻目	ナデ・磨滅	
Fig.25	63	SD-02	弥生	壷	C 1	19.2 ＋ α 25.4 	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	赤～橙色	口縁部内面～外面全体丹塗り	ナデ・暗文・口唇部刻目	ナデ	
Fig.25	64	SD-02	弥生	壷	C 1	32.0 ＋ α 24.0 	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	口縁部内面から外面全体丹塗り	ナデ	ナデ	
Fig.25	65	SD-02	弥生	壷	C 1	39.1 22.3 9.6	緻密。直径1～5㎜の砂粒を少し含む	良好	橙色	なし	磨滅	磨滅	
Fig.26	66	SD-02	弥生	壷	C 2	40.0 ＋ α 11.2	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙褐色	外面に丹塗り	ナデ	ナデ・磨滅	
Fig.26	67	SD-02	弥生	壷	C 2	15.1 ＋ α 51.0 	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ・口唇部刻目	ナデ	
Fig.26	68	SD-02	弥生	壷	C 2	13.8 ＋ α 41.0 	やや緻密。直径1㎜位の砂粒・赤色粒子を含む	良好	橙色	なし	ナデ・口唇部刻目	ナデ・磨滅	
Fig.26	69	SD-02	弥生	壷	C 2	16.3 ＋ α 	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	灰白色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.26	70	SD-02	弥生	壷	D	12.0 ＋ α 	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	磨滅	磨滅	
Fig.26	71	SD-02	弥生	壷	E	9.6 ＋ α 14.8 	緻密。直径1㎜位の砂粒を少し含む	良好	橙～灰色	口縁部内面から外面全体丹塗り	ナデ・暗文	ナデ・絞り痕あり	
Fig.26	72	SD-02	弥生	壷	F	8.7 8.7 5.5	砂粒を多く含む	良好	淡褐色	なし	ハケメ・ナデ	ハケメ	
Fig.26	73	SD-02	弥生	壷	G	14.5 ＋ α 16.0 	緻密。直径1～2㎜の砂粒を少し含む	良好	黄褐色	なし	タテハケメ	指オサエ・ナデ	
Fig.26	74	SD-02	弥生	壷	G	15.1 ＋ α 	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	なし	タテハケメ	磨滅	黒斑あり
Fig.26	75	SD-02	弥生	壷		10.8 ＋ α 7.2	やや緻密。直径1～5㎜の砂粒を少し含む	良好	赤～灰褐色	内・外面とも丹塗り	ナデ	ナデ	底部穿孔あり
Fig.26	76	SD-02	弥生	壷底部		16.8 ＋ α 7.2	緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	赤～灰褐色	外面に丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	

Tab.9　出土遺物（土器）観察表　5

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.27	77	SD-02	弥生	甕	A1	20.5 19.6 7.7	緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙褐色	なし	タテハケメ	ナデ	
Fig.27	78	SD-02	弥生	甕	A1	17.3 ＋ α 23.4 	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.27	79	SD-02	弥生	甕	D	16.5 17.8 7.8	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.27	80	SD-02	弥生	甕	B 1	13.7 ＋ α 25.0 	やや緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙褐色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.27	81	SD-02	弥生	甕	A 2	23.6 18.0 17.8	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙褐色	なし	指オサエ・ナデ	ハケメ・ナデ	窓付き
Fig.27	82	SD-02	弥生	甕	C 1	23.2 ＋ α 24.4 	緻密。直径1㎜の砂粒を含む	良好	赤～橙色	外面に丹塗り	ナデ・暗文	指オサエ・ナデ	
Fig.27	83	SD-02	弥生	甕	B 2	27.3 33.1 6.3	砂粒・金雲母を含む	良好	赤～橙色	外面に丹塗り	ナデ	ナデ	黒斑あり
Fig.27	84	SD-02	弥生	甕	C 2	27.0 24.6 8.7	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を少し含む	良好	灰褐～橙	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.27	85	SD-02	弥生	甕	C 2	24.9 23.6 7.4	砂粒・金雲母を含む	良好	淡黄褐色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ・磨滅	黒斑あり
Fig.27	86	SD-02	弥生	甕	C 2	31.0 25.4 8.0	砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	タテハケメ	磨滅	黒斑あり
Fig.27	87	SD-02	弥生	甕	C 2	30.6 26.2 7.8	緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	タテハケメ	ナデ	
Fig.28	88	SD-02	弥生	甕	C 2	24.7 21.6 7.8	緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	黄橙色	なし	ナデ	ハケメ・磨滅	
Fig.28	89	SD-02	弥生	甕	C 2	18.2 17.8 8.1	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	灰白色	なし	指オサエ・ナデ	ナデ・工具痕あり	
Fig.28	90	SD-02	弥生	甕	C 2	16.0 16.0 7.5	やや緻密。直径1～4㎜の砂粒を少し含む	良好	灰褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.28	91	SD-02	弥生	甕	C 2	12.8 ＋ α 23.0 	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	なし	磨滅	磨滅	
Fig.28	92	SD-02	弥生	甕	C4	20.7 ＋ α 22.4 	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	赤褐色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.28	93	SD-02	弥生	甕	C 2	34.8 28.0 8.0	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	赤褐色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	一部にススト付着

Tab.10　出土遺物（土器）観察表　6

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.28	94	SD-02	弥生	甕	C3	30.4 23.8 8.4	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含む	良好	淡茶褐色	なし	タテハケメ	指オサエ・タテハケメ	
Fig.28	95	SD-02	弥生	甕	C3	15.5 ＋ α 26.6 	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.28	96	SD-02	弥生	甕	C3	9.5 ＋ α 30.0 	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig.28	97	SD-02	弥生	甕	C3	42.0 29.6 9.6	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.29	98	SD-02	弥生	甕	C3	17.4 ＋ α 21.6 	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.29	99	SD-02	弥生	甕	C3	27.0 ＋ α 22.4 	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.29	100	SD-02	弥生	甕	C3	25.0 ＋ α 25.0 	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙褐色	なし	ハケメ	ナデ	
Fig.29	101	SD-02	弥生	甕	C4	30.3 25.0 8.0	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙～黒褐色	なし	タテハケメ	ナデ	一部にススト付着
Fig.29	102	SD-02	弥生	甕	C4	22.8 ＋ α 28.8 	やや粗い。直径1～4㎜の砂粒を多く含む	良好	黄褐色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	一部にススト付着
Fig.29	103	SD-02	弥生	甕	C4	37.7 22.0 9.6	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	淡橙褐色	なし	タテハケメ	磨滅	
Fig.29	104	SD-02	弥生	甕	C4	25.0 22.2 8.2	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	淡茶褐色	なし	タテハケメ	磨滅	
Fig.29	105	SD-02	弥生	甕	C4	17.2 ＋ α 30.2 	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡橙褐色	なし	タテハケメ・磨滅	ナデ	
Fig.29	106	SD-02	弥生	甕	C4	26.6 19.0 9.6	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	茶褐色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.29	107	SD-02	弥生	甕	C4	10.2 ＋ α 25.4 	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	淡茶褐色	なし	ヨコハケメ	磨滅	黒斑あり
Fig.29	108	SD-02	弥生	甕	C4	8.3 ＋ α 24.8 	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.29	109	SD-02	弥生	甕	C4	26.6 ＋ α 7.4	やや緻密。直径1㎜位の砂粒を多く含む	良好	淡橙色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ・磨滅	
Fig.29	110	SD-02	弥生	甕	C4	27.4 ＋ α 7.2	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡橙褐色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	

Tab.11　出土遺物（土器）観察表　7

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.30	111	SD-02	弥生	甕	D	13.6 15.4 9.0	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	なし	タテハケメ・ナデ	指オサエ・ナデ	黒斑あり
Fig.30	112	SD-02	弥生	甕	D	17.6 15.4 6.0	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙褐色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.30	113	SD-02	弥生	甕	D	17.6 15.4 7.5	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	灰白色	なし	タテハケメ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.30	114	SD-02	弥生	甕	D	21.6 18.2 9.2	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	なし	タテハケメ	磨滅	
Fig.30	115	SD-02	弥生	甕	D	19.2 18.0 7.8	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡橙褐色	外面丹塗り	タテハケメ	ナデ	
Fig.30	116	SD-02	弥生	甕	D	14.9 ＋ α 8.8	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	黒斑あり
Fig.30	117	SD-02	弥生	甕	D	22.7 26.0 7.8	やや粗い。直径1～8㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	タテハケメ	ナデ	
Fig.30	118	SD-02	弥生	甕？底部		11.8 ＋ α 8.5	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	磨滅	ナデ	黒斑あり
Fig.30	119	SD-02	弥生	甕？底部		16.2 ＋ α 8.0	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	外面に丹が残る	タテハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.30	120	SD-02	弥生	壷？底部		23.0 ＋ α 8.4	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	外面に丹が残る？	ナデ・磨滅	ナデ	
Fig.31	121	SD-02	弥生	甕底部		13.8 ＋ α 8.4	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	灰～黄褐色	なし	タテハケメ	ナデ	
Fig.31	122	SD-02	弥生	甕底部		18.1 ＋ α 9.4	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	なし	指オサエ・タテハケメ	指オサエ・ナデ	
Fig.31	123	SD-02	弥生	甕底部		16.7 ＋ α 10.0	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	タテハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.31	124	SD-02	弥生	甕底部		19.4 ＋ α 10.0	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	タテハケメ	ナデ	底部に外面から穿孔
Fig.31	125	SD-02	弥生	甕底部		18.0 ＋ α 10.0	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	橙～灰褐色	なし	タテハケメ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.31	126	SD-02	弥生	甕底部		8.2 ＋ α 7.2	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	黄橙～灰色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.31	127	SD-02	弥生	甕底部		8.0 ＋ α 7.3	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	タテハケメ	ナデ・磨滅	

Tab.12　出土遺物（土器）観察表　8

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.32	128	SD-02	弥生	高坏	A	18.5 27.6 16.8	粗い。直径1～6㎜の砂粒を多く含む	良好	橙～黄褐色	坏部内面～外面全体丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.32	129	SD-02	弥生	高坏	A	23.0 ＋ α 	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	坏部内面～外面全体丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・工具痕あり	
Fig.32	130	SD-02	弥生	高坏	B	22.4 28.5 16.6	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙褐色	坏部内面～外面全体丹塗り	ナデ・磨滅	絞り痕・ナデ	
Fig.32	131	SD-02	弥生	高坏	A	10.5 ＋ α 26.5 	粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	橙色	外面に丹が残る	タテハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.32	132	SD-02	弥生	高坏	B	8.8 ＋ α 27.2 	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	赤～灰褐色	坏部内面～外面全体丹塗り	タテハケメ・ナデ	ナデ・磨滅	
Fig.32	133	SD-02	弥生	高坏	B	8.9 ＋ α 29.4 	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	赤～淡橙褐色	坏部内面に丹が残る	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.32	134	SD-02	弥生	高坏		13.5 ＋ α 	粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	磨滅	絞り痕・磨滅	
Fig.32	135	SD-02	弥生	高坏	B	18.2 ＋ α 17.0	やや粗い。直径1～4㎜の砂粒を含む	良好	橙～灰色	内面坏部～外面全体丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.32	136	SD-02	弥生	高坏		10.4 ＋ α 13.5	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	磨滅	絞り痕・磨滅	
Fig.32	137	SD-02	弥生	高坏		14.0 ＋ α 14.5	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	なし	ハケメ・ナデ	絞り痕・ハケメ・ナデ	
Fig.32	138	SD-02	弥生	高坏		13.5 ＋ α 16.4	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	外面丹塗り	ナデ・磨滅	ナデ・工具痕あり	
Fig.33	139	SD-02	弥生	鉢	A1	5.6 9.1 4.3	やや粗い。直径1～4㎜の砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	磨滅	指オサエ・磨滅	
Fig.33	140	SD-02	弥生	鉢	A1	6.0 11.2 4.0	緻密。直径1㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	淡黄橙色	外面に丹が残る？	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.33	141	SD-02	弥生	鉢	A1	6.3 12.1 5.0	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む	良好	橙～灰白色	なし	指オサエ・磨滅	磨滅	
Fig.33	142	SD-02	弥生	鉢	A1	8.1 11.1 5.7	緻密。直径1㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	淡黄白色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.33	143	SD-02	弥生	鉢	A2	8.8 18.4 5.0	緻密・精良。	良好	橙色	内・外面丹塗り	ナデ	ナデ	
Fig.33	144	SD-02	弥生	鉢	A2	9.1 18.6 6.6	緻密・精良。雲母片を含む	良好	橙色	内・外面丹塗り	ナデ	ナデ	

Tab.13　出土遺物（土器）観察表　9

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.33	145	SD-02	弥生	鉢	A2	9.6 18.3 7.0	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙褐色	内面に丹が残る	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.33	146	SD-02	弥生	鉢	A2	10.5 17.3 7.0	やや粗い。直径1～4㎜の砂粒を含む	良好	赤褐色	なし	磨滅	指オサエ・磨滅	
Fig.33	147	SD-02	弥生	鉢	A2	9.5 17.6 5.2	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	黒～淡橙色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.33	148	SD-02	弥生	鉢	A2	9.5＋α 21.6 	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ナデ	ハケメ	
Fig.33	149	SD-02	弥生	鉢	D	3.2 6.0 3.8	緻密・精良。雲母片を含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	黒色付着物
Fig.33	150	SD-02	弥生	鉢	D	4.8 7.0 3.0	緻密・精良。雲母片を含む	良好	淡赤橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	黒斑あり
Fig.33	151	SD-02	弥生	鉢	D	5.2 9.8 5.0	緻密・精良。赤色粒子・雲母片を含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	黒斑あり
Fig.33	152	SD-02	弥生	鉢	B	8.0 13.4 4.8	やや粗い。直径3㎜の砂粒を含む。	良好	橙～灰白	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.33	153	SD-02	弥生	鉢	B	10.0 14.4 5.0	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を少し含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.33	154	SD-02	弥生	鉢	D	6.2 9.5 3.3	やや粗い。直径3㎜の砂粒を含む。	良好	淡褐色	なし	磨滅	ハケメ・ナデ	
Fig.33	155	SD-02	弥生	鉢	B	7.0 11.6 3.4	緻密。直径1㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.33	156	SD-02	弥生	鉢	B	9.8 14.4 6.6	緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	黄橙色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.33	157	SD-02	弥生	鉢	B	8.0 14.8 5.8	緻密。直径1㎜位の砂粒・赤色粒子を含む	良好	橙色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.33	158	SD-02	弥生	鉢	D	5.1 7.8 3.4	緻密。直径1㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	淡赤橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.33	159	SD-02	弥生	鉢	D	6.3 9.9 4.2	粗い。直径1～3㎜の砂粒・雲母片を多く含む	良好	淡赤橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	黒斑あり
Fig.33	160	SD-02	弥生	鉢	B	10.4 15.8 6.5	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む。	良好	黒～橙褐色	なし	ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.33	161	SD-02	弥生	鉢	B	11.2 12.4 7.0	粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む	良好	淡橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	

Tab.14　出土遺物（土器）観察表　10

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.33	162	SD-02	弥生	鉢	D	5.6 6.6 3.6	粗い。直径1～3㎜の砂粒・雲母片を多く含む	良好	淡赤橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	黒斑あり
Fig.33	163	SD-02	弥生	鉢	D	6.0 6.6 5．0	緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡赤橙色	なし	ハケメ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.33	164	SD-02	弥生	鉢	D	7.5 9.2 4.6	緻密。直径1㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	淡赤褐色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	黒斑あり
Fig.33	165	SD-02	弥生	鉢	D	7.9 10.2 5.7	緻密。直径1～2㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	明赤橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.33	166	SD-02	弥生	鉢	B	9.5 12.5 6.0	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む。	良好	淡橙色	なし	ハケメ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.33	167	SD-02	弥生	鉢	B	10.9 16.1 5.8	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む。	良好	灰白色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.34	168	SD-02	弥生	鉢	D	8.3 7.5 4.6	粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含む	良好	灰褐色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.34	169	SD-02	弥生	鉢	D	7.2 8.6 5.0	やや粗い。直径1㎜位の砂粒を多く含む。	良好	淡黄褐色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.34	170	SD-02	弥生	鉢	D	7.5＋α 5.4	緻密。直径1～2㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	明赤橙色	なし	指オサエ・ナデ・工具痕あり	指オサエ・ナデ	
Fig.34	171	SD-02	弥生	鉢	C1	10.4 11.8 6.6	やや緻密。直径1～2㎜位の砂粒を多く含む。赤色粒子・雲母片を含む	良好	淡赤橙色	外面に丹が残る	ナデ	指オサエ・ナデ	内面に黒色付着物あり
Fig.34	172	SD-02	弥生	鉢	C1	11.0＋α 13.2 	やや緻密。直径1～3㎜位の砂粒を含む	良好	橙～灰色	外面に丹塗り	ハケメ・ナデ	ナデ	
Fig.34	173	SD-02	弥生	鉢	D	10.4 9.3 10.4	やや緻密。直径1㎜位の砂粒を多く含む	良好	橙褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.34	174	SD-02	弥生	鉢	D	8.4 7.8 5.0	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む。赤色粒子・雲母片を含む	良好	明赤橙色	なし	ナデ・磨滅	指オサエ・ナデ・工具痕あり	
Fig.34	175	SD-02	弥生	鉢	D	7.6＋α 5.4	緻密。直径1～2㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	明赤橙色	なし	ナデ	指オサエ・ナデ	外面にスス状炭化物付着
Fig.34	176	SD-02	弥生	鉢	D	9.1 8.2 8.4	緻密。直径1～2㎜位の砂粒を含む	良好	橙～灰色	なし	ナデ	ナデ	黒斑あり
Fig.34	177	SD-02	弥生	鉢	D	7.2＋α 15.4 	砂粒・金雲母を含む	良好	淡灰褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.34	178	SD-02	弥生	鉢	B	15.8 24.6 7.4	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む。	良好	橙色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	

Tab.15　出土遺物（土器）観察表　11

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.34	179	SD-02	弥生	鉢	C1	12.7 22.7 8.4	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む。	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	黒斑あり
Fig.34	180	SD-02	弥生	鉢	C1	16.1 24.0 7.4	やや緻密。直径1㎜位の砂粒を多く含む	良好	淡茶褐色	なし	タテハケメ・磨滅	指オサエ・磨滅	黒斑あり
Fig.34	181	SD-02	弥生	鉢	C1	14.0＋α 10.8 	緻密。直径1～5㎜の砂粒を少し含む	良好	黄褐色～橙色	内面丹塗り 外面黒塗り	タテハケメ	ナデ	
Fig.34	182	SD-02	弥生	鉢	C1	17.5 21.8 9.6	やや緻密。直径1～2㎜位の砂粒を含む	良好	黄褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.34	183	SD-02	弥生	鉢	C1	16.7 25.6 7.4	5㎜前後の砂粒を含む	良好	灰白色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.34	184	SD-02	弥生	鉢	C1	15.5 28.6 9.9	やや緻密。直径1～3㎜位の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.35	185	SD-02	弥生	鉢	C1	16.0 20.3 8.3	やや緻密。直径1～3㎜位の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	なし	磨滅	磨滅	黒斑あり
Fig.35	186	SD-02	弥生	鉢（甑）	C2	16.0 22.6 8.2	やや緻密。直径1～3㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	橙～灰白色	内面丹塗り 外面黒塗り	ハケメ・ナデ	ナデ・工具痕あり	底部に焼成前穿孔
Fig.35	187	SD-02	弥生	鉢（甑）	C2	12.8 26.0 7.8	やや緻密。直径1～5㎜位の砂粒を少し含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ・工具痕あり	底部に焼成前穿孔
Fig.35	188	SD-02	弥生	鉢（甑）	C2	14.8 26.0 9.7	やや緻密。直径1～3㎜位の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	底部に焼成前穿孔
Fig.35	189	SD-02	弥生	鉢（甑）	C2	15.3 22.6 7.6	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ	底部に焼成前穿孔
Fig.35	190	SD-02	弥生	鉢（甑）	C2	17.0 21.0 7.8	やや緻密。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	ヨコハケメ・ナデ	底部に焼成前穿孔
Fig.35	191	SD-02	弥生	鉢（甑）	C2	9.8＋α 6.6	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	赤～橙色	内面丹塗り 外面黒色物付着	ハケメ・ナデ	ナデ	底部に焼成前穿孔
Fig.35	192	SD-02	弥生	蓋	A	9.7 29.0 6.7（つまみ）	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ナデ	ナデ・工具痕あり	口縁部内面にススト付着
Fig.35	193	SD-02	弥生	蓋	A	8.5 32.2 7.2（つまみ）	粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.36	194	SD-02	弥生	器台	A	12.3 7.2 9.2	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	灰色	なし	指オサエ・ナデ	ナデ・磨滅	
Fig.36	195	SD-02	弥生	支脚？	A	15.3 6.3 8.2	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒・雲母片を多く含む	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	絞り痕・ナデ	

Tab.16　出土遺物（土器）観察表　12

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.36	196	SD-02	弥生	器台	A	15.0 7.4 7.5	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	197	SD-02	弥生	器台	A	15.0 9.2 11.6	粗い。5㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.36	198	SD-02	弥生	支脚？	A	14.9 9.1 9.6	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙～灰白色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.36	199	SD-02	弥生	器台	A	13.8 9.2 9.6	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	ハケメ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.36	200	SD-02	弥生	器台	A	14.4 9.0 11.0	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	ナデ	
Fig.36	201	SD-02	弥生	器台	A	17.0 9.3 11.0	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	なし	ハケメ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	202	SD-02	弥生	器台	A	17.0 11.2 13.2	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.36	203	SD-02	弥生	器台	A	16.7 10.5 13.2	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	淡橙褐色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.36	204	SD-02	弥生	器台	A	17.0 10.2 12.4	粗い。5㎜位の砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	ハケメ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	205	SD-02	弥生	器台	B	16.1 9.4 12.0	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む。	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	206	SD-02	弥生	器台	B	15.7 10.4 12.8	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む。	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	207	SD-02	弥生	器台	B	17.4 13.8 14.8	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	なし	ハケメ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	208	SD-02	弥生	器台	A	14.6 ＋ α 12.2	緻密。直径1～3㎜の砂粒を少し含む	良好	淡橙色	なし	ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	209	SD-02	弥生	器台	A	11.8 ＋ α 10.6	やや緻密。直径1～2㎜位の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.36	210	SD-02	弥生	器台	A	14.5 ＋ α 10.0	粗い。5㎜位の砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	211	SD-02	弥生	器台	A	14.6 ＋ α 12.2	緻密。直径1～3㎜の砂粒を少し含む	良好	淡橙褐色	なし	ナデ	ナデ	
Fig.36	212	SD-02	弥生	器台	A	12.3 ＋ α 10.2	粗い。5㎜位の砂粒を含む	良好	淡褐色	なし	ハケメ・ナデ	絞り痕・ナデ	

Tab.17　出土遺物（土器）観察表　13

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.36	213	SD-02	弥生	器台	A	10.5 ＋ α 12.8	やや緻密。直径1㎜位の砂粒を多く含む	良好	淡橙褐色	なし	指オサエ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.36	214	SD-02	弥生	支脚？	A	9.2 ＋ α 11.2	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒・雲母片を多く含む	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.36	215	SD-02	弥生	器台	A	10.0 ＋ α 7.6	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒・雲母片を多く含む	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.36	216	SD-02	弥生	器台	A	10.4 ＋ α 10.0	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む。赤色粒子を僅かに含む	良好	淡赤橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.36	217	SD-02	弥生	器台	A	12.7 ＋ α 11.2	やや粗い。直径1～2㎜の砂粒・雲母片を多く含む	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.37	218	SD-02	弥生	器台	C	8.8 7.4 8.2	粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.37	219	SD-02	弥生	器台	C	9.0 7.2 7.8	粗い。直径1～3㎜の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	ナデ	
Fig.37	220	SD-02	弥生	器台	C	10.9 9.8 10.3	やや緻密。石英を含む	良好	淡褐色	なし	指オサエ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.37	221	SD-02	弥生	器台	C	10.4 9.3 10.4	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	
Fig.37	222	SD-02	弥生	器台	C	8.7 8.3 9.0	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む。赤色粒子・雲母片を少し含む	良好	淡赤橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.37	223	SD-02	弥生	器台	C	10.6 11.4 12.4	緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	被熱
Fig.37	224	SD-02	弥生	器台	C	10.8 10.6 13.6	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.37	225	SD-02	弥生	器台	C	11.9 12.5 11.4	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む。	良好	淡橙～灰白色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.37	226	SD-02	弥生	器台	C	10.8 ＋ α 13.0 12.6	やや緻密。直径1～2㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	被熱
Fig.37	227	SD-02	弥生	器台（支脚）	D	8.2 9.5 8.0	やや緻密。直径1㎜位の砂粒を多く含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	被熱
Fig.37	228	SD-02	弥生	器台	C	5.2 ＋ α 8.2	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.37	229	SD-02	弥生	器台	B	14.1 ＋ α 12.8	やや緻密。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ハケメ・ナデ	ナデ	

Tab.18　出土遺物（土器）観察表　14

Fig.	No.	遺構	時代	器種	分類	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎土	焼成	色調	塗彩	調整（外面）	調整（内面）	備考
Fig.37	230	SD-02	弥生	器台	E	8.2 ＋ α 8.2 	やや緻密。直径1㎜位の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	なし	ナデ・磨滅	指オサエ・ナデ	
Fig.37	231	SD-02	弥生	器台		9.5 ＋ α 10.9 	緻密。直径1～2㎜の砂粒・雲母片を含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	ナデ	
Fig.37	232	SD-02	弥生	器台	A	12.0 ＋ α 8.4 	緻密。直径1～2㎜の砂粒・雲母片を含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	絞り痕・ナデ	
Fig.37	233	SD-02	弥生	器台	C	8.0 ＋ α 10.0	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	ナデ・磨滅	被熱
Fig.37	234	SD-02	弥生	器台	B	9.5 ＋ α 10.7	粗い。直径1～5㎜の砂粒を多く含む。	良好	淡橙～灰白色	なし	磨滅	絞り痕・ナデ	
Fig.37	235	SD-02	弥生	器台	F	12.5 ＋ α 10.6	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.37	236	SD-02	弥生	器台	F	15.4 10.4	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	被熱
Fig.43	294	SP-39	弥生	器台	C	12.0 10.2 10.6	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒・雲母片を含む	良好	淡黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
Fig.43	295	SP-91	弥生	器台	B	10.0 ＋ α 14.1	緻密。直径1㎜位の砂粒・赤色粒子・雲母片含む。	良好	淡赤褐色	なし	磨滅	指オサエ・ナデ	被熱
Fig.43	296	SP-224	弥生	台付鉢？脚部		11.6 ＋ α 20.8	やや粗い。直径1～5㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ナデ	ナデ	

Tab.19　出土遺物（土製品）観察表　15

Fig.	No.	遺構	時代	器種	長さ・器高さ (cm)	幅・口径 (cm)	直径・底径 (cm)	胎土	焼成	色調	塗彩	調整	備考
Fig.38	237	SD-02	弥生	匙状土製品	8.8 ＋ α	6.0 ＋ α		やや緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙褐色	なし	ナデ	
Fig.38	238	SD-02	弥生	把手状土製品	6.8 ＋ α		3.3 ～ 4.0	緻密。直径1㎜位の砂粒を少し含む	良好	淡橙～灰白色	なし	ナデ	
Fig.38	239	SD-02	弥生	把手状土製品	4.8 ＋ α		3.3 ～ 3.6	緻密。直径1～2㎜の砂粒を少し含む	良好	淡橙～灰白色	なし	ナデ	
Fig.38	240	SD-02	弥生	把手状土製品	8.1 ＋ α		3.0 ～ 3.5	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	黒灰～橙色	なし	ナデ	
Fig.38	241	SD-02	弥生	把手状土製品	13.7 ＋ α	4.0	2.5 ～ 3.8	緻密。直径1㎜位の砂粒・雲母片を含む	良好	淡黄灰～明赤橙色	なし	ナデ	
Fig.38	242	SD-02	弥生	不明土製品	5.3 ＋ α		2.8 ～ 3.2	緻密。直径1㎜位の砂粒を少し含む	良好	橙色	なし	ナデ	工具を差し込んで途中まで穿孔
Fig.38	243	SD-02	弥生	円盤状土製品	12.0		1.0 ～ 1.8	やや粗い。直径1～3㎜の砂粒を含む	良好	橙色	なし	ナデ	
Fig.38	244	SD-02	弥生	有孔円盤	6.27 ～ 6.71		1.1	やや緻密。直径1～2㎜の砂粒・雲母片を含む	良好	淡黄褐色	なし	指オサエ・ナデ	
Fig.38	245	SD-02	弥生	球状土製品	2.8 ～ 2.9		2.6	緻密。直径1㎜位の砂粒・雲母片を僅かに含む	良好	淡黄灰～淡明橙色	なし	ナデ	
Fig.38	246	SD-02	弥生	ミニチュア土器	2.7	3.7		やや緻密。直径1～2㎜の砂粒・赤色粒子・雲母片を僅かに含む	良好	明赤橙色		指オサエ・ナデ	黒斑あり
Fig.38	247	SD-02	弥生	ミニチュア土器	3.3 ＋ α			緻密。直径1㎜位の砂粒を少し含む	良好	橙～灰色	なし	指オサエ・ナデ	
Fig.38	248	SD-02	弥生	ミニチュア土器	3.0 ＋ α		3.4	緻密。直径1㎜位の砂粒を少し含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	
Fig.38	249	SD-02	弥生	ミニチュア土器	3.8 ＋ α		3.5	緻密。直径1～2㎜の砂粒を少し含む	良好	黄橙色	なし	指オサエ・ナデ	
Fig.38	250	SD-02	弥生	ミニチュア土器	3.8 ＋ α		3.7	緻密。直径1㎜位の砂粒を含む	良好	橙色	なし	指オサエ・ナデ	

Tab.20　出土遺物（石器類）観察表　16

Fig.	No.	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
Fig.13	8	SB-07	石錘	滑石	2.54	2.82	1.13 ～ 1.19	11.1	
Fig.20	22	SD-01	石庖丁	安山岩	5.92	4.45	0.13 ～ 0.6		
Fig.20	23	SD-01	石錘	滑石	3.5	3.3	1.0	13.5	
Fig.20	24	SD-01	石錘	滑石	4.09	3.94	0.81 ～ 1.1	29.5	
Fig.20	25	SD-01	石錘未製品	滑石	4.68	2.41	1.94	30.1	
Fig.20	26	SD-01	棒状石製品？	玄武岩	8.05	1.6	0.86	14.5	
Fig.20	27	SD-01	玉	ガラス	0.6 ～ 0.61		0.35 ～ 0.36	0.5	
Fig.39	251	SD-02	玉	ガラス	0.43 ～ 0.45		0.28 ～ 0.3	0.3	
Fig.39	252	SD-02	石槍	古銅輝石安山岩	2.6	1.1	0.6		
Fig.39	253	SD-02	紡錘車	滑石	3.94 ～ 3.98		0.52 ～ 0.55	17.1	
Fig.39	254	SD-02	紡錘車	滑石	4.43 ～ 4.5		0.5 ～ 0.54	20.7	
Fig.39	255	SD-02	紡錘車	滑石	5.07 ～ 5.12		0.41 ～ 0.72	31.1	
Fig.39	256	SD-02	紡錘車	滑石	4.27 ～ 4.32		0.53 ～ 0.56	18.0	
Fig.39	257	SD-02	紡錘車	滑石	4.54 ～ 4.6		0.59 ～ 0.7	24.2	
Fig.39	258	SD-02	紡錘車	滑石	4.58 ～ 4.65		0.54 ～ 0.57	25.2	
Fig.39	259	SD-02	円盤状盤未製品	三郡変成岩	3.56	3.42	0.36 ～ 0.56	12.0	
Fig.39	260	SD-02	円盤状石製品	頁岩	6.34	6.29	1.0 ～ 1.62	106.9	磨石か？
Fig.39	261	SD-02	石庖丁	安山岩	7.1	5.0	1.16	29.4	穿孔は両方
Fig.39	262	SD-02	石庖丁	頁岩質	4.82	3.64	0.08 ～ 0.22	6.5	
Fig.39	263	SD-02	不明石製品	滑石	6.2	5.0	0.4 ～ 1.1	50.0	
Fig.39	264	SD-02	石錘	滑石	3.74	0.63 ～ 1.23	0.75 ～ 1.18	7.4	
Fig.39	265	SD-02	石錘	滑石	4.72	0.58 ～ 1.35	0.58 ～ 1.24	10.7	
Fig.39	266	SD-02	石錘	滑石	5.4	0.71 ～ 1.82	0.76 ～ 1.84	25.2	
Fig.39	267	SD-02	石錘	滑石	6.65	0.6 ～ 2.15	0.62 ～ 1.93	38.9	
Fig.39	268	SD-02	石錘	滑石	6.0	0.97 ～ 3.33	0.83 ～ 2.95	75.5	
Fig.39	269	SD-02	石錘	滑石	6.35	1.6 ～ 3.09	1.2 ～ 2.65	73.4	
Fig.40	270	SD-02	石錘	滑石	6.22	～ 3.82	0.98 ～ 3.8	114.1	
Fig.40	271	SD-02	石錘	滑石	5.69	1.85 ～ 3.47	1.37 ～ 3.06	89.1	
Fig.40	272	SD-02	石錘	滑石	8.9	0.93 ～ 4.02	1.05 ～ 4.02	207	
Fig.40	273	SD-02	石錘未製品	滑石	8.2	2.02 ～ 3.53	1.57 ～ 2.73	125.1	
Fig.40	274	SD-02	石錘未製品	滑石	8.8		2.0 ～ 3.35	64.7	
Fig.40	275	SD-02	石錘未製品	砂岩	7.5		1.61 ～ 1.68	30.2	
Fig.40	276	SD-02	石錘	片岩質	16.0 ～ 16.6		5.1 ～ 5.5	2400	
Fig.40	277	SD-02	浮子	軽石	6.58	5.24	3.05	28.9	
Fig.40	278	SD-02	敲石？	玄武岩	14.4	7.6	3.5 ＋ α	822	
Fig.41	279	SD-02	扁平片刃石斧		4.23	1.94	0.57 ～ 0.69	9.9	再加工品？
Fig.41	280	SD-02	太形蛤刃石斧	玄武岩	14.4	7.2	4.4	820	
Fig.41	281	SD-02	太形蛤刃石斧	玄武岩	13.07	6.72 ～ 7.58	4.45 ～ 4.79	832	
Fig.41	282	SD-02	太形蛤刃石斧	玄武岩	7.2	7.6	3.5	355	
Fig.41	283	SD-02	太形蛤刃石斧	玄武岩	12.9	7.4	4.4	665	

Tab.21　出土遺物（石器類）観察表　17

Fig.	No.	遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
Fig.41	284	SD-02	太形蛤刃石斧	玄武岩	13.6	7.9	5.3		
Fig.41	285	SD-02	太形蛤刃石斧未製品？	玄武岩	11.17	7.65	2.98	360	
Fig.41	286	SD-02	砥石	砂岩質	7.6	2.6 ～ 3.61	2.41 ～ 3.02	133.9	
Fig.41	287	SD-02	砥石	砂岩	10.1	8.5	2.0 ～ 4.4	386	
Fig.41	288	SD-02	砥石	玄武岩	7.3	3.8	2.8	133.1	
Fig.43	297	P-247	紡錘車	滑石	4.62		0.58 ～ 0.65	19.9	
Fig.43	298	P-74	乳棒状石製品	玄武岩	12.8	3.4	2.9	216	
Fig.44	299	包含層	紡錘車	滑石	3.93 ～ 3.98		1.12 ～ 1.3	35.0	
Fig.44	300	包含層	紡錘車	滑石	4.35 ～ 4.41		0.65 ～ 0.7	27.6	
Fig.44	301	包含層	石庖丁	輝緑凝灰岩	4.9	4.7	0.11 ～ 0.55	18.8	
Fig.44	302	包含層	石錘未製品	変成岩	8.7	5.7	4.5	457	
Fig.44	303	包含層	土錘	土製	4.72	4.17	1.04	22.5	

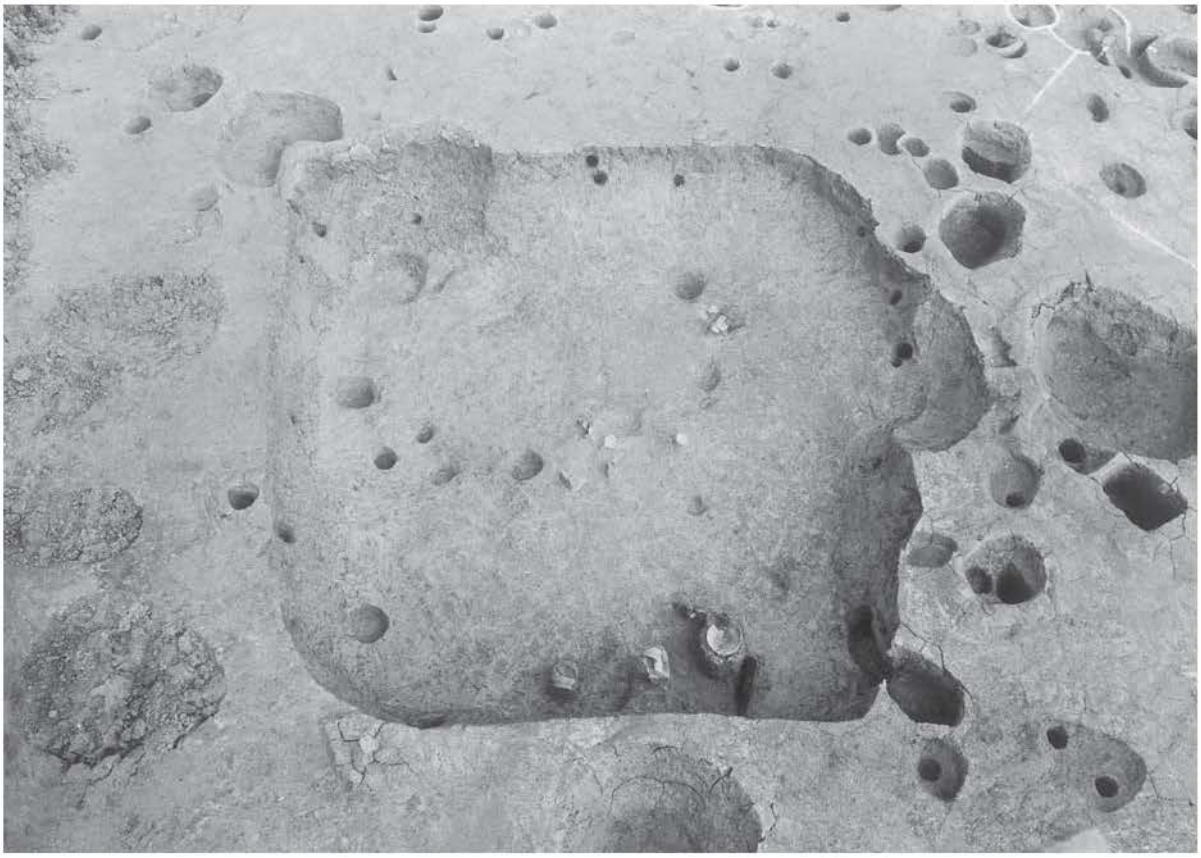
Tab.22　出土遺物（木器）観察表　18

Fig.	No.	遺構	器種	樹種	木取り	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
Fig. 7	1	SC-01	竪杵	クヌギ	芯持ち材	42.1 ＋ α		6.8 ～ 7.45	搗端部の一部は炭化
Fig.42	289	SD-02	柄杓		芯持ち刳りぬき	32.6	8.3 ＋ α	2.5	やや傾く
Fig.42	290	SD-02	柄杓	ケヤキ？	柾目	23.9 ＋ α		4.3	身部は焼失？
Fig.42	291	SD-02	平鍬	カシ	柾目	28.9 ＋ α	15.3 ＋ α	1.5	変形している
Fig.42	292	SD-02	槌		芯持ち材	33.4 ＋ α		6.0 ～ 6.6	搗部に加工痕が残る
Fig.42	293	SD-02	抉入り板材	シイ？	柾目	35.7	7.6	1.6	芯が残る

P L A T E

1）調査区遠景（南西から）

2）調査区北側全景（西から）

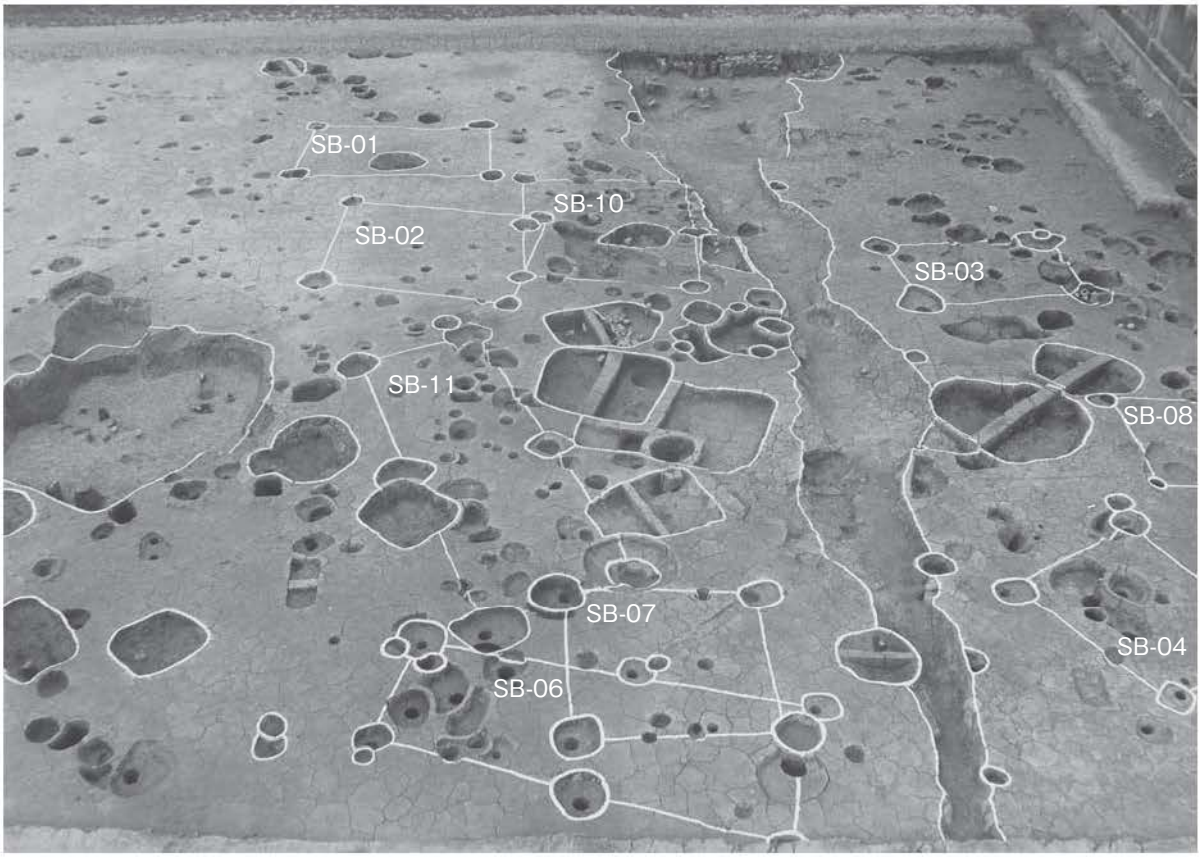


1）１号住居（南から）

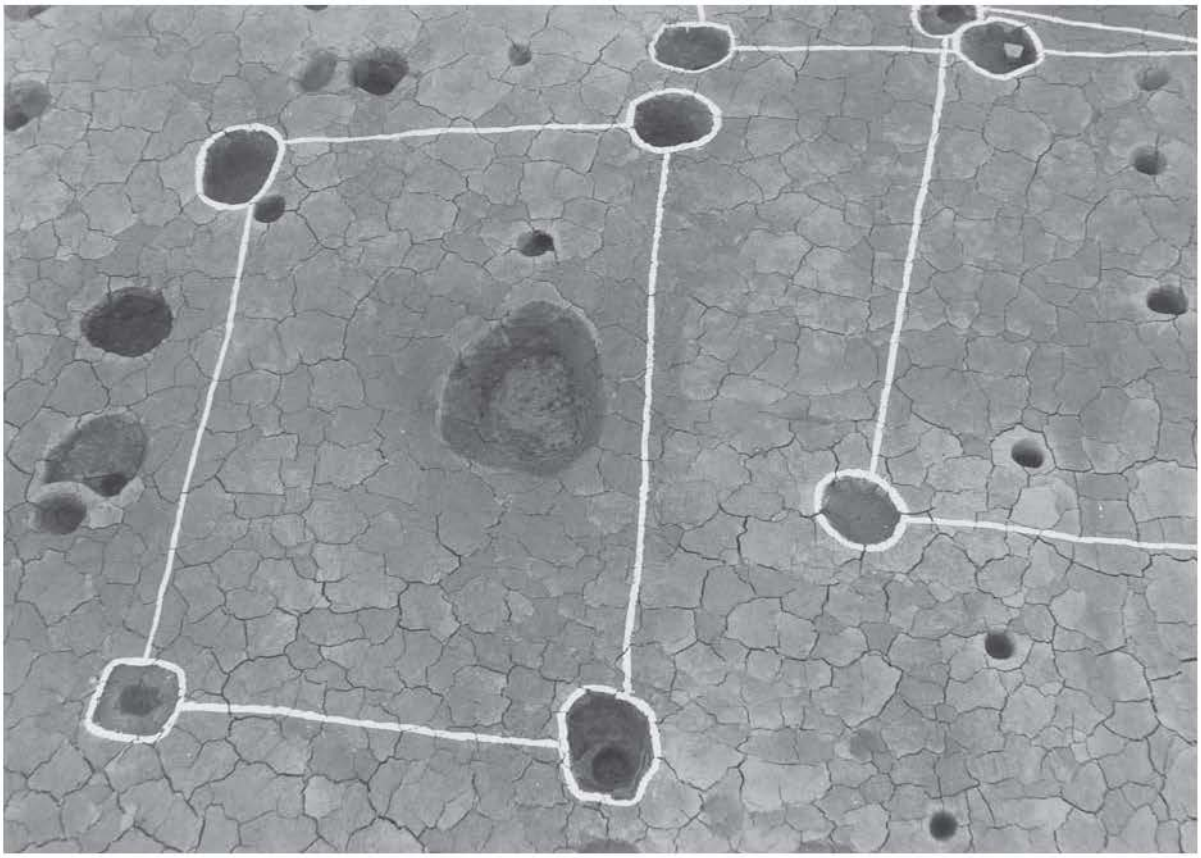
2）１号住居南壁際遺物出土状況（東から）

1）１号住居南壁際木器出土状況（東から）

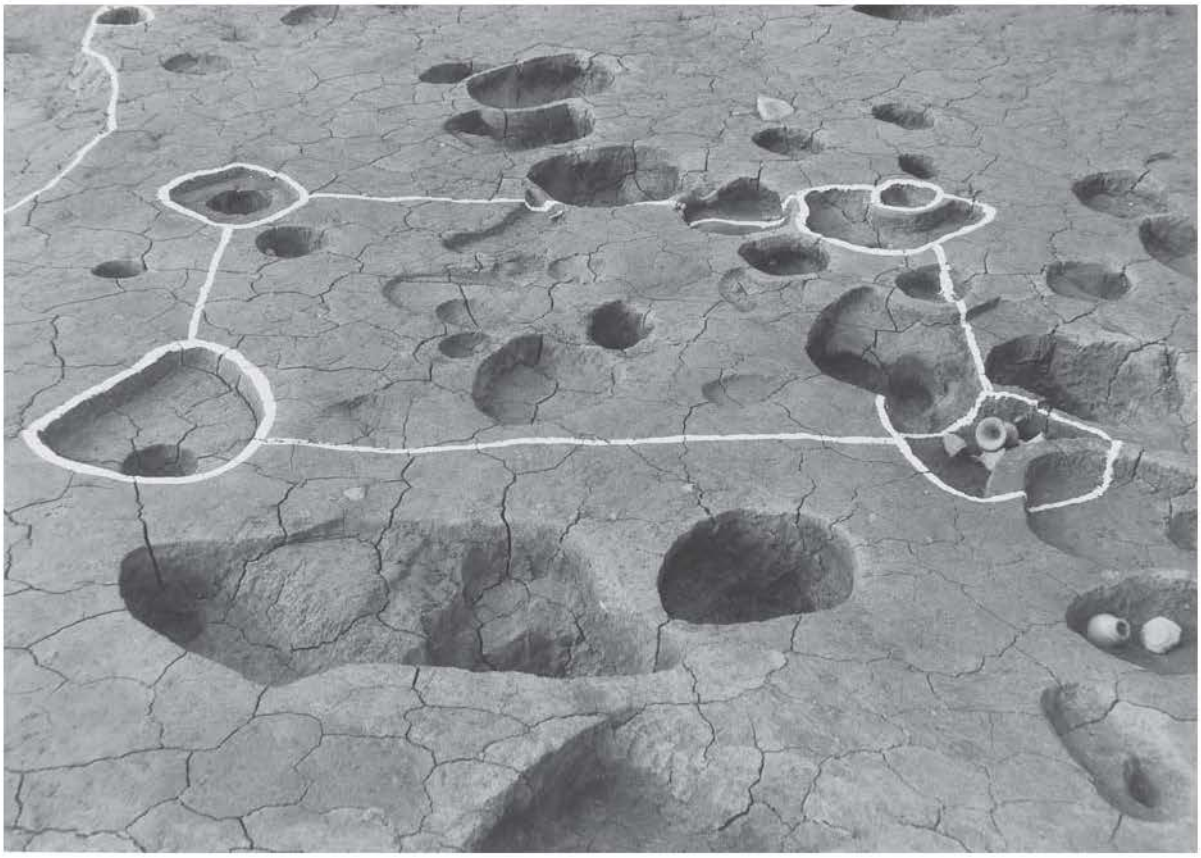
2）２号住居（北から）



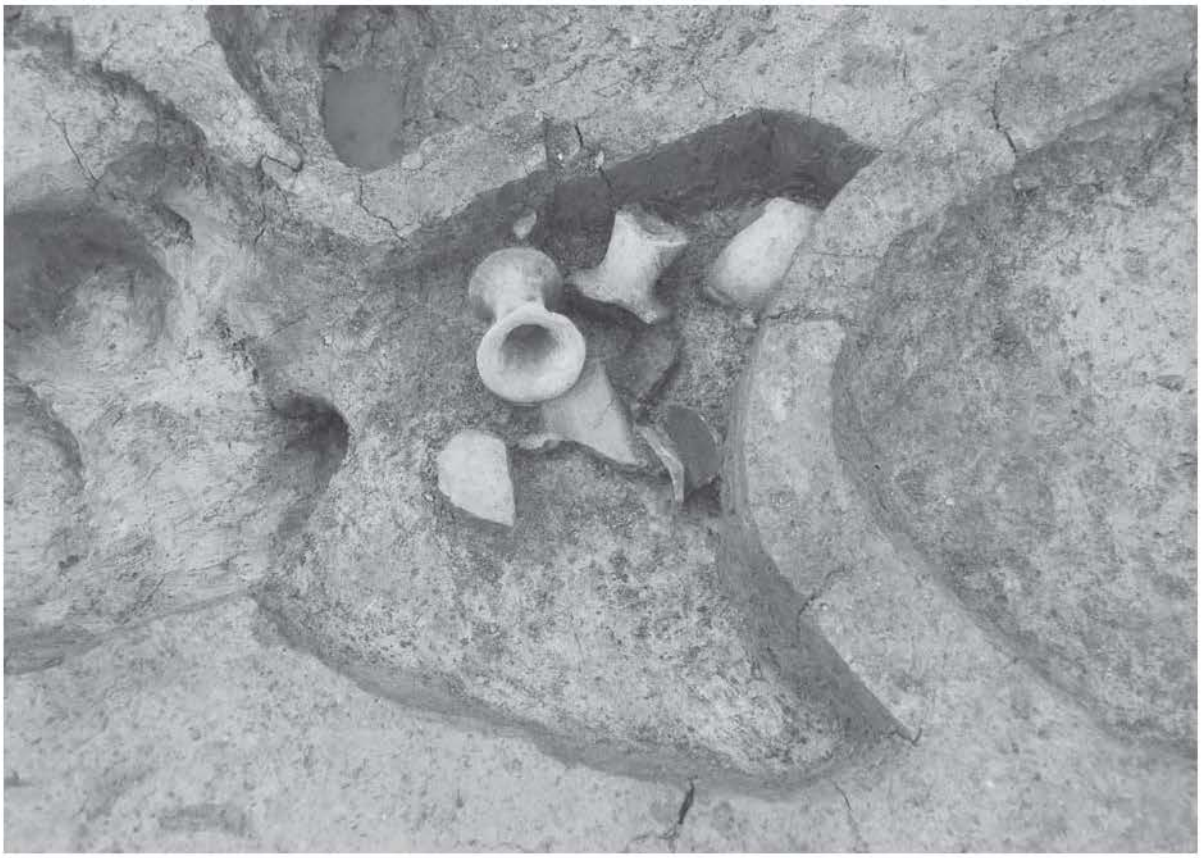
1）調査区北東部掘立柱建物群（南から）



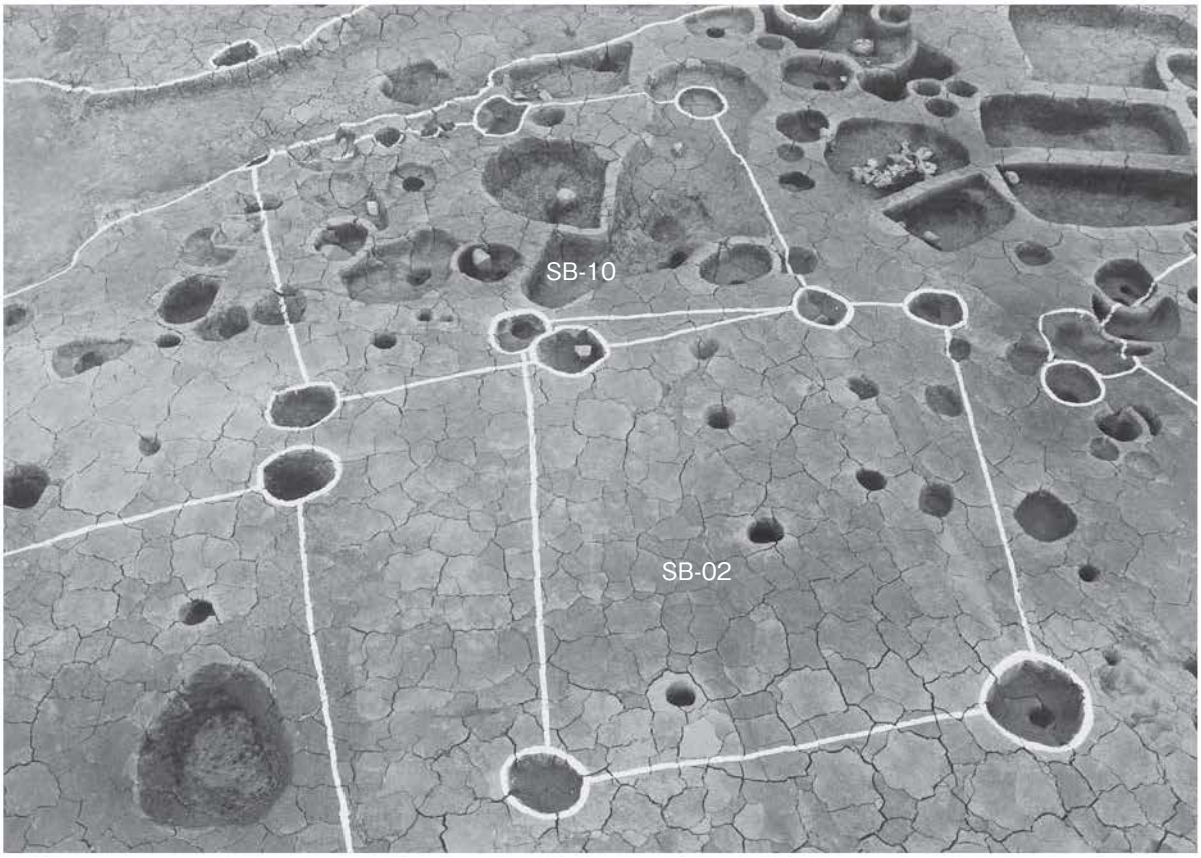
2）１号掘立柱建物（西から）



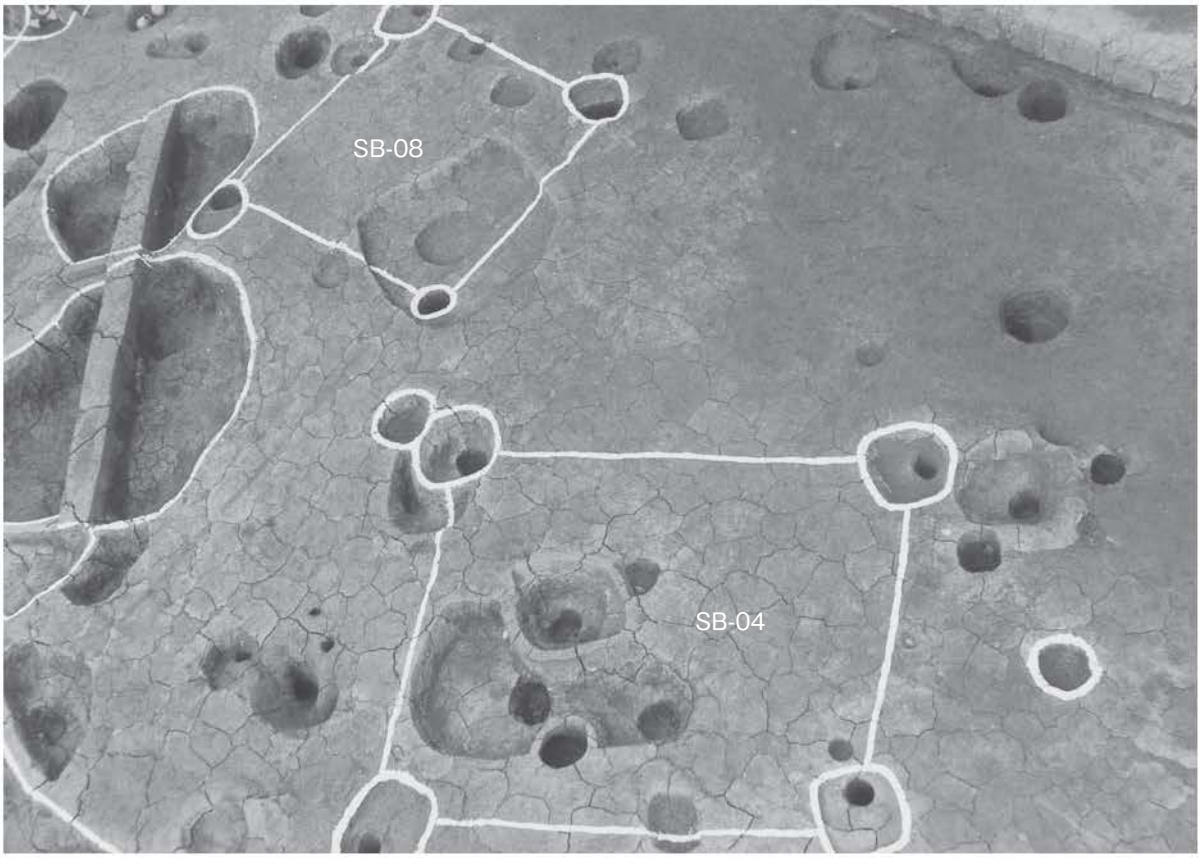
1）３号掘立柱建物（南から）



2）３号掘立柱建物Ｐ－３遺物出土状況（南から）

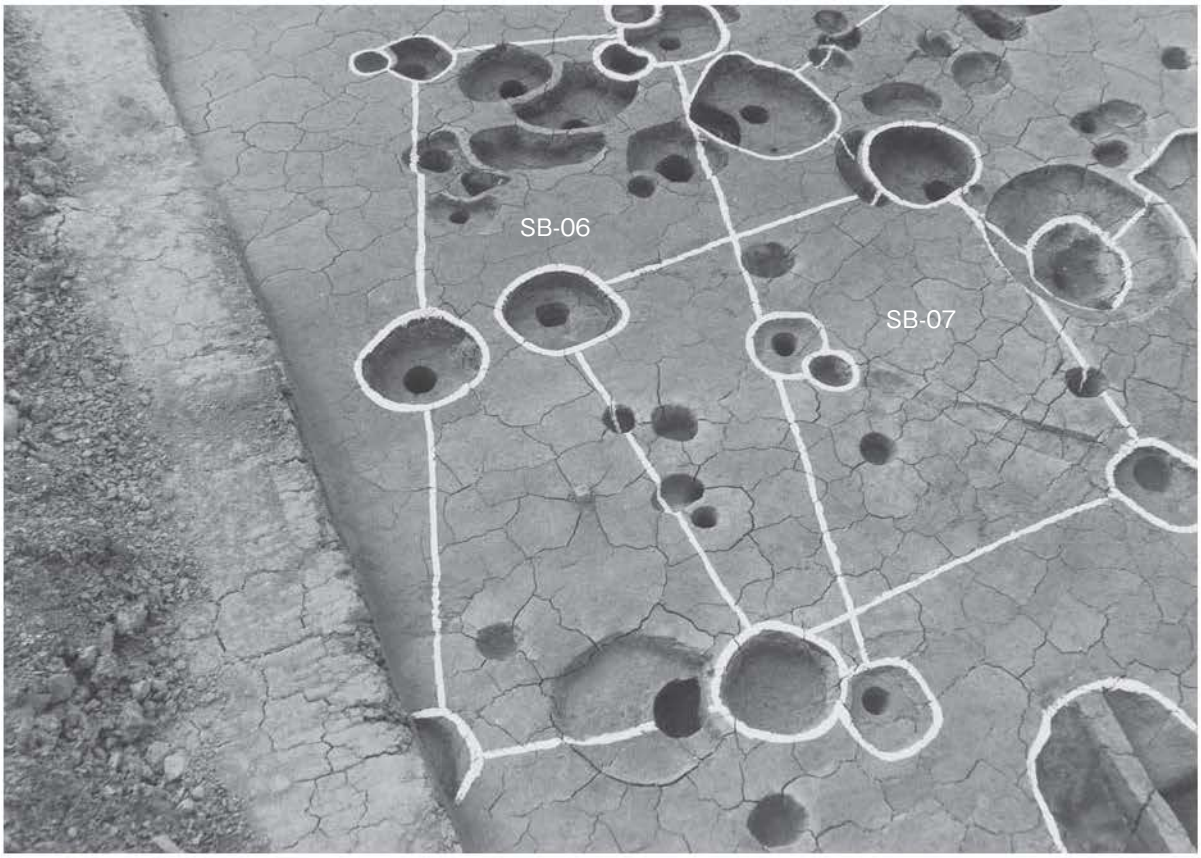


1）2・10 号掘立柱建物（西から）

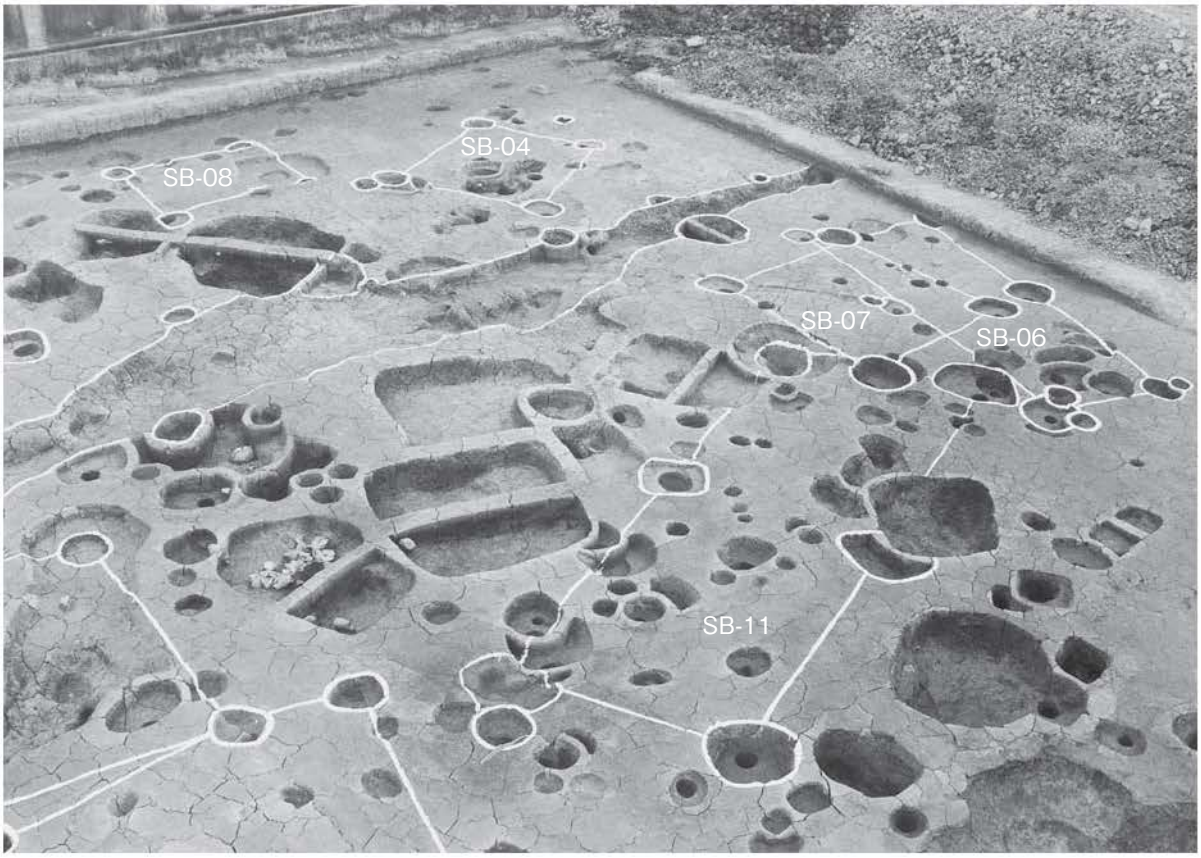


2）4・8 号掘立柱建物（西から）

1）5 号掘立柱建物（西から）

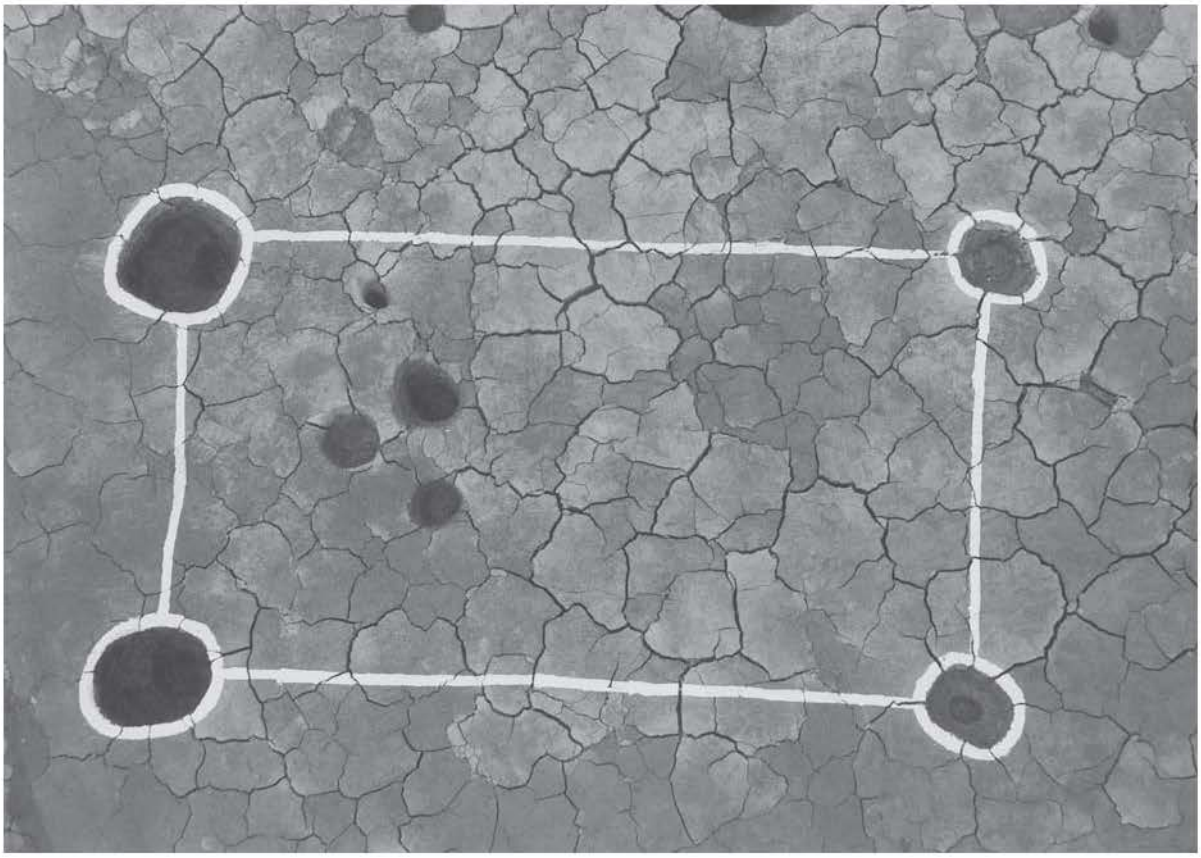


2）6・7 号掘立柱建物（東から）

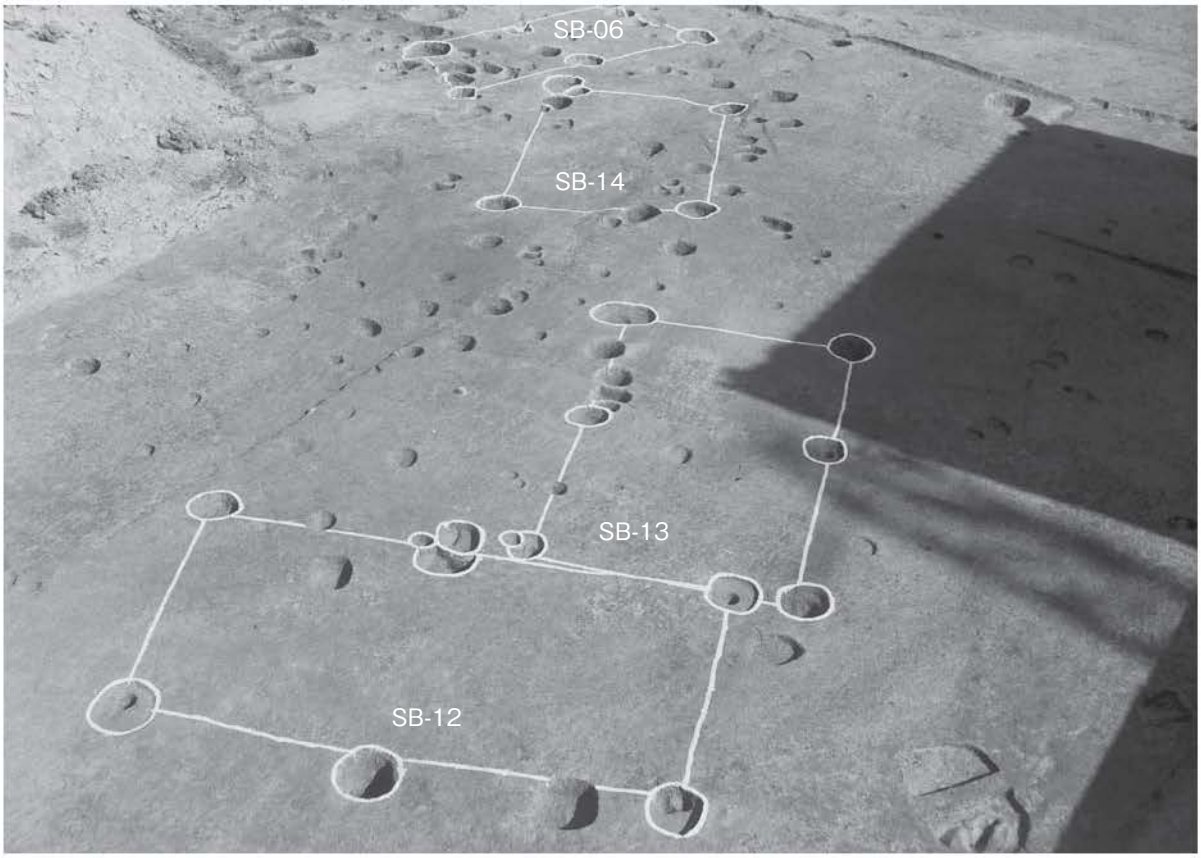


1）4・6～8・11 号掘立柱建物（北西から）

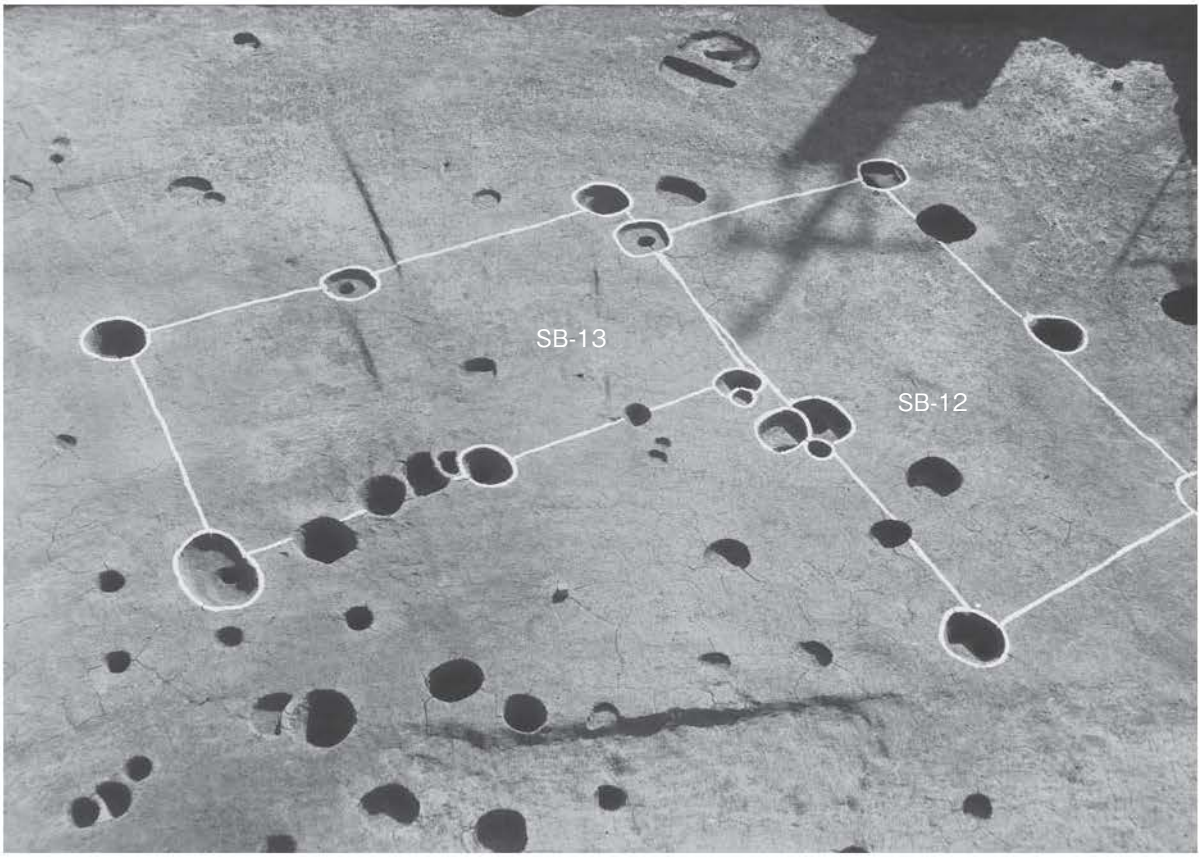
2）11 号掘立柱建物Ｐ－５遺物出土状況（東から）



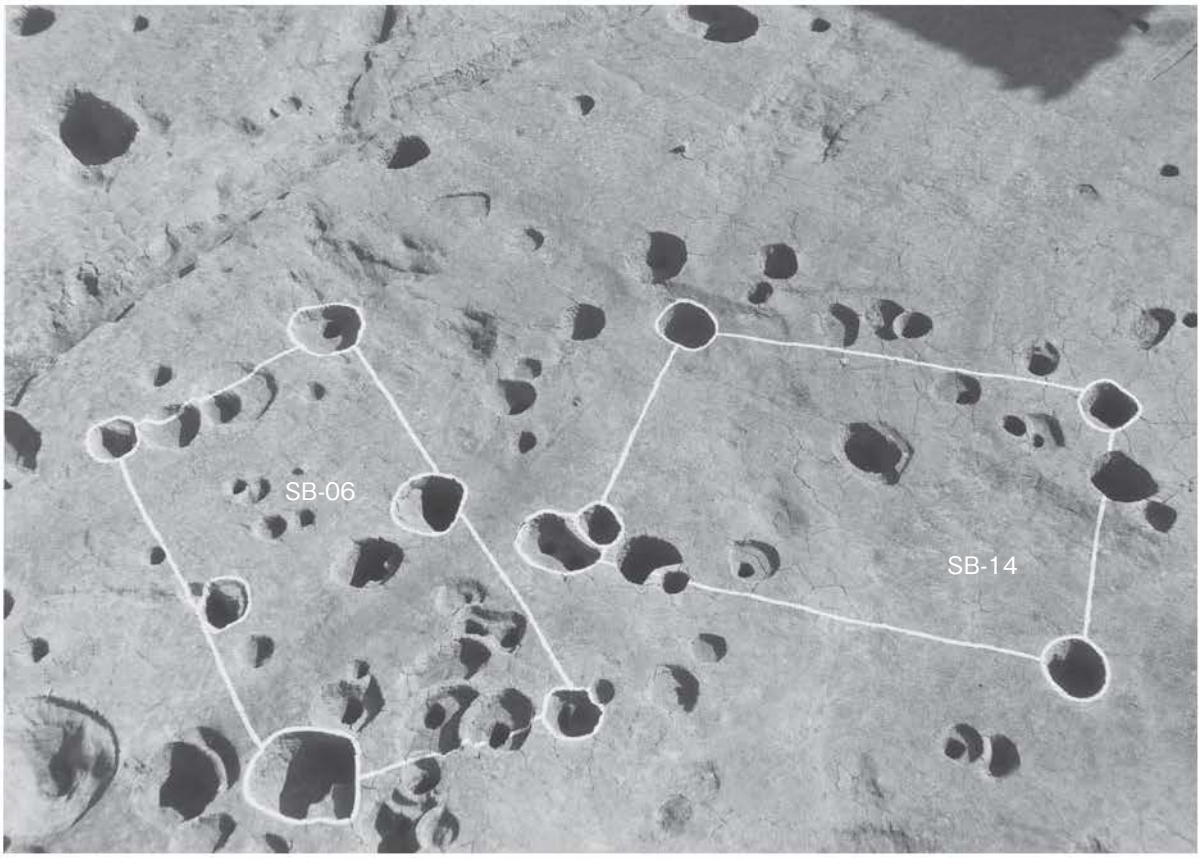
1）9 号掘立柱建物（南から）



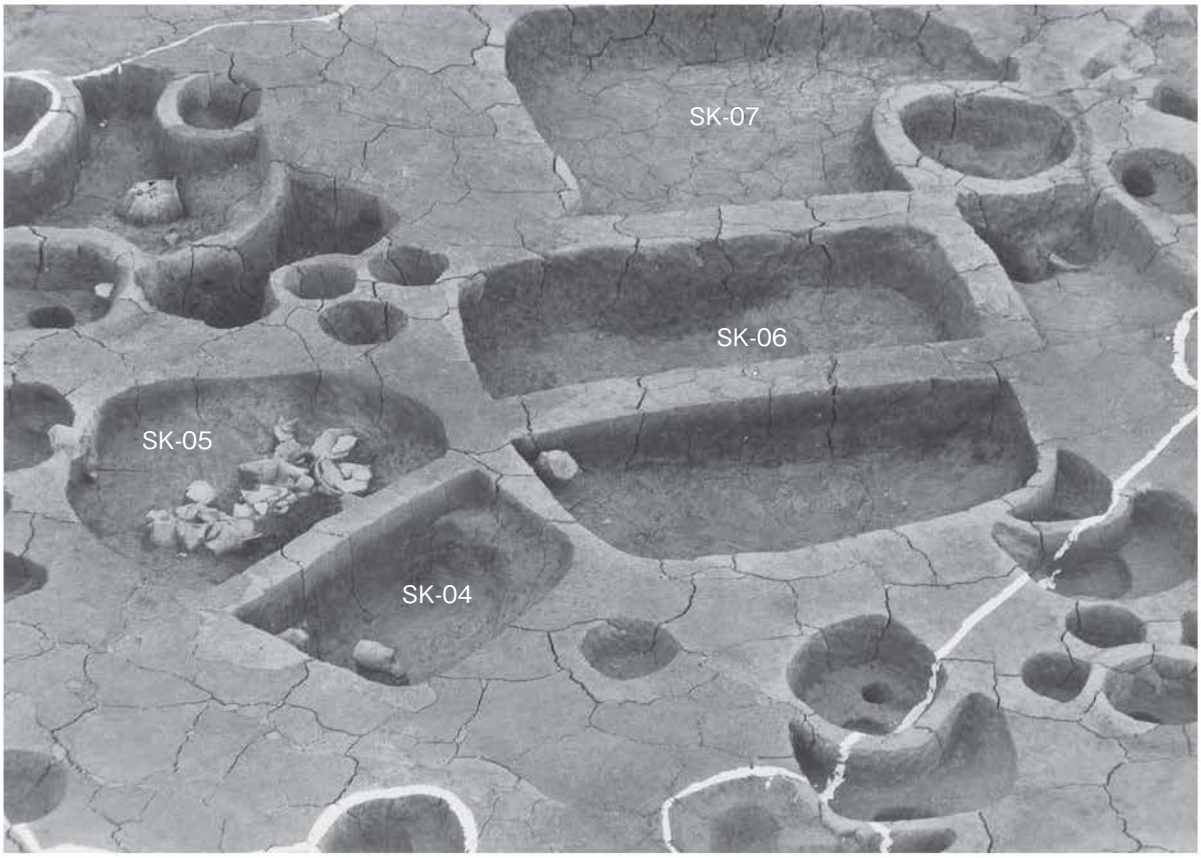
2）6・12 ～ 14 号掘立柱建物（西から）



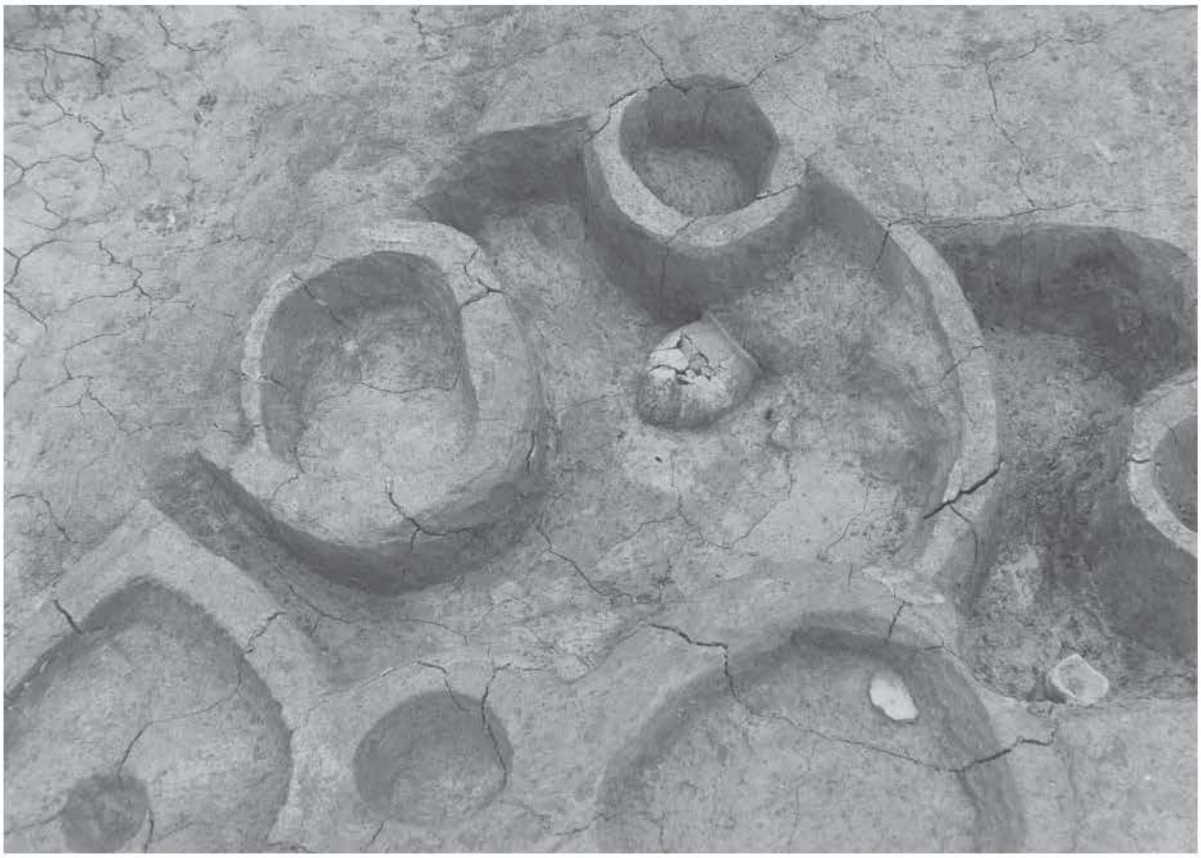
1）12・13 号掘立柱建物（北から）



2）6・14 号掘立柱建物（北から）

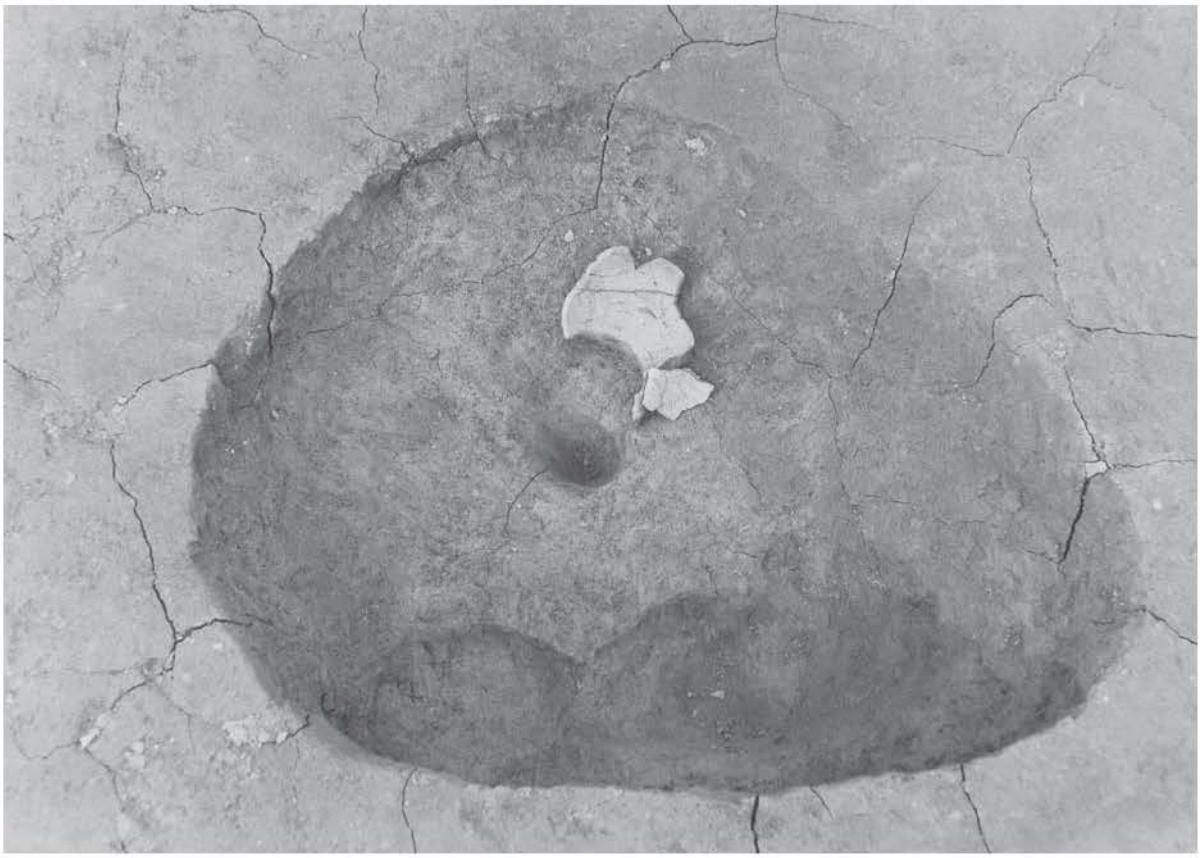


1）4 ～ 7 号土壙（北から）

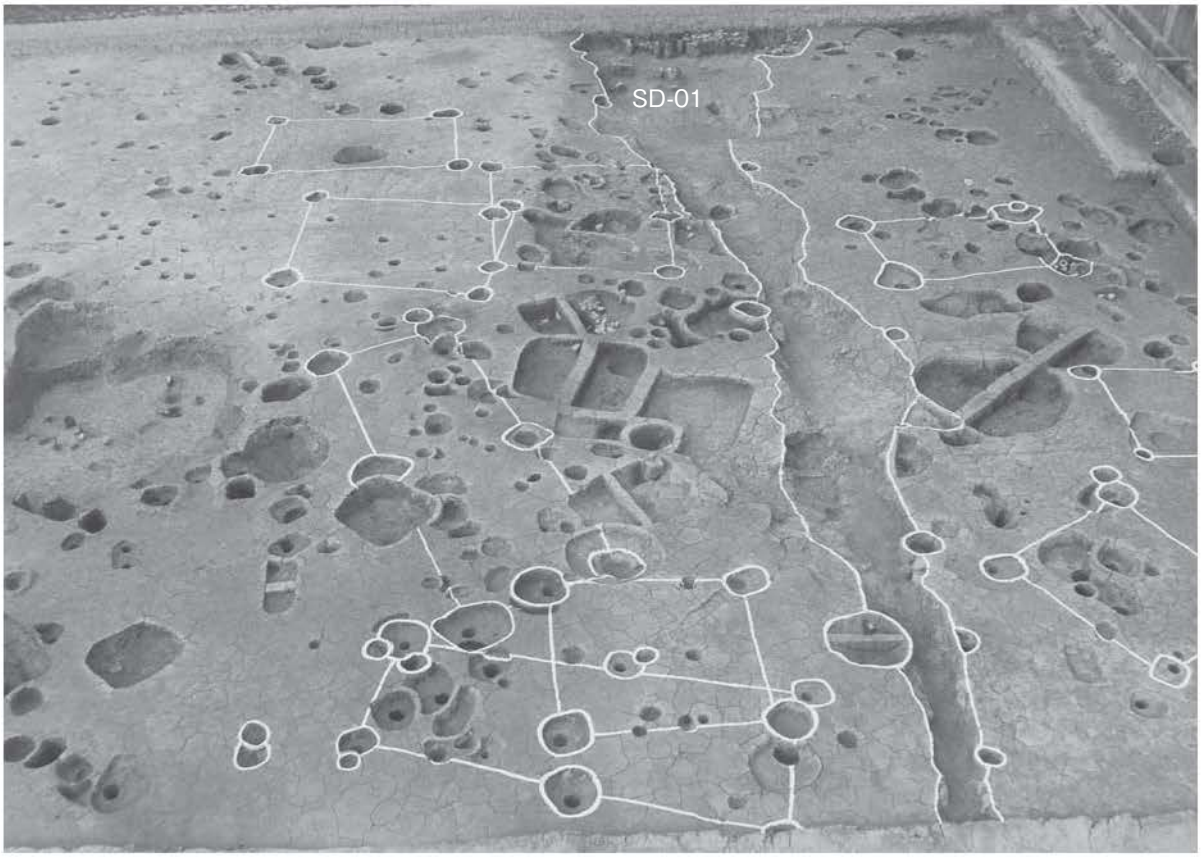


2）9 号土壙（北から）

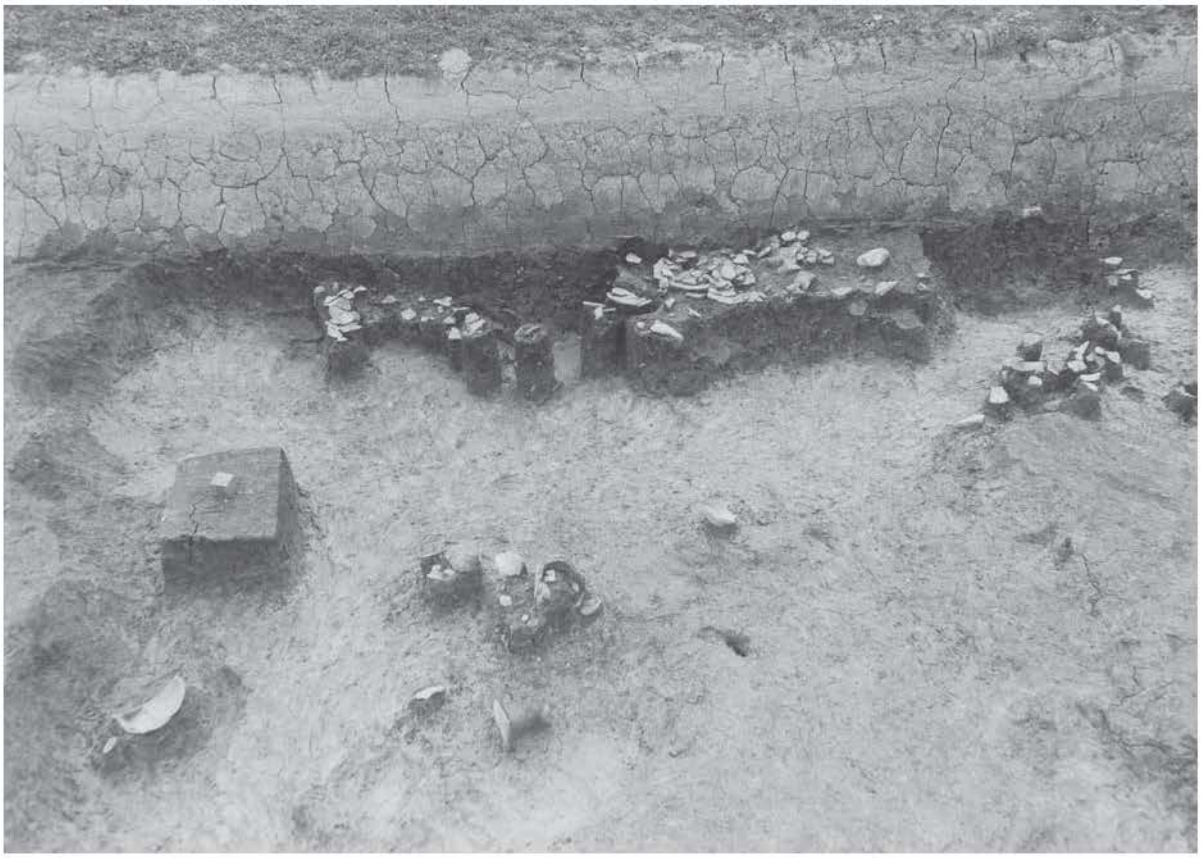
1）17 号土壙（東から）



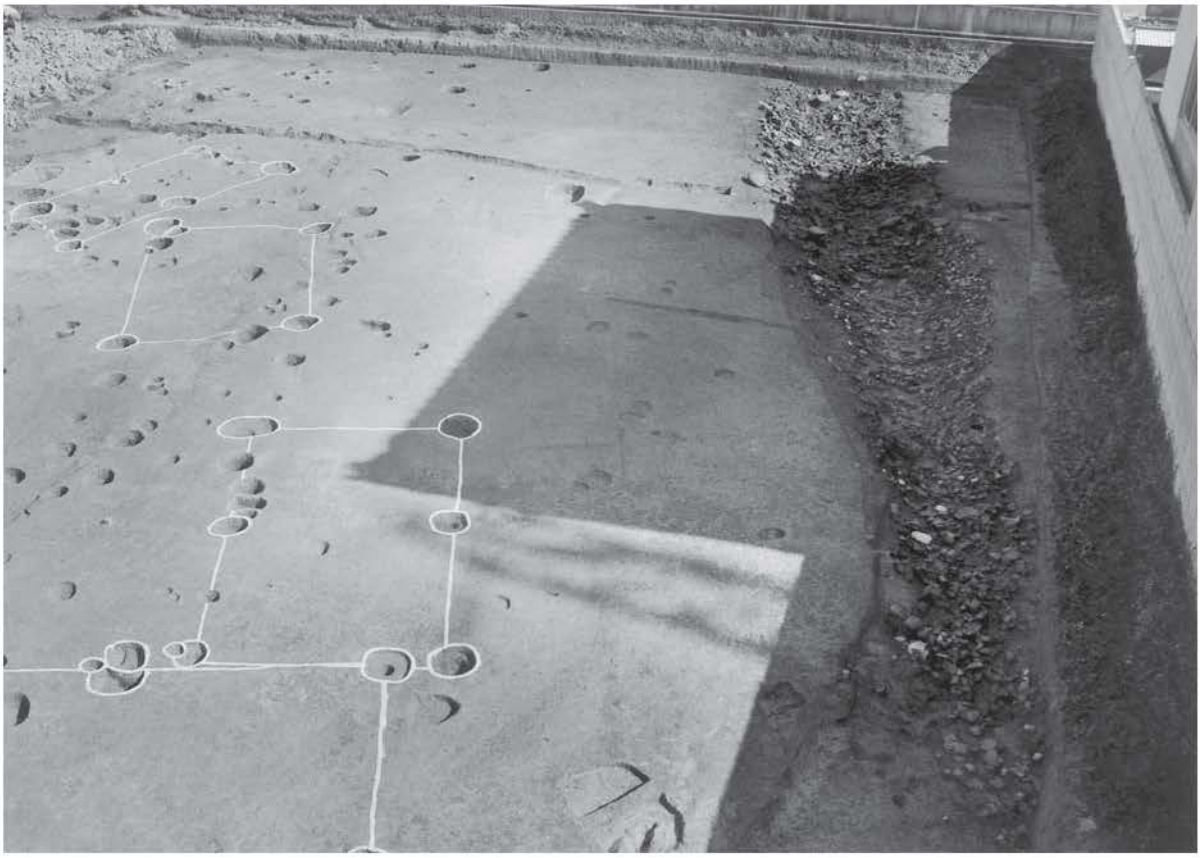
2）19 号土壙（南から）



1）1 号溝（南から）



2）1 号溝北端部遺物出土状況（南から）



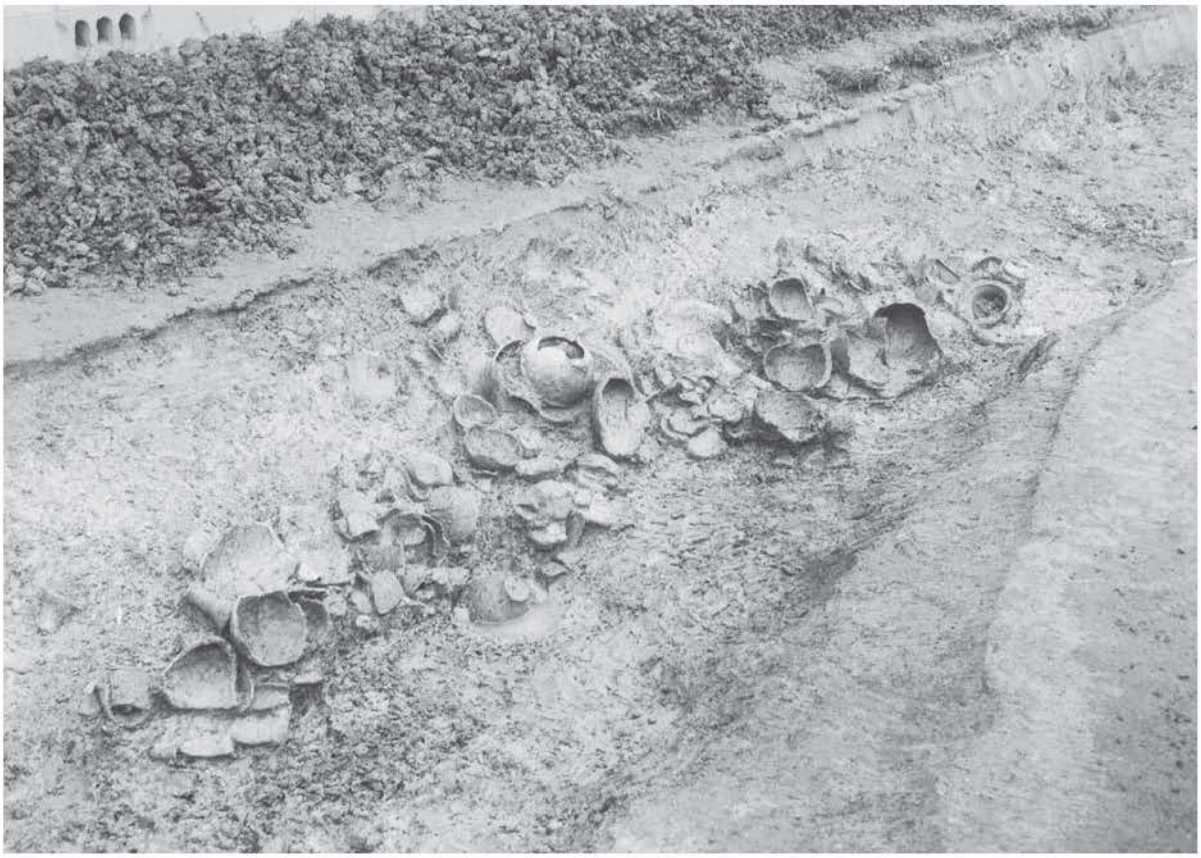
1）2 号溝（西から）

2）2 号溝東壁土層断面（西から）

1）２号溝 n･o －上層遺物出土状況（北から）

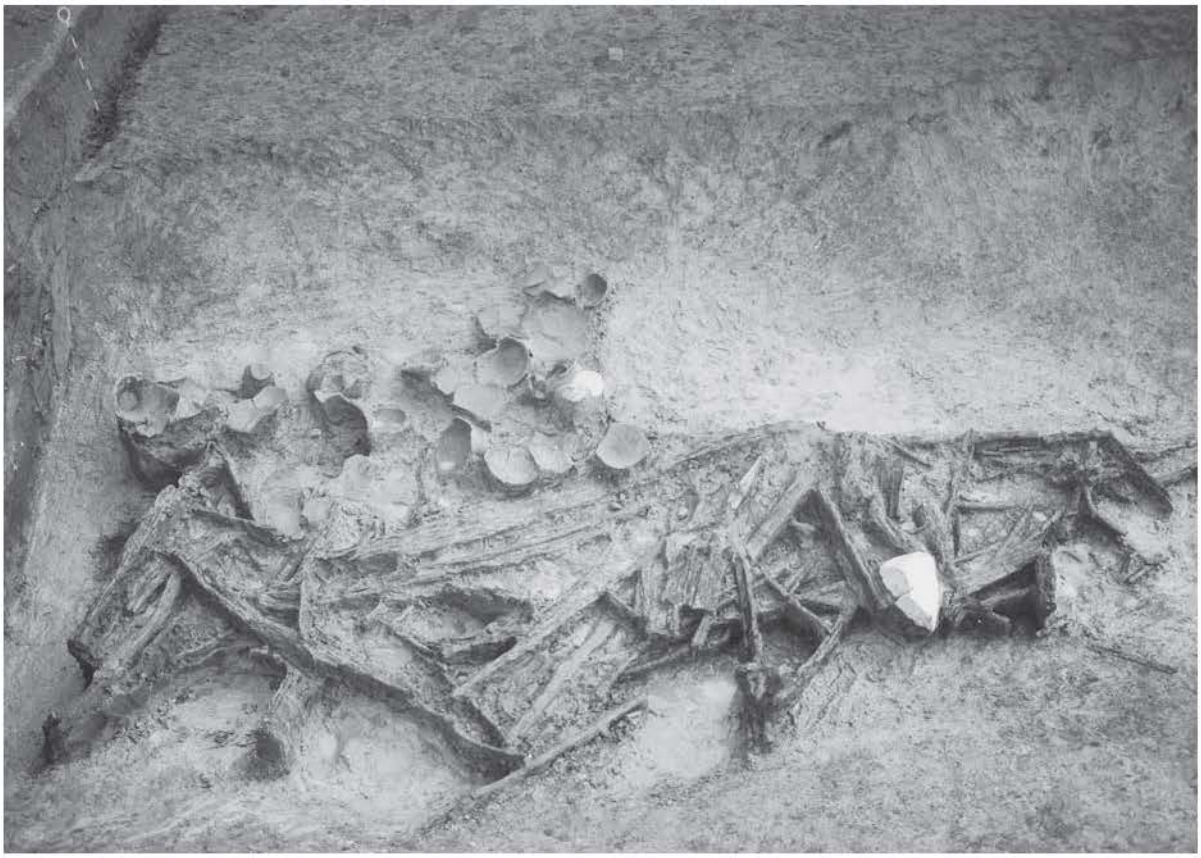
2）２号溝 k･l － 2･3 上層遺物出土状況（北から）

1）2 号溝 j･k － 1･2 中西部上層遺物出土状況（北から）



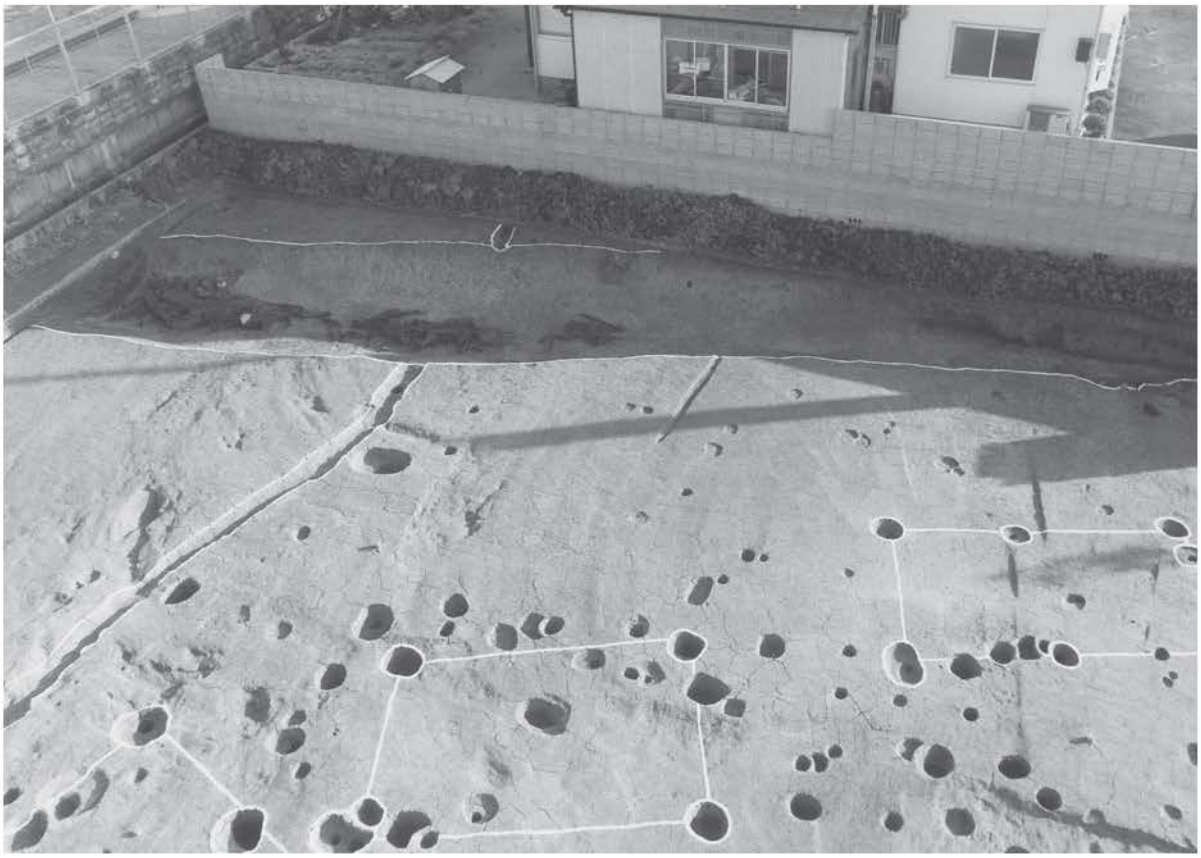
2）2 号溝西半部下層遺物出土状況（東から）

1）2 号溝東半部最下層遺物出土状況（西から）

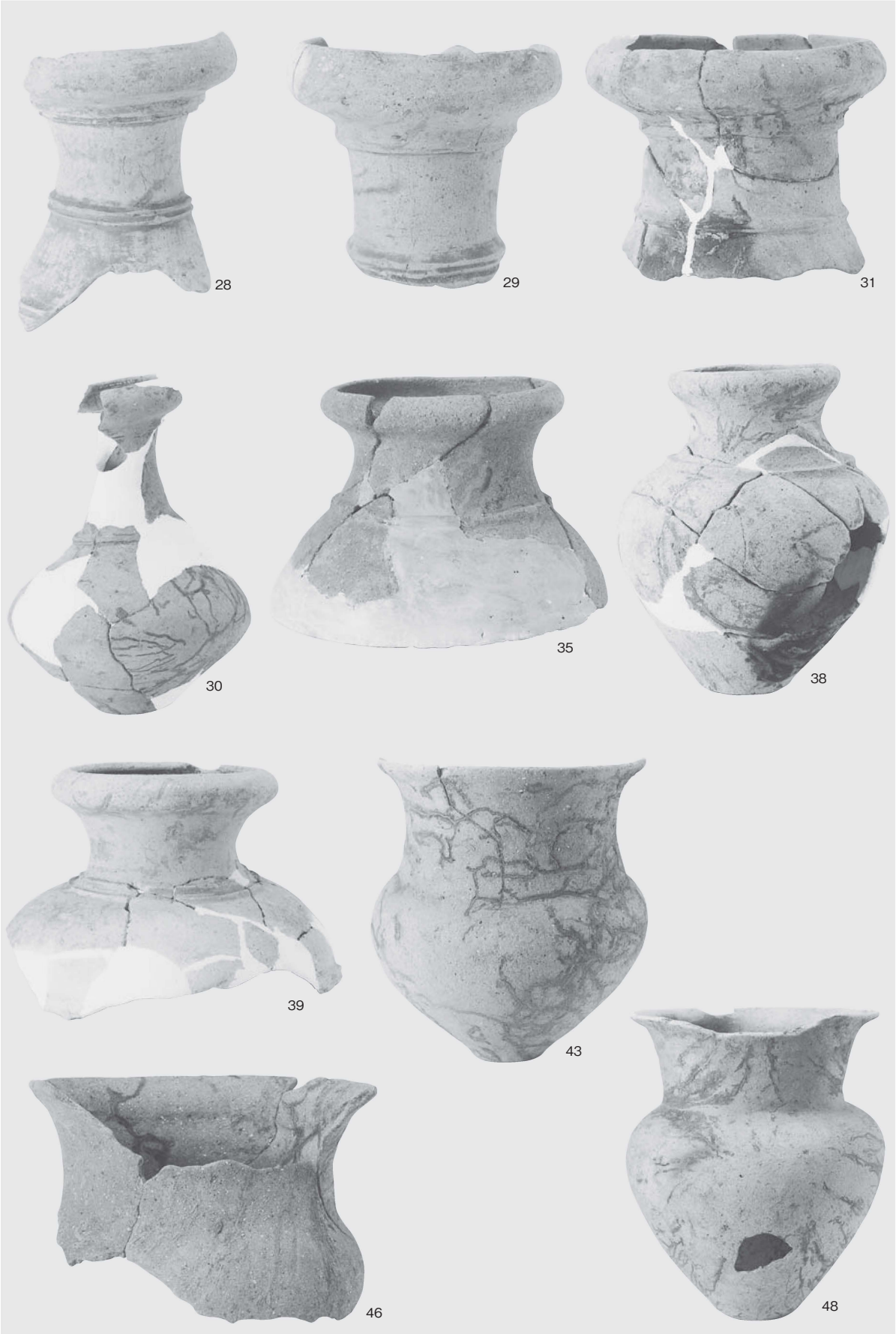


2）2 号溝東半部最下層遺物出土状況（北から）

1）2 号溝最下層杓子出土状況（南から）



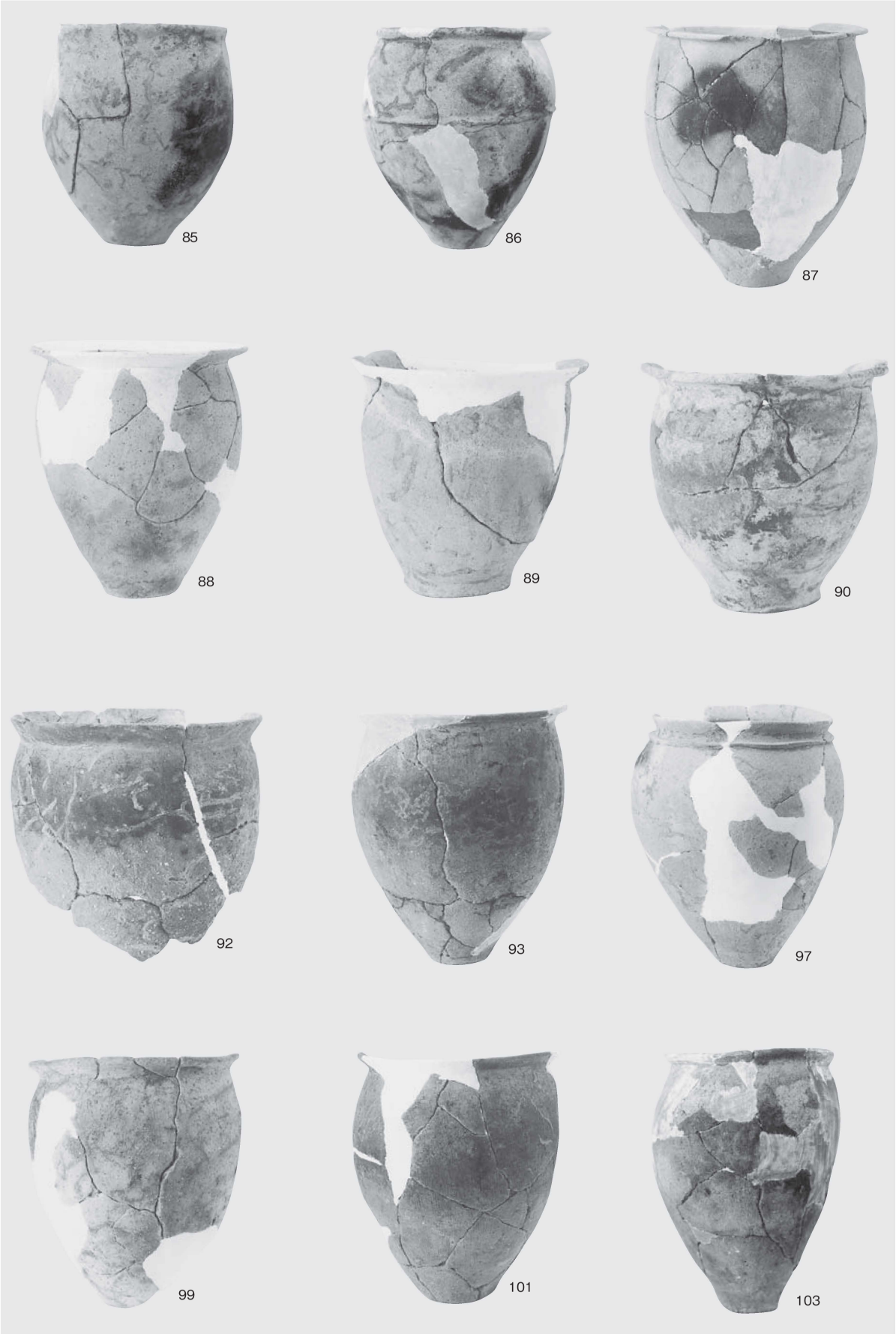
2）2 号溝完掘状況（北から）



出土遺物　1（縮尺不同）

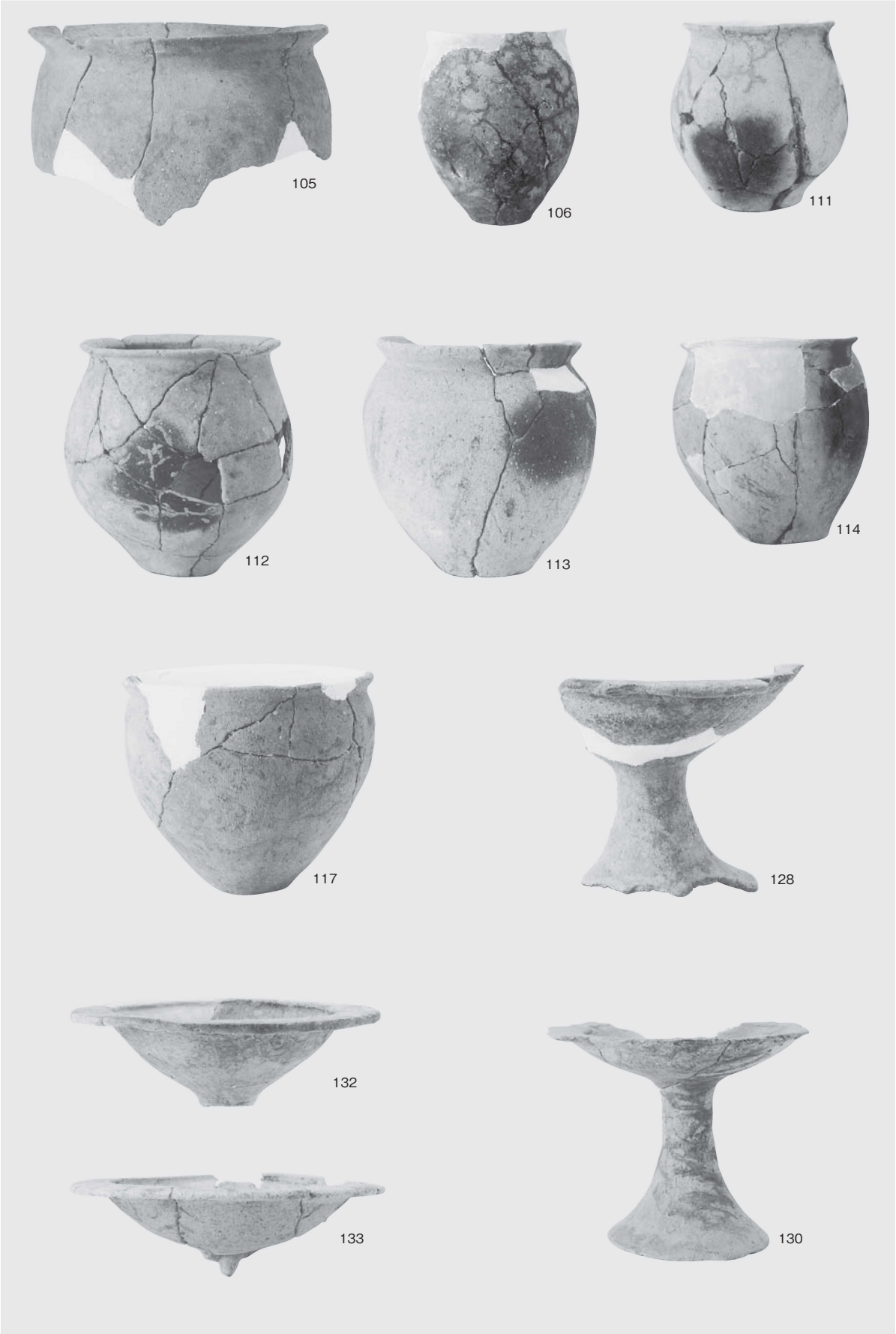
出土遺物　2（縮尺不同）

出土遺物　3（縮尺不同）

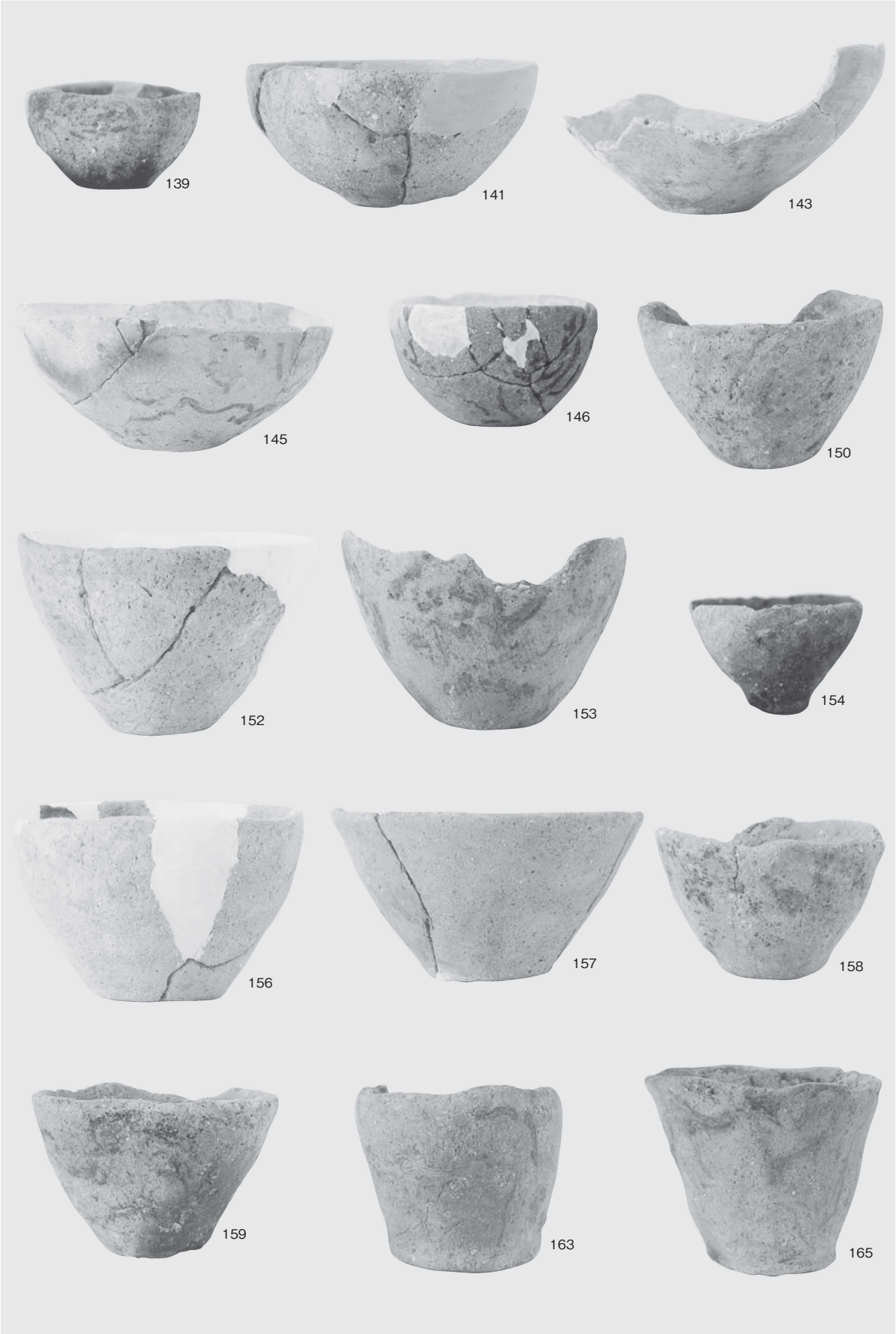


出土遺物　4（縮尺不同）

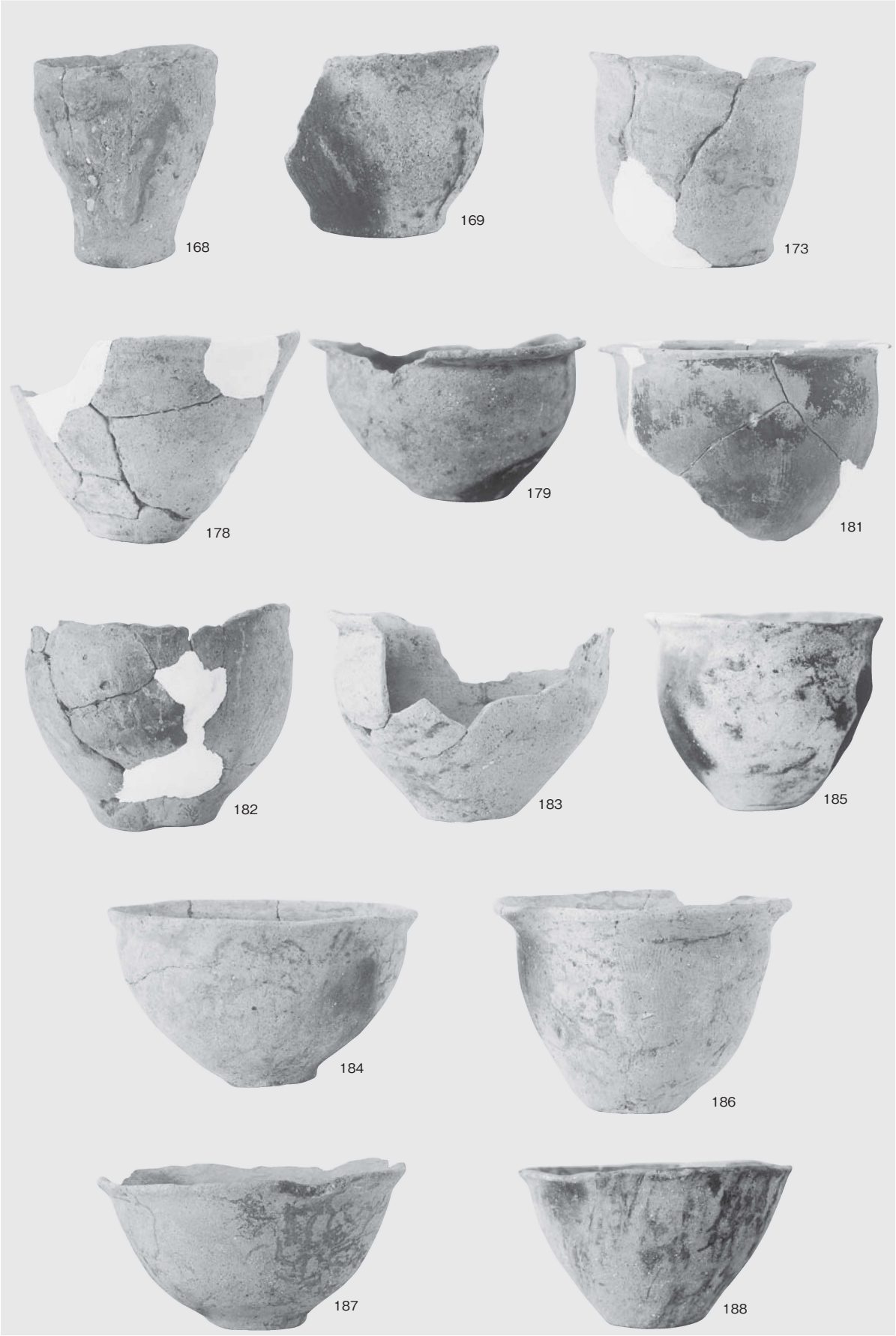
出土遺物　5（縮尺不同）



出土遺物　6（縮尺不同）



出土遺物　7（縮尺不同）



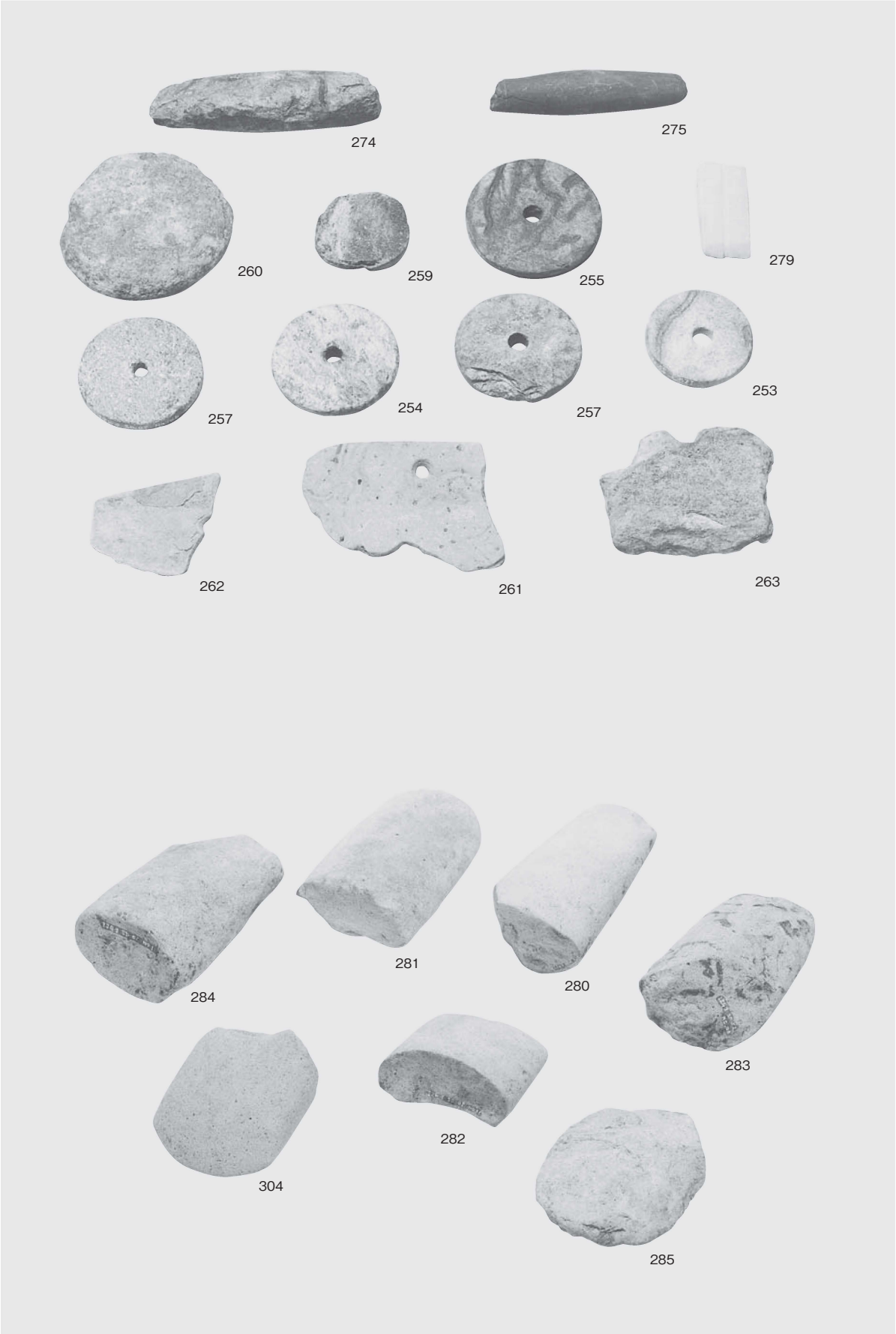
出土遺物　8（縮尺不同）

出土遺物　9（縮尺不同）

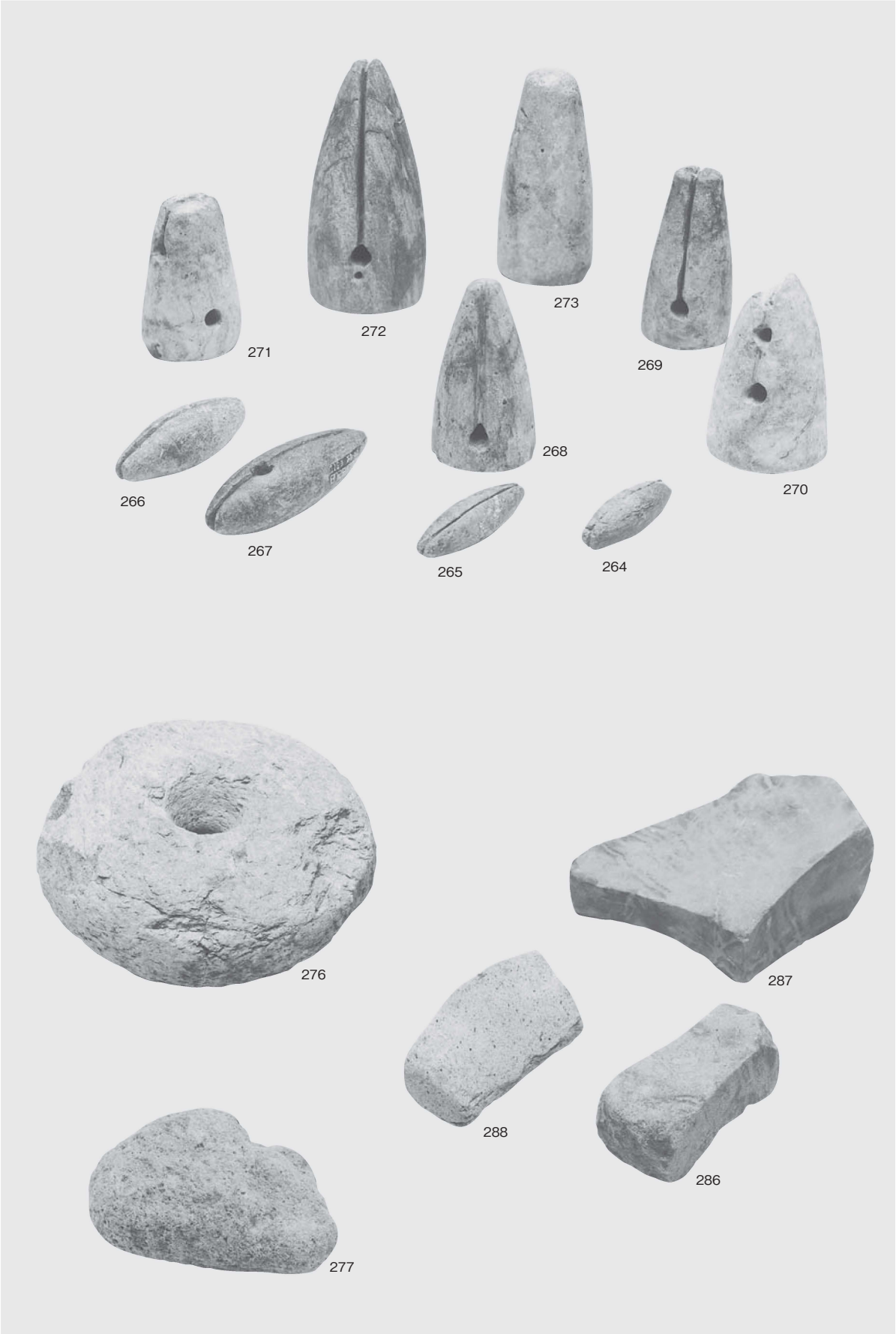
出土遺物　10（縮尺不同）

出土遺物　11（縮尺不同）

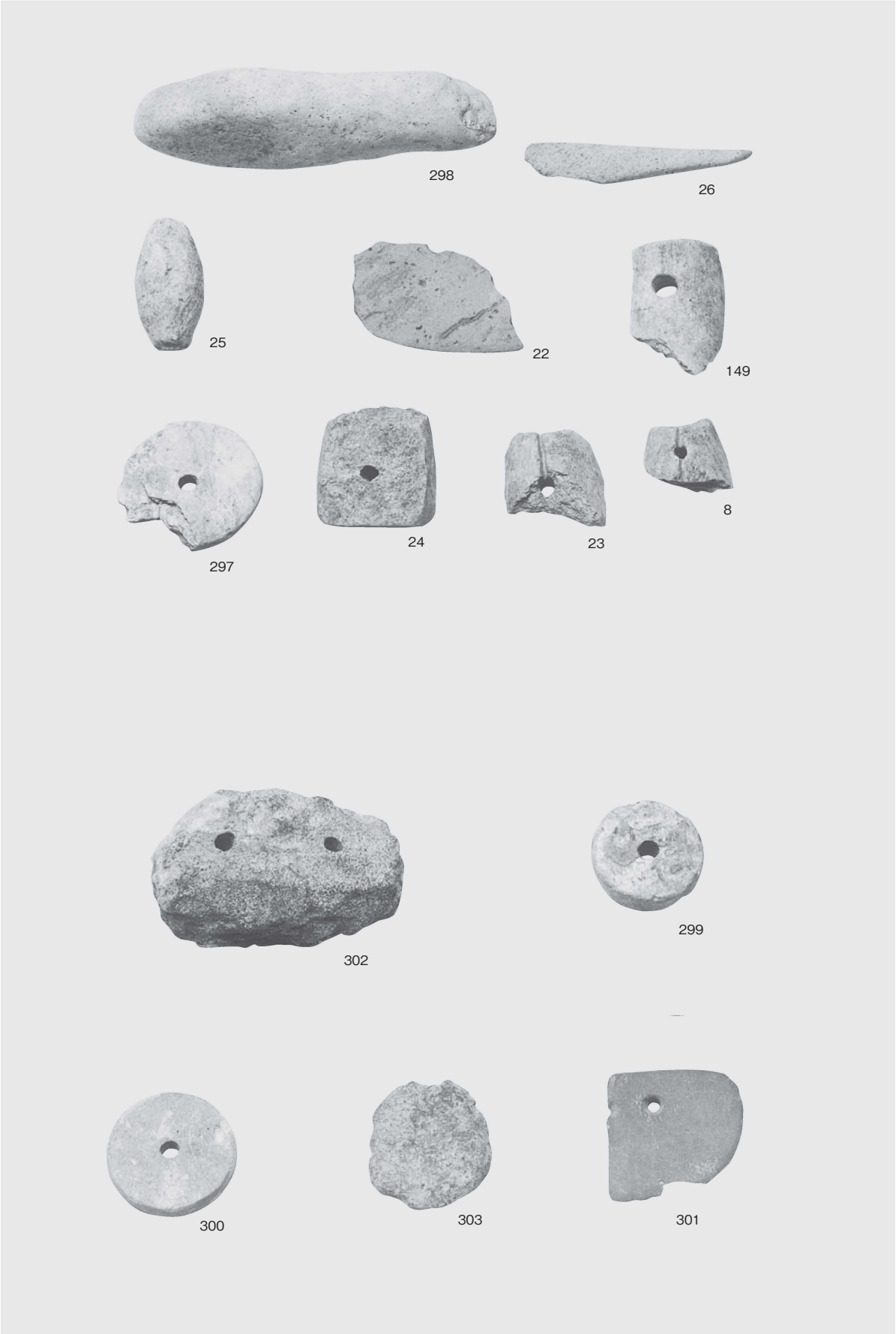
出土遺物　12（縮尺不同）


274
275
260
259
255
279
257
254
257
253
262
261
263
284
281
280
283
304
282
285

出土遺物　13（縮尺不同）



出土遺物　14（縮尺不同）



出土遺物　15（縮尺不同）

出土遺物　16（縮尺不同）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いまじゅくごろうえ12
書 名	今宿五郎江12
副 書 名	今宿五郎江遺跡第3次調査
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第1180集
編 著 者 名	小林義彦 谷 直子
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
発 行 年 月 日	2013年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
いまじゅくごろうえいせき 今宿五郎江遺跡 だい3じちょうさ 第3次調査	ふくおかしにしく 福岡市西区 いまじゅくまちあざまえだ 今宿町字前田96-1、95-2	40130	620	33° 34′ 30″	130° 16′ 34″	19870910 ～ 19871126	900	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今宿遺跡第3次調査	集落	弥生時代、古墳時代	竪穴住居、掘立柱建物柱建物、土壙、溝	弥生土器、石製品、土製品、木製品	

要 約

今宿五郎江遺跡は、糸島平野と早良平野を画する長垂山塊の西麓に拡がる狭長な今宿平野東部の低丘陵上に立地する。本調査区は、この低丘陵のほぼ中央部に位置している。発掘調査では、弥生時代の掘立柱建物群と土壙、溝を検出した。このうち幅が4mの溝は、弥生時代中期末～後期前半のもので、弥生土器や石器などがコンテナ300箱出土した。この溝は、東隣の第5次調査区の溝や西隣の第2次調査区の溝と繋がり、今宿五郎江遺跡が立地する低丘陵を南北に二分するように東西に流れている。この溝の東には低丘陵の外縁に沿うようにして流れる大溝があり、その溝は南へ下って湾曲し、更に西へ続く環壕をなしている。また、本調査区の北東にある第1次調査区では環壕の一部が検出されている。この南北両台地には、掘立柱建物群が拡がっているが、その在り方は小規模な環壕のある北台地と本調査区の溝で隔てられた南台地とでは若干異なる。北台地の小規模な環壕と低丘陵の外縁を巡る環壕との関係と台地を二分する本調査区の溝との繋がりを明らかにすることが、今宿五郎江遺跡の環壕集落の消長を明らかにすることになり、北台地の遺跡の拡がりを知ることが望まれる。

今宿五郎江 12

－今宿五郎江遺跡第3次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告第1180集

2013年（平成25年）3月22日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1－8－1

印刷 ソウヤマ印刷

福岡市博多区中呉服町10－5